

得られる事だらうと思ふ。同時に少し落ちついて味を噛みしめる程の讀者は、それ等のものを貰いて、高い寂しい然し濃かで暖かなヒューメンな心が、慎ましやかではあるが鮮かに流れてゐる事を感じ得る事によつて、比較的容易くこの作者の心の中の藝術家をも捕まへる事が出来るに違ひない。事實「冬彦集」の作者の心の中には、この二人の人間が住んでゐるのである。一般的な考へ方に従へば、科學藝術とは徹頭徹尾相容れないものである。一つのもの存在は必然に他のもの存在を否定するとされてゐる。然し「冬彦集」の場合に於ては、讀者は科學者と藝術家とを同時に意識するに拘らず、何の矛盾を感じないのみか、却つて其處に新しく且複雑な美しさが加はつて來てゐることを確認する。換言すれば「冬彦集」の作者の藝術は、科學と結合する事によつて、他人の藝術に見る事の出来ない、精到と明澄と静寂と自由とを持つてゐるのである。

3 編纂の用意

前二課、一つは飛行機上に於ける景觀と感觸、一つは秋深き庭の敘景といふやうな、敘事・敘景に併せて豐潤な感情をこめた文であつた。本課は一轉して、偶然觸目の事から、深い、しかも興味ある思索に沈潜して行く文である。極端に高尚な、むづかしい思索は中學生には無理であるが、日常折にふれ事に應じて、一步事の深部につ

き入ることはこの年輩の少年にも次第に興味ある事となる。その彼等の心理に投じて興趣を覚えしめ、又思索の方向について一つの指標を與へたいと思ふのである。

4 要旨

精到周密な、例の科學者としての作者の觀察眼は、やゝともすれば誰しも眼をそらさうとする一片の「淺草紙」の上に輝いて、この子細な凝視を遂げ、この奇抜な聯想を起し、この暗示に富んだ文章を成就せしめた。本課に於ては、この作者の物を観る態度について學ぶ所あらしめると同時に、作者の語つてゐる内容そのものについて、或は複雑なる世相の纏綿を考へしめ、或は人間の精神的製作品に於ける獨創乃至天才とその典據乃至資料との關係を思はしむべきである。

5 概説

第一節(一一五頁—一二七頁六行) 病床を出て縁で日向ぼつこしてゐる作者は、ふと、その縁端に落ちてゐる「淺草紙」を認めて、それを拾ひ取つて、その紙面に眼を

注ぐ。

第二節(一一七頁七行—一二一頁三行) 紙の色、両面の滑かさ、稿目、穴、不規則な斑點、紙片の文字、物の破片など子細に觀察する。

第三節(一二一頁四行—一二三頁一行) 以上の澤山な物のかけらの歴史、關係、それが淺草紙になるまでの過程、複雑な世相などについて考へ込む。

第四節(一二三頁二行—一二四頁) この淺草紙が、幾多の材料から製せられることから、人間の精神的作品の過程に聯想を馳せる。それから、

一には、エマーソンの「シェイクスピア論」の言葉を記し、

二には、或盲目の學者のモンテニの研究方法を語つてゐる。そして、獨創・天才を成すものは、典據であり資料であるが、その典據資料をば十分に精選淨化することが大切であるといふのである。

6 取扱上の注意

題して「淺草紙」といふが、全篇の構想上から見れば、

淺草紙の話は客想である。主想は、末段の精神界の製作品品について、その典據又は資料と、これを用ひて作品を成す天才又は獨創との關係を語るところにある。その主想たるや、まだこの期の生徒には、やゝ程度が高いやうにも思はれる。しかし、その點は「淺草紙」といふ卑近な材料を客想に用ひたので、略々作者のいはうとする主は把握せしめることが出来ようと思ふ。

教科書一二〇頁四行「……ついひとりでに笑つた。」の次に、原文には左の一節がある。
 どうしてこんな小片が、よくこなれた纖維の中で崩れずに形を保つて來たものか。この紙の製造方法を知らない私には分らない難問であつた。或は此等の部分だけは油のやうなものが濃く浸込んでゐた爲に、とろけないうで残つて來たのではないかと思つたりした。
 かうして、何でも、分らないながら常に説いて見ようとする心が動いてゐるところに、この作者の科學者らしい態度が見えてゆかしいのである。

元來、獨創の天才を發揮するものほど、他の文獻・資料

に負ふ所の大であることは、何も大して珍しい議論ではないが、この作者が「浅草紙」を凝視して、こゝに話をもつて来たところが、思ひつきといへば思ひつきである。唯「浅草紙」では、どうも凡俗の聯想はよい處へは馳せないの、一寸どうかと思はれる。即ち「浅草紙」でなくとも、他の材によつてもかういふ話は出来さうにも思へるのに、といふ感がないではない。

【ともかくも、自作文に於ける参考文献の利用などについては、早速本課の末段の主旨から、自覺せしめるやうに導き得るのである。

【本文の中で、注意すべき語句の三四を挙げる。

「濕つた庭の土からは云々(一一六頁三行——)この前後は敘景文としても捨てがたいものである。

「私は無我無心でぼんやりしてゐた云々(一一六頁九行——)こゝは、いかにも病人らしい態度と心持とがよく描かれてゐる。前に顔に日光の照りつけるのが「少し痛い程であつた(一一六頁二行)」とあるのも、自己の感覺に忠なる描き方である。

「よく／＼見てゐると(一一九頁二行)この作者は實に物をよく／＼見る人である。よく／＼見なければ、肝要の事も見のがしがちであるが、科學者は平凡と思はれるものでも殊によく／＼見るのである。この「よく／＼見る」ことの大切なことをこの邊で思はしめたい。

「魔術師でない限り云々(一二四頁四行)この起筆の句の面白味即ち含蓄の多いところを、十分に味讀させた

7 設問

1 次の語の訓みと意味とを問ふ。

蒲團。陽炎。荒蕪。警句。挿話。點字。

2 次の語句を解釋せよ。

イ、因果の綱目。

ロ、人間の精神界の製作品。

ハ、最も大いなる天才は最も負債の多い人である。

8 釋義

【浅草紙】 アサクサガミ。渡返紙トカヘシガミの一種。東京浅草邊で多

く製したから名を得た。反古紙・襤褸片の類を水に浸し、臼に入れて搗き碎いて、粘土の一種をまぜて漉きあげたもの。

【陽炎】 カゲロフ。長閑な春の日などに、草原の上や屋根瓦の上などにちら／＼と立ちのぼる氣。

【氣紛れた風】 キマダれたカゼ。何風とも定まらず、時をりいろんな方から吹いてくる風。氣紛れとは、意向の定まらず變化し易いことにいふ。

【鈍い鼠色】 さえ／＼しく引立たぬ鼠色。

【無我無心】 ムガムシン。(一)われをわすれてぼんやりとする事。(二)無我夢中と同じく或物事に熱中して他を顧みぬこと。こゝは(一)の場合である。

【しなぶ】 生氣が盡きて衰へしむこと。しをれ弱ること。衰へて皺が寄ること。

【荒蕪】 アラムシロ。織目のあらひ蕪。

七十一番歌合に、「うちたえて絲目まばらのあらむしろ、いのねらるべき月の影かな」

【紙を漉く】 カミをスク。紙をこしらへる時には、糊状に

なつた原料を水に溶かして、竹の簀の上に敷いて、薄く平たい紙の形に整へる。これを紙を漉くといふ。この漉いたものを乾かすと紙になる。

【裏側の荒い縮は何だか分らなかつた】 漉いた紙を乾かすには、面を平滑にした木板に貼つて太陽の熱で乾かすか、又は適度に熱する装置をもつた鐵板に貼つて乾かすのである。その木板又は鐵板に接した、面は滑かとなつて、紙の表となる。そして貼る時は刷毛を用ひて、平らに皺のないやうに伸ばす、その刷毛で擦つた側は粗糙となつて、紙の裏となる。こゝに裏側の荒い縮といつてゐるのは、その刷毛の痕跡である。

【喰みだした纖維】 ハみだしたセンキ。紙を構成する原料の大部分は植物質の纖維である。浅草紙のやうな粗末なものは、その纖維の刻み方も大さつばであるから、目に見えるほどの大きな纖維がたくさん含まれてゐるのである。

【マッチのペーパー】 マッチの箱の表に貼るペーパー。「ペーパー」はこゝでは、商品に貼付する紙で、商標又は繪

などを刷り出したものをいふ。

【ちらし紙】 広告のためにくぼる引札をいふ。

【おすべ紙】 スベ／＼した色紙。赤・青・黄など種々の色があつて、子供が箱の表をはつたり、切抜きをしたりする紙。

【想像の力で補充されて云々】 實物は微細なのだが、それにいろんな想像をつけ加へて大きいものにして考へて見ること。この意味をこんな簡単な語に言ひ取つたのは辭様の巧みといはねばならぬ。

【盪】 タウ。おしうつる。うごかす。あらふ。つく(盡)。
などの義のある字。

盪漿(水のはげしくつきあたる義)

盪舟(手を以て船を動かしかる義)

盪汰(あらひうるほす)

盪々(廣くして大いなる貌)

盪減(たひらげほろぼす)

等の熟語がある。

【深い謎云々】 淺草紙にはよく有ることだ。元來が漉返し

だから、新聞や雑誌の千切れ屑などがそのまま文字も讀めてゐることがある。尤もそれが完全ではなく、只一つの破片だから、例へば「一同」といふ字などがあると、さて、「何一同がどうしたといふのだらう」と一寸考へて見たくなり、「圓」といふ字でもあれば、「金錢の圓」だらうか、圓滿の圓だらうかなどとあてて見たくなり、「盪」の字などでもあつると、「これは馬鹿にむづかしい字が出た、制限以外の字だらう、して何の字とくつついた熟語だつたらう。腦震蕩の盪は草冠だし、掃蕩の盪も草冠。盪漉なんていふ熟語は今の人も用ひるか知ら」などと首をひねつたり、「蛤かな」でも見つかると、「これはさすがに、ちつとは解けさうな謎だ、蛤の上にきつと蜻の字が有つたに違ない、蜻蛉の句だ、俳句欄のきれでもあらうと、ほど鑑定がつく。まるで皆謎である。

【ボール紙】 厚い板紙で、種類が多い。普通にボールといふのは粗な原料、例へば藁・薪木紙料・反古紙等で製造する。上等の品になれば、表面に印刷し得るために塗滑を施したのものもある。或は、硬質厚紙、或は一枚合はせ、

或は三枚合はせ(中間に劣等原料を入れ、両面に上等紙料を被せて漉く)等もある。

【來歴】 ライレキ。物事の歴て來た次第。由緒。由來。

【物件】 ブッケン。もの。品もの。

【雲母】 ウンモノウンボ」ともいひ、「きら」ともいふ。單斜晶系に屬する硫酸鹽物。底面劈開が完全で、弾性に富み、銀・白・黄・綠・黒・褐色等をなし、閃々たる光澤がある。その晶形は、通常直徑一二寸乃至一尺位であるが、時としては四五尺以上のもある。そしてその劈開が完全であるから、厚さは一時の二十五分の一位にまで薄く割がすことが出来る。白雲母が最も用途廣く、紅雲母等も裝飾などには用ひられる。

【槽】 フネ。製紙の原料を入れる箱形の容器。

【どれ程の複雑な世相が纏綿して居たか】 わづか一枚の紙、しかも淺草紙について、紙の原料の變轉を思ふと同時に人事上の聯想を逞しうした所、實に犀利な觀察といはねばならぬ。

「纏綿」(テンメン)は、まとひつくこと。からみつくこ

と。

【因果の網の目云々】 前の「複雑な世相纏綿」といふ語に繋けて、人事上の複雑な因果の關係に巧みな想像をめぐらした妙趣は、生徒に味ははれるか知ら。「因果の網の目」とは原因に對する結果、物事の因縁といふものが、丁度網目のやうに複雑に、それ／＼思ひもかけぬ諸方面に關係しあつてゐるといふ意味で用ひてゐる。

【こなす】 碎いて細かにすること。粉碎すること。

【過程】 クッテイ。物事のうつりゆく筋道。英語の Process にあたる語。

【人間の精神界の製作品にも云々】 精神界に於ける學說・思想、或は文學作品等も、多くは前人の遺したものを原料としてこれを消化した上に立つて、新しくその個人の考へが加はつて、新しい姿であらはれてくるもので、意識するとせぬとに拘らず、その中には前人の所産が攝取されてゐないものはない。

【聯想】 レンサウ。心理學上で、觀念相互の結合をいふので、或一つの觀念があると、それに關係のある他の觀念

が直に意識に上つて来ることをいふ。

【ハーソン】 Ralph Waldo Emerson 米國の思想家、且、詩人。マサチューセツツ州ボストン生れ。ハーバート大學卒業後牧師となつてゐたが、暫くにしてその職を抛ち、専ら文學に従事し、一八三三年英國に遊び、コルリッヂやウォーヅワースやカーライル等と交はり、歸國後多くの著作を出した。



エマーソンの主張は、當代の唯物主義に代へるに唯心主義を以てし、一切の教義を排して個人の自由を唱ふるにあつた。歴史的基督教の缺點を指摘し、汎神論の基礎に立つて個人性の尊嚴を認め、「人生の目的は、人をして自己を知らしむることなり、最高の默示は神が各人の中にあることなり。」といつた。「エマーソンがシェイクスピア論」とある「が」は所有格の「が」で、「の」の意味である。

【シェイクスピア】 William Shakespeare 英國の大戯曲

家、且、詩人。世界の最大文豪と稱せられてゐる。ストラットフォードの羊毛商に生れ、不十分な教育を受けた。



郷里の學校で、數年間ラテン語やギリシヤ語やフランス語の初歩を學んだ位の事である。勿論、家は父の失敗によつて頗る窮境に陥つたのであつた。一五八六年、倫敦に赴いて俳優となり、次いで専ら劇作に従事した。有名な作は凡そ三十五編、何れも文學上の至寶として尊重されてゐる。

【價値のある獨創は他人に似ないといふ事ではない】 創作物だからとて他人の作品に似たのがいけないといふわけではない、似た點があつても、猶、創作としての價値は十分にあるといふ意味。獨創は英語で Ordinarity

【最も大なる天才は最も負債の多い人である】 總べての人の知識を集めて大成したといふ意味を、かく警句的に言つたのである。すべての人の知識を剝らさず漏さず借りてくる、いはば知識の大債務者である。

【モンテーニ】 Michel Eyquem de Montaigne 佛國の

思想家。モンテーニ城に生れた。文官生活もし、又軍人生活もしたが、四十歳以後にはその郷里に歸つて閑日月を送り、自家の圖書室に入つて讀書と觀察と冥想とに耽つた。後、少しく健康を害したので、佛蘭西の北部やドイツ・スイス・イタリヤ等を巡遊した。佛國のポールド市長



に選ばれたこともある。その著「論文集」が世に出でて、大いに名聲を博した。

【點字】 テンジ。文字の符號として、點を組み合はせて作り、盲人の讀書に供するためのもの。厚い紙を針などで突いて凸起させて作る、盲人はそれを指頭でさぐつて讀むのである。一八三四年、佛人フレシニ氏の發明にかゝり、爾來幾多の進歩改良が行はれてゐる。

【警句】 ケイク。奇抜な文句。眞理を含んだ語句を極めて簡勁に言ひあらはしたものを。格言や諺には往々警句がある。

【挿話】 サフワ。エピソード (Episode) の譯語。談話・文章間に挿む小話題。本題中の小話。一口ばなし。

【典據】 テンキョ。出典といふに同じ。よりどころ。

【類型】 ルキケイ。それに類似した形のもの。

【詮索】 センサク。たづねさがすこと。しらべもとめること。

【文獻上】 ブンケンジャウ。古への制度・文物等に關した學問上のことをいふ。文は典籍、獻は賢者の義。

論語の八佾篇に「宋不^ル足^{スルニ}微也、文獻不^ル足^{スラ}故也。」

【作と作家と云々】 さうこまかく穿鑿するといふことが、その作品と作者とをけなして價値なきものとするにはならないといふのである。即ち他人の知識をどれ位取入れてあるかといふことを調べたからとて、何もその作品や作者の價値をそれによつて判定するのではないといふ意を明らかにしたのである。前の「價値のある獨創は他人に似ないといふ事ではない。」といふ意に應ずる。

【マッチのペーパーヤ……まだ改良の餘地がある】 こゝは單に、浅草紙についての改良を意味するのみではあるま

い。むしろ文藝的作品などについて、このことが暗に示されてあると見た方がよからう。

一七 豊臣太閤

三 上 参 次

1 解 題

豊臣太閤の遺した文書・詠歌等に據つて、彼の優にやさしい側面を紹介し、彼が決して無學文盲でなかつたことを證した評論的傳記文である。

2 作 者

三上参次 ミカミ サンジ

歴史家。慶應元年姫路に生れた。兵庫縣平民幸田貞助の三男。東京府士族三上勝明の養嗣子となつた。明治二十二年帝國大學和文科を卒業し、大學院に入つて國史を専攻した。二十四年文科大學講師となり、翌二十五年女子高等師範學校助教兼文科大學助教に任ぜられ、次いで教授となり、三十二年文學博士の學位を授けられた。現に東京帝國大學名譽教授、帝國學士院會員、臨時帝室編纂官長、維新史料編纂會委員、國寶保存會委員である。

3 編纂の用意

評論的傳記文の模範を示し、兼ねて我が國曠世の英雄たる豊太閤の文藻・雅懷・孝行・恩情等に關する一斑を知ら

4 要 旨

しめて、智徳の修養に資せしめたい。

消極的には、太閤を以て無學文盲であるとした從來の謬説を破り、積極的には、彼の雄略大才の他面に、母には孝行であり、妻子には愛が深く、將卒に對しては最も慈悲の念に富んだ善良な紳士であつたことを論じ、更にその詠歌によつて、彼が克く英雄としての雅懷を有してゐたことを證するのが本文の要旨である。

又、評論的傳記文として、その立論に、その證明に、流石に史學者としての用意周到なところがあり、よく評傳の特質を備へてゐる點をも看過することは出来ない。

5 概 説

全篇の構造 前半(第三節まで)は、太閤を無學文盲なりとする見解の謬れることを論破し、後半は、特に歌詠

に據つて彼の雅懐文藻を説明することを主とした。

第一節(一二五頁—一二六頁二行) 太閤についての従来の謬見——その著しきは、彼を以て無學文盲となす點である。

第二節(一二六頁三行—一二八頁七行) 太閤は決して無學文盲でなかつた——概論的に彼の文書に據つてこれを證明した。

第三節(一二八頁八行—一三〇頁七行) 前節のつゞき——具體的に彼の文を原據としてこれを證明した。

第四節(一三〇頁八行—一三二頁一〇行) 太閤は雅懐を有してゐた——歌詠に據つて證明。

第五節(一三二頁末行—一三四頁) 太閤は文藻に富んでゐた——或時は大宮人の如き趣があり、又或場合には古英雄の横槊賦詩の姿を偲ばしめるやうな豪壯なところがあつた。要するに太閤は無學文盲でなかつた。文書がこれを示すのみならず、彼は學者の説を聴き、禪學の書を講ぜしめたことさへあると結んだ。

6 取扱上の注意

太閤の爲に世俗の謬見を破らうとしても、徒らに感情にさせて聲を大きくするのみであつたら、結局無効であらう。この文のめでたいところは、太閤の自筆の消息と、その和歌を讀者の前に示して、作者は多くを語らず、その確かな證據に太閤自身の面目を語らせてゐる點にある。

評論文の特質は、實にその證據をあげ、且これを證明するところに在るのである。内容そのものを味讀させて、太閤の武人としての雄略大才の裏面に、この人間味の温かさがあつたことを偲ばしめると共に、評論文としてよく行届いた點に注意させて、作文上の指導にも資せられたい。

「然るに、惜しいかな(一二五頁七行)この一語で論題を提示しようとするのであるが、その前の「よく知られた」といふのは、何がよく知られたるかを生徒に問うて見る必要はなからうか。

「磨けば益、光り、鑽れば彌、堅し(一二六頁三行)、これは太閤に限つたことではないが、論文では立論の原理とし

て、かくの如き語を打込んで筆を進めることが必要なのである。

「若くなり給はれ」といふ消息文中の一語を捉へての作者の批評(一二九頁五行)は、萬人の同感するところであらう。

「上られ(一二二頁四行)」「詠まれ(同頁一〇行)の如き敬語法は、聊か唐突の感がする。一體に第四節の「さて太閤の歌は如何に」より以下、文勢が前の各節と違つて來たのは、歌の爲に地の文の調子まで和げられたのであらうか。或は、作者の執筆の時間が違つたのであらうか。前には敬語ぬきの文章であつたのに、急に敬語が交へてあるのは、頭のよい生徒の質問しさうなところである。教授者は豫めこれに備へるところがなければなるまい。

7 設問

- 1 この文の趣意は、一言でいへばどんなことか。
- 2 「磨けば益、光り、鑽れば彌、堅し」とは、何の爲に掲げられた句であるか。
- 3 次の語の意味を問ふ。

- 4 祐筆。消息。御げんさん。辭世。
- 4 豊太閤の歌、一首を誦誦せよ。

8 釋義

【豊臣太閤】 トヨトミタイカフ。豊臣秀吉。幼名日吉丸、通稱藤吉、初め氏を木下といひ、後、羽柴と稱し、更に豊臣と改めた。太閤とは前の關白をいふ。秀吉は天正十三年七月關白となり、十九年職を嫡子秀次に譲つて太閤と稱した。慶長三年(三三六)八月十八日薨。年六十二。大正四年十一月正一位を追贈せられた。

【紹介】 人と人との間に立つてとりもちすること。なかだち。ひきあはせ。

戰國策、趙に「東國有魯連先生。其人在此。勝請爲之紹介、而見之於將軍。」

【眞書太閤記】 十二篇、三百六十卷。作者未詳。但し「重修眞書太閤記」は栗原信充が諸書を参考して公にしたものである。

【繪本太閤記】 七篇、八十四卷。作者未詳。流布本を抄略し、繪畫を添へて平易に書いたもの。

【三國志】 サンゴクシ。通俗三國志をいふ。七十五卷。晉の陳壽撰の三國志(六十五卷)を和譯したもの。魏・吳・蜀三國の合戦の始末、君臣の良否等を詳かにしてある。元祿二年、湖南文山著。後、北齋の畫を加へて再版した。

【漢楚軍談】 通俗漢楚軍談をいふ。十五卷、夢梅軒章峯著。秦の始皇が阿房宮造營の事より、劉邦と項羽との合戦の始末、漢室垂統の事等を詳かに記してある。

【講談師】 講談(講釋)をなす藝人。古は専ら太平記を節おもしろく朗讀したので、太平記讀、又は軍談といつた。回講談の起原は詳かでない。蓋し戰國亂離の後、浮浪の武士どもが軍書・雜史等によつて合戦の勝敗・得失を巧に講釋し、多少の謝儀を請うて生活の助としたことから起り、後一變して太平記讀となり、遂に一の雜伎となるに至つたものであらう。江戸では元祿の頃見附清左衛門を初とするといふ。同じ頃、赤松青龍軒といふものが原昌元と號して古戦記録を講じた。京都では原永揚、大阪では梅龍が世に聞えた。文化年中伊藤燕蒼といふ者が、これに従事すること五十年、遂に大成したといふ。明治時代に入つては松林伯圓・桃川如燕が名人として聞えてゐる。

【種本】 タネホン。著作・講義又は書畫などの據所とする書籍。

【文字なき社會】 學問のない人たちの集り。

【武邊】 ブヘン。武道に係る事。

【誤謬】 ゴビウ。あやまり。まちがひ。吳志の章耀傳に「懼有誤謬、數省讀。」

【無學文盲】 ムガクモンマウ。あきめくら。應筑波集に「文月を詠めぬ人やあきめくら。」

【磨けば益、光り】 吳志の慮翻傳に「美寶爲質、雖磨益光、不足損。」

【鑽れば彌、堅し】 キればイヨ／＼カタシ。「鑽」は金屬に穴を穿つこと。

論語子罕第九に「顔淵、喟然嘆曰、仰之彌高、鑽之彌堅、瞻之在前、忽焉在後。」朱註に「仰彌高、不可及、鑽彌堅、不可入、在前在後、恍惚不可爲象。此顏淵深知夫子道無窮盡、無方體、而嘆之也。」

【雄才大略】 すぐれた心のはたらきと、大きなはかりごと。漢書の武帝紀に「如武帝之雄材大略、不改文帝之恭儉、以濟斯民。」

【規模】 又規摹とも書く。しくみ。仕掛。「規」は謀度。

「模」は形・規・法・講計・考案等の意。禮記の儒行に、「其規模有如此者。」

漢書、高帝紀に「雖三日不暇給規摹弘遠矣。」

【祐筆】 イウヒツ。右筆とも書く。貴人の傍に侍つて、筆札を掌る役人。かきやく。江戸時代に至つて、始めて職名となり、奥右筆・表右筆などといつた。

【太田和泉守牛一】 ホタイヅミノカミウシカズ。尾張國春日井郡の人。信長に仕へ、後に豊臣氏に仕へた。信長記・天正記等の著者。

【大村法橋由己】 オホムラホツケウイウキ。播州三木に居た。花の下の宗匠。法橋は僧位の名、法眼に次ぎ、律師の官に相當する。嘗て柴田勝家に従つたこともある。播州御征伐之事・惟任退治記・柴田退治記・秀吉軍記等を著した。

【雄健】 ユウケン。すぐれて力づよいこと。

朱熹の文に「觀其長篇大句、固自雄健豪逸、磊落驚人。」筆力雄健などと熟しても用ひる。

【生氣】 セイキ。萬物を生ずるいき／＼した氣分。禮記に「季春之月、生氣方盛。」

【色紙】 シキシ。詩歌を書くに用ひる紙。厚い紙を方形に裁つて作り、多くは五彩の模様、金銀箔を施してある。

回もと染色した紙のことであつたが、中古より専ら一種の紙の稱となつた。色染めにした紙の形を屏風・障子その他草子等に押し、これを色紙形といひ、これに詩歌等を書いたことから起つたものであらう。

色紙の紙質・寸法等は古くは定つてゐなかつたが、後世色紙と專稱する一種の料紙が出来てから、漸くその寸法にも自ら一定の法を設けるやうになつた。即ち大色紙は堅六寸四分、幅五寸六分、小色紙は堅六寸、幅五寸三分と定つた。

【短冊】 タンザク。和歌・俳句等を書くに用ひる紙。厚い紙を、堅一尺一寸五分、幅一寸五分に裁つて作り、多くは面に彩色を施し、或は金銀の箔を施してある。

短冊は、タンジヤクともいふ。これを和歌の料紙に専用するやうになつたのは中古の事で、その寸法・文采等に一定の法式を立てたのは近古の事である。然し汎く短冊を用ひたのは古いこととて、その文字は短籍・短策・短尺とも書く。日本書紀・續日本書紀には、狭小の紙片に畫し、これを懸つて籤となし、以て吉凶を卜し、以て物を賜ふの用に供した事を記してある。これ一種の短籍で、之をヒネリブミと調じてある。和歌の料となつたのは後の事であらう、拾玉集卷七に、短冊と

肩に書いて立春の歌を記してある。この歌は短冊に書いたといふことであらう。さらばこれが始めてであらうか。或説に嘉暦年中に二條家の爲世卿と頼阿法師とが相談して短冊の式をたてたといふ。

【消息】 セウソク。消息文といふ語の略。古語では、せうそこ・せうそこぶみともいふ。書簡。

元來消息といふ語は、やうす・ありさま・たより等の義で、それを通ずる文ゆゑに消息文といつたのである。

晋書の陸機傳に「我家絶無書信、汝能書取消息不。」とあるから、支那でも晋信の義に用ひたと見える。

【大政所】 オホマンドコロ。攝政關白の母の尊稱。大北政所の略。攝政關白家の妻室を北政所といふに對する語。

秀吉の母は初め尾張國愛知郡中村の木下彌右衛門に嫁して、秀吉及び瑞龍院尼を生み、夫の死後同村の筑阿彌を後夫となし、秀俊及び南明院（家康に嫁す）を生んだ。

秀吉任官記、天正十二年三月十日内大臣に任ぜられた條に、「其後大阪立勅使、以御寮所任北政所、以母儀任大政所」とある。

【淺野氏】 尾張中村の杉原某の二女、淺野長勝の養女となつて、秀吉に嫁した。後、北政所と稱した。

【淺井氏】 淺井長政の長女、名は茶々。母は織田信長の妹、小谷の方と稱した。長政が亡びて後、小谷の方は三女を携へて柴田勝家に再嫁したが、勝家が敗るゝに及んで共に自害した。秀吉はその三女をとつて養育した。長女は即ち淀君である。淀君は後秀吉の側室となつて、秀頼を生んだ。

【秀頼】 小字は捨丸。秀吉の第二子。六歳家を嗣ぎ、遺命によつて徙つて大阪に居た。關が原の役後、攝・河・泉の六十萬石を食んだ。元和元年（二一七五）大阪夏の役、城陥つて淀君と共に自殺した。年二十三。

【清婉】 セイエン。清くあてやかなること。北史の温子昇傳に「博覽百家、文章清婉。」

【秀潤】 シウジュン。すぐれてつやのあること。圖繪寶鑑に「秀潤可喜。」

【讚美の辭を云々】 さういふ讚美の辭を無理に附けるわけにはゆかぬが。

【圓熟】 エンジュク。穩かにして角立たず、上手で慣れて

つて、秀吉に嫁した。後、北政所と稱した。

【淺井氏】 淺井長政の長女、名は茶々。母は織田信長の妹、小谷の方と稱した。長政が亡びて後、小谷の方は三女を携へて柴田勝家に再嫁したが、勝家が敗るゝに及んで共に自害した。秀吉はその三女をとつて養育した。長女は即ち淀君である。淀君は後秀吉の側室となつて、秀頼を生んだ。

【秀頼】 小字は捨丸。秀吉の第二子。六歳家を嗣ぎ、遺命によつて徙つて大阪に居た。關が原の役後、攝・河・泉の六十萬石を食んだ。元和元年（二一七五）大阪夏の役、城陥つて淀君と共に自殺した。年二十三。

【清婉】 セイエン。清くあてやかなること。北史の温子昇傳に「博覽百家、文章清婉。」

【秀潤】 シウジュン。すぐれてつやのあること。圖繪寶鑑に「秀潤可喜。」

【讚美の辭を云々】 さういふ讚美の辭を無理に附けるわけにはゆかぬが。

【圓熟】 エンジュク。穩かにして角立たず、上手で慣れて

つて、秀吉に嫁した。後、北政所と稱した。

【淺井氏】 淺井長政の長女、名は茶々。母は織田信長の妹、小谷の方と稱した。長政が亡びて後、小谷の方は三女を携へて柴田勝家に再嫁したが、勝家が敗るゝに及んで共に自害した。秀吉はその三女をとつて養育した。長女は即ち淀君である。淀君は後秀吉の側室となつて、秀頼を生んだ。

ゐること。

圖繪寶鑑に「古人筆法圓熟、用意周到。」

【峻拔】 シュンバツ。高くぬきんでゐること。

【無下に】 ムゲに。一概に、又は一向に。それより下は無し、至極などの意。

【崩し方】 字體をくづして草書にかくことを崩すといひ、その方法を崩し方といふ。

【江村專齋】 エムラセンサイ。京都の醫。名は宗具。專齋は號でもあり、通稱でもあつた。別に倚松庵といふ號もある。醫を以て肥後の加藤清正に仕へたが、加藤の亡後京都に歸つた。年百歳、視聽衰へず、後水尾上皇は召見して之に鳩杖を賜つた。子孫は、これを榮とし、賜杖の二字を講堂の名とした。寛文四年（三三四）歿。年百二十。

【老人雑話】 寫本二冊。江村專齋の雑談をその孫宗恕の筆記したもの。正徳三年滄州の序、寛永七年玄都の跋等がある。近年史籍集覽の中に収めた。

【とみには】 急には。漢字では「頓」の字をあてる。

【咄嗟】 トッサ。しばし。ちよつと。たちどころ。

晋書の石崇傳に「爲客作豆粥、咄嗟便辨。」

【洗煉】 センレン。物を水で洗ひ又は火で煉る如くに、思想・才藝・伎倆等を吟味し、又は詩歌・文章の字句などを丁寧に推敲することにいふ。

【天真爛漫】 「天真」とは生れたまゝの純粹の性をいふ。淮南子に「所謂天者、純粹樸素、質直皓白、未始有與雜糅者、斯其真也歟。」

「爛漫」は物のみちて溢れようとする貌。莊子に「大徳不測、而性命爛漫矣。」

六朝以後漫を漫に謬り用ひたことが品字箋に見えてゐる。

【凝滯】 ギウタイ。かたまりとゞこほつて、すら／＼と通らぬこと。

【津々】 シンシン。溢れる貌。莊子の庚桑楚に「其中津々乎猶有惡。」

【ゆさん】 遊山。櫻狩・紅葉狩・茸狩などして山に遊ぶこと。轉じて、すべて外に出て遊ぶことをいふ。

【げんさん】 見參。一に「ゲザン」ともいふ。お目にかゝ

ること。高貴の人の前に参つて對面すること。

妻に對しても丁寧な語を用ひたのである。

【ひまあげ】 ひまをあけて。ひまを都合つけて。

【心やすく候べく候】 「安心なさるべく候」といふに同じ。

【口授】 クジ。口づからさづける。

【多少】 タセウ。いくらか。多の字にのみ重點を置くこともあるが、こゝはさうでない。

【撥亂反正】 ハツランハンセイ。亂世を治めて正道にかへすこと。

「撥」は説文に「治也。」

公羊傳の哀公十四年の條に「撥亂世、反諸正、莫近於春秋。」

【古文書】 コモンジ。古い文書記録。

○我が國に於ける史料として古文書蒐集の沿革を略説すれば、寛文四年徳川幕府が本朝通鑑の編纂に際し、大小名・旗本及び諸國社寺に諭して、所藏の文書記録を進達せしめたのが一番初めである。尋いで徳川光圀は大日本史を編纂するに當つて、侍臣を各地に派遣して古文書を採集せしめ、南行雜錄・西行雜錄等を編した。又將軍吉宗は青木昆陽を關東その他に遣はして古

文書を採集せしめ、八州古文書及び諸州古文書等を編した。

しかし、古文書に對する科學的研究の試みられたことはなかつたが、維新後、太政官に修史局を設け、國史編纂の業が開かれ、官命によつて全國の文書を採集し、更に局を帝國大學に移し、その業を繼續するに及んで、全國の古文書の集るもの九萬通の多きに達し、重野・星野・久米の三博士が専らその研究と適用とに力を用ひた。

抑古文書は筆墨淋漓、手蹟なほ新にして、これを展覧するの際、恍惚としてその人に接し、その行事を目撃するの感がある。その精確なことは普通の戦記物の比でない。古文書學の勃興は實に我が國史界に於ける新福音といつてよい。

【禁中】 天子のおはします所。禁闕。禁裡。宮中。内裏。

【九重】 九天に擬して王城の門を九重に作られたるより、宮中のことを九重といひ、國語にコ、ノへと訓ずる。

駱賓王詩に「山川千里國、城闕九重門。」

【正親町天皇】 オホギマチテンノウ。第六代。後奈良天皇の皇子。御諱は方仁。四十二歳で即位あらせられた。在位二十九年。改元すること三たび、永祿・元龜・天正といふ。天正十四年位を周仁親王に譲りたまひ、文祿二年崩御。壽七十五。天皇御在位の當時は戰國争亂の餘波を受けて、皇室の式微の最も甚だしかつた時である。

【忍びつゝ霞とともに云々】 一首の意は、「人知れず霞と共に

に櫻の木の下に立つて花を眺めてみましたところ、霞中の花が人目につくやうに、たうとう陛下のお目にとまりましたはい。」

「天正十四年の春、太閤禁裏の櫻を垣間見せられしに、主上より一首の和歌を櫻の枝に附して下し賜はれる折の御返しなり。」と御湯殿上日記に見えてゐる。

【北山】 キタヤマ。京都市右京區衣笠村大字北山。鹿苑院の金閣があるので世に聞えてゐる。



【龍安寺】 リユウアンジ。京都市右京區仁和寺の東北にある臨濟宗の名刹。山號は大雲山。

僧義天開基、細川政元創建。その父勝元の墓所。勝元はこの地の泉池を賞し、これを徳大寺家より譲り受けた

といふ。寺背を衣笠の主山といふ。六代の御陵がある。

【最中】 モナカ。まつさいちゆう。

【枝垂櫻】 シダレザクラ。櫻の一種。枝が下垂する特性がある、觀賞用として栽培せられる。

【淡雪】 アハユキ。あは／＼しくて消えやすい雪。

【時ならぬさくらの枝に云々】 一首の意は「春の最中櫻の枝に時ならずふる雪は、定めし花を待ち遠しく思つて、それを誘ひに來たのであらう。」

【文祿】 ブンロク。後陽成天皇の御代の年號。その三年は皇紀二二五四年に當る。

【吉野】 大和國吉野郡吉野町。人口四千。旅亭・酒家等があつて、觀客の便をはかつてゐる。年々の花候には四方の觀客が簇り至る。

凡そこの山の花は一時に開かず、上中下の候がある。大概立春から六十五日に當る頃を最中とし、麓の花が過ぎて中途の花が盛になり、中途の花が過ぎて上の花が開く。その間三十日許。昔から櫻樹は一切伐採させない。これを伐採すると藏王權現の祟があると傳へてゐる。

吉野山の名は舊事紀に「茅渟縣大陶祇女、隨^ヒ絲尋^ル人、入^リ吉野山^ニ留^ル三諸山^ト」とあるのが最も古い。

【關屋の花】セキヤのハナ。吉野の山口、六田より三十三町目に橋がある。これを渡ると程なく吉野町の總門に達する。この間の櫻を關屋の花といふ。

【吉野山たれとむるとは云々】一首の意は「誰も我を引きとめるといふではないけれど、この吉野山の飽かぬ眺めをめでて、今宵も亦花の下陰に宿を借らう。」

【藏王堂】ザワウダウ。又金峯神社ともいふ。金峯山の下にある。吉野金峯の鎮守神、僧家はこれを神佛兩部に祭り金、剛藏王權現といふ。延元の亂、勤王の將士は帝駕を奉迎して行在を寺中に置いた。正平三年正月、高師直、師泰が來り犯し、行在及び祠宇を焼いた。後世再興したが、尙廣壯の建築である。銅造の鳥居は高さ二丈五尺、發心門といふ。本堂は十七間四面。康正元年(足利義政時代)再興し、天正十九年(豊臣の時)大修繕を加へたといふ。

【歸らじとおもふ家路を云々】一首の意は「花を見捨てて家路に歸ることはすまいと思つてゐたのに、入相の鐘が



の舊名であらう。山部赤人の歌に奥津島とも玉津島山ともあつて、古來風景絶佳の地である。島中の玉津島神社には、衣通姫(允恭帝妃)を祀つてあるといふ。

【小田原陣】ヲダハラチン。天正十三年、秀吉關白となるや、威天下に震ひ、諸侯皆來服したが、獨り、北條氏政のみ應じなかつたから、秀吉は大軍を率ゐてその小田原城を攻めた。時は天正十八年八月三日であつた。小田原は今の神奈川県小田原町、人口凡そ一萬七千、箱根の谷口にあたり、丘を負ひ、海に面してゐる。

【清見潟】静岡縣庵原郡、今の興津町の南、清水港の古名で、特に淨見崎と三保崎との間の港灣をいふ。

【征韓の役】文祿元年四月、太閤は肥前國名護屋に至り、營を定めた。これより先諸將の部署を定め、小西行長・

恨めしくも我に歸路を促すことかな。」

【巧を弄ぶ】技巧を弄すること。わざと巧みにしようつとめること。

【なか／＼に】却つて。

【雅趣】ガシ。風雅なおもむき。

【格調】カクテウ。こゝは歌の格調、即ち歌のすがたや調子をいふ。

【撰集】センシフ。詩歌・文章などを勅撰又は私撰すること。又、その集。古の撰集といへば、萬葉・古今・新古今などの歌集をいふ。

【紀州征伐】天正十三年三月十一日、太閤は兵十萬を率ゐて紀伊の根來寺を伐つた。同二十三日賊徒敗走。太閤は火を放つて伽藍を焼いた。賊徒は盡く平定した。

【和歌浦】ワカノウラ。和歌山縣海草郡雜賀崎(サイガミサキ)から毛見崎まで、即ち和歌浦町と紀三井町との間の江灣をいふ。一に明光海に作る。有名な勝地で、古來詩歌にうたはれてゐる。今は大半田畝に化した。

【玉津島】タマツシマ。和歌山縣和歌浦町の南なる妹脊山

宗義智等はまづ發し、加藤清正・鍋島直茂等は次いで發した。嚮ふ所敵なく、二年五月一旦和議が成つたが、慶長元年九月封冊の事から破れて、再征の議を決し、同年出征し、大いに明軍を破つた。同三年八月、太閤薨するに及び、遺命して在韓の諸軍を撤せしめた。十月、行長等は明軍と講和し、諸將相繼いで歸朝した。



【名護屋】ナゴヤ。又、名古屋・那古耶とも書く。肥前國(佐賀縣)東松浦郡呼子村の西に接する海村。文祿中豊太閤征韓の役の行營地。前面に加部島が横たはり、波戸崎が西北に延伸すること一里。埦頭に馬渡島・加唐島が見える。

【天正十六年】天正は後陽成天皇の御代の年號、その十六年は皇紀二二四八年に當る。

【聚樂第】ジュラクテイ。京都に於ける豊臣太閤の邸宅。

その壘郭は城制で、その宮殿は第宅である。西に諸大名の邸を構へた。天正十二年に落成、十五年九月十三日太閤は大阪から移り住んだ。十六年四月十四日後陽成天皇の行幸があつた。後秀次がこゝに居たが、文祿四年これを廢毀した。寛永以後第址を開いて民家とした。近傍共に百二十町、俗に聚樂組といふ。
今の日暮通・本丸町・洲濱町・山里町・常陸町・藤五郎町はその址だといふ。



【醍醐】ダイゴ。醍醐寺。

京都市伏見區醍醐に在る。理源大師の所開。寺境は上下に分れてゐる。上醍醐は醍醐山の上で、下醍醐を去る二十町。下醍醐は醍醐山の西麓で、そこなる櫻樹は豊臣氏の植ゑた遺種だといふ。慶長二年三月十五日、太閤

はこゝで花を觀た。秀頼・夫人及び姬妾等皆従ひ、目ざましいものであつた。

【大佛】奈良東大寺・鎌倉淨泉寺・京都方廣寺の大佛、世にこれを日本の三大佛といふ。こゝのは方廣寺の大佛である。方廣寺は古の六波羅殿址で、六條の末にあたり、南は七條の末に至る。近年その南方は博物館の敷地となつた。天正十四年に太閤の創建した大佛は丈六の坐像であつたが、慶長元年七月の地震に破壊した。次いで秀頼はその再興を企てたが、未だ完成せぬうち、慶長七年火災にかゝつた。同十五年又工を起し、十七年に竣工した。大佛は始め木像であつたが、この時銅像に改めた。

【大宮人の昔を偲ばしむ】昔の公卿が花に吟じ、月に詠じたその當時を思はせる。

「大宮人」とは禁中に仕へる人の總稱。

新古今集、春下、山部赤人の歌に「も、しきの大宮人はいとまあれや、さくらかさして今日もくらしつ。」

【横槩賦詩】ワウサクフシ。魏の曹操が戰場で、槩(ホコ)を横たへて詩を賦したといふ風流の故事。

唐書の杜甫傳に「曹氏父子、鞍馬間爲文、往々横槩賦詩。」
赤壁の賦にも、これを引いて「横槩賦詩、固一世之雄也。」とある。
【功成り名遂ぐ】功業が成就して、名を天下に掲げる。老子に、「功成名遂身退天之道也。」
【千古の偉人】センニのキジン。永遠の末まで名の残る偉人。「千古」は永遠の義。
【無常】ムジャウ。佛教の語。生滅輪廻して常なきをいふ。人生のはかないこと。
涅槃經に「世尊説無常偈曰、諸行無常、是生滅法、生滅滅爲、寂滅爲樂。」とあり、いろは歌はこの偈の意を譯したものである。「諸行」とは一切萬物をいふ。
古今集に「世の中は何か常なる飛鳥川昨日の淵ぞ今日
は瀬となる」
【露とちり雫ときゆる云々】一首の意は「露の如く、はた雫の如く、散り且つ消えるはかないこの世に、何とてかくは名残の惜しまれることであらう。」

【慶長三年】後陽成天皇の御代。皇紀二二五八年に當る。
【薨去】コウキ。貴人の逝去をいふ。
現今我が國では、左の用別がある。

薨去——皇族方又は三位以上の人の死にいふ。

卒去——五位以上四位までの人の死にいふ。

死去——一般の人の死にいふ。

逝去——一般の人の死に用ひながら、多少の敬意を含む時にいふ。

【露とおち露と消えにし云々】一首の意は「あはれ我が身のはかなさよ。これを譬へれば、恰も草花に置く露のやがて消え失せるやうである。往事を顧みれば、己れ大阪に居を占め、天下の兵權を一手に握り、餘威の海外に及べるも、只茫として夢又夢の如くである。」

この歌、木下家に傳はつてゐるものだとかいふ。自筆で短冊に見事に書かれてある。尙短冊には、上の句の終りに「松」の一字が記されてある。これは太閤が和歌に用ひた名で、その詠草にはいつも「松」とばかり書かれたといふことである。

普通には「露とおき……」として傳はつてゐる。

【辭世】 ジセイ。世を辭する意。人の臨終の際に遺す詩歌をいふ。少し文筆あるものは、辭世を留めること、古今を通じての風俗である。

回伊藤仁齋が曾て或寺の古徳の辭世の頌を見て、かく斜に文字のたしかでもないのを強ひて書かなくてもよからうにと笑つたといふ。辭世の代作を頼み、辭世の添削を乞ふといふものさへ出来た。をかしいことである。

昔何某といふ狂歌師が、臨終にあたり、「預り申す辭世の事」と端書して、在原業平の「終に行く道とはかねて聞きしかど」の歌を書き、さてこの世の借納めなりと云つたとか、狂歌師に相應した所行である。

【伊達政宗】 ダテマサムネ。幼名は梵天丸。永祿十年羽前國米澤に生れ、元服して政宗と名づけた。天正十年封を襲ぎ、威を陸奥に振うた。

小田原の役、秀吉に謁し、米澤三十萬石を賜ひ、侵地は返さしめられた。

文祿の役、秀吉に従つて名護屋の行營に居り、尋いで海を渡つて蔚山を攻め、晉州城を抜いた。

關が原の役、家康は政宗をして上杉景勝に備へしめた。

慶長七年警手澤城が出来てこゝに居り、仙臺と改めた。

政宗は大志のあつた人で、その臣支倉常長を羅馬に遣はし、陽に洋教を信するやうに見せて、實はその國勢の強弱を察せしめた。支倉が歸るのを見ないで寛永十三年（三六）薨じたのは惜しいことである。年七十。茶事を好み、又詠歌をも善くしたといふ。

明治三十四年正三位を追贈せられ、大正七年更に從二位を追贈せられた。

【細川忠興】 ホソカハタマオキ。幼名與一郎。父藤孝と共に織田信長に仕へて功を立て、丹波に封ぜられた。

小田原の役には韭山城を圍んだ。關白秀次が罪を獲たとき、忠興も連坐せられようとしたが、家康の辯護で無事にすんだので、深く家康を徳とした。

關が原の役、忠興は先鋒となつて功あり、豊前國四十萬石に封ぜられた。大阪冬の役には命を受けて島津氏に備へ、夏の役には、輕舸を飛ばして來會し、大いに功を立てた。元和五年、入道して宗立又三齋と稱した。正保二年（三〇五）薨じた。年八十二。

忠興は學を藤原惺窩に受け、和歌を善くし、又頗る武事にも通じてゐたといふ。

大正四年從四位に追贈せられ、同十三年二月更に正三位を追贈せられた。

【文藻】 ブンサウ。文も藻もともに「あや」詩文の才をいふ唐書に「有文藻智數。」

【鐸々】 サウ／＼。よく鍛へた金錢の響、又はよくさえた樂器の音の形容、轉じて、衆人にすぐれた者の形容。こゝはその意。

後漢書の劉盆子傳に「帝謂徐宣等曰、卿所謂鐵中鐸鐸、庸中佼佼者也。」

劉禹錫の詩に「比瓊雖碌々、于鐵尙鐸々。」

【禪學】 ゼンガク。禪宗の學問。禪とは禪那、即ち Dhyana の略。通常、「靜慮」と譯されてゐる。靜かに慮つて自家の心性を徹見し解脱することをいふ。

【目撃】 モクゲキ。「撃」は字典に「觸也」とあり、又品字箋には「目撃猶言瞥見。」とある。直接目に觸るゝこと。

正しく目に認めること。

莊子の田子方に、「若夫人者、目撃而道存矣。」
浦島年代記、四に、「目撃一瞬のそのうちに、かくばかりかはる人の浮世。」

9 挿圖

聚樂第

釋義中の「聚樂邸」參看。

筆者未詳

豐臣太閤肖像

伯爵伊達宗彰藏

筆蹟

豐臣秀吉の自筆と断定せられる手紙の一部。

醍醐の花見

秀吉が醍醐に花見をしたさまを描いたもの。筆者は明らかでない。原畫は醍醐花見屏風と稱せられるもの。向つて川の左岸、女房のさす傘の下に立つてゐるのが秀吉である。秀吉はこの年（慶長三年）八月に薨去したが、この繪で見ると、だいぶ衰へてゐるやうに思はれる。その左下の老婦は北政所でもあらうか。

一八 曾呂利が頼才

1 解題

常山紀談の中の一編で、原本には「曾呂利新左衛門屋、頼智の事」と題してある。

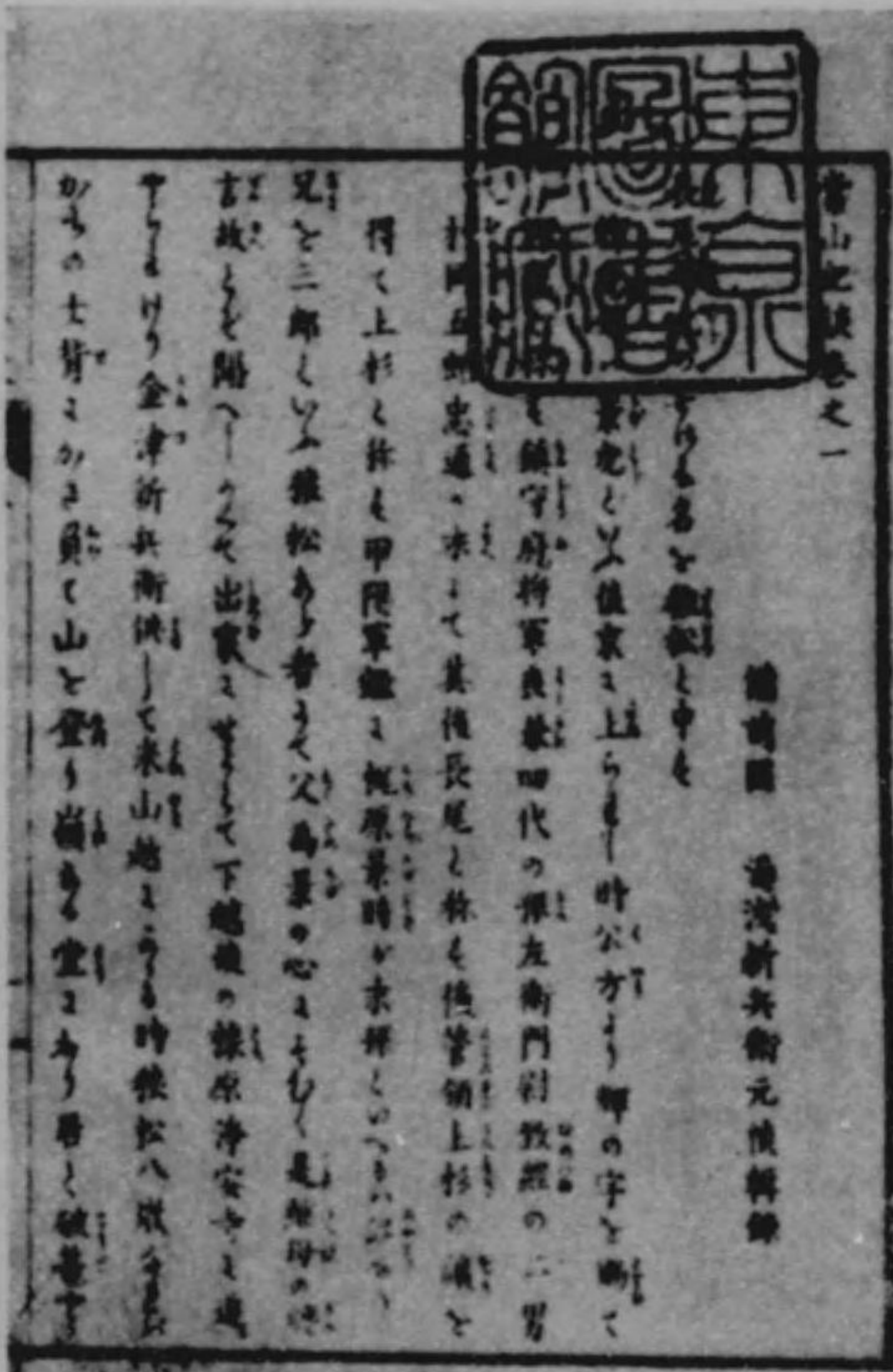
「常山紀談」(十五卷)は湯浅常山が元文四年(三三九)上杉・織田・徳川その他同時代の武家に關する逸話をあげ、傳説や事實の異同などを正して著したもので、凡そ四百七十項から成つてゐる。文體は和漢混淆體で、敘述は頗る平明である。單行本としても世に行はれてゐるが、續國民文庫五卷にも收められてゐる。なほこの書の凡例に次のやうなことが書いてある。

一、凡そこの書、天文・永祿の比より泰平に及ぶまでの事實をあつめしるせり。戰國の時、國初の風俗、武人の言行、これ皆世を觀る人の尤も識るべき所にして、これ輯録の本意なり。明君・賢佐・亂臣・奸賊の勸懲に具ふべき、自らその中に見ゆれば、必ずしも評論をしるさず。

一、吾が國の士風、源平の世と戰國の世と異同なきにあら

湯 浅 常 山

ず。凡そ古の風、信を尚び、義を尊び、節操を重んじける事ども、古き物語に見えたり。戰國の士多くは利名を貪るにあ



り。今川氏直の没落、北條氏政の滅亡の時、死に殉ひたる人妙し。されば節義の士の姓名散逸せんこと歎かしく、つとめて殉難忠臣の姓名を記せるも、亦この書の本意なり。

尚著者が漢文で書いた自序文の末に「元文四年己未五月九日湯

元頓」と書いてある。

2 作者

湯淺曾山 ユアサ ジャウザン。
名は元頓、字は文祥、通稱は新兵衛、備前岡山藩士。江戸に出て



服部南郭に學び、安證博引、孜々として倦まず、親に事ふること至孝、身を持すること嚴正、教と藩政の要務に執筆して、濟世救民の功が多かつた。後貶黜に遇ひ、閑居して讀書に専念し、傍ら兵法を修めた。

晩年に至つて文名が益々あがり、幼學指掌・文會雜記・常山樓文集・常山紀談等皆世に行はれた。天明四年(二四)歿。年七十四。

3 編纂の用意

前課「豊臣太閤」に關聯して、興味が豊で、しかも文意の平明な近世文に慣れしめるために本文を採つた。前課で大いに肩をこらした生徒も、本文を読んで、さすがに破顔一笑、すがすがしい氣持になつて、再び勢よく次課の學習に奮進するであらう。

4 要旨

曾呂利新左衛門が豊太閤の前で特有の頓才を發揮した話である。一つは「曾呂利新左衛門」といふ姓名問答、二つは彼が太閤の耳の香を嗅がせて貰ふ話、三つは紙袋二つに米を賜はる話、四つは金銀の蟹の鑄物を多く頂戴する話、すべて四篇。何れも曾呂利の「實に驚くべく感ずべき」頓才を主想としたものであるが、曾呂利を通してまた豊太閤の愛すべき一面が窺はれないこともない。

5 概説

「要旨」に言ふ如く、全文曾呂利の頓才談の連鎖であつて、各節についても概説する程のことではない。

取扱上の注意

豊太閤が曾呂利を寵愛するのは、その頓才によること言ふまでもないが、その頓才たるや、曾呂利の人物・性格の實に大膽で度胸のよいところを示すものであると考へられる。太閤が彼を好愛するのは、恐らくその人物、性格に太閤自身と相通するものがあるからであらう。生徒

にも、話そのものをかきみ味ははせると同時に、この話によつて、一英雄と一鞘師とが相繋つてゐる所以をも思はせたいものである。

□初に姓名の謂はれの説明を聽いて、「これは奇なり、又折節來るべし」と言を賜ふところに、先づ豊太閤らしい無邪氣な、直截な、愛すべきものが窺はれるではないか。

□二度に重言を以て答へるところに、曾呂利の大膽な、悪く言へば太閤をも太閤と思はぬ度胸のよさが見られる。苟も太閤である。一度ぐらゐ尋ねた一鞘師の姓名を忘れてゐられるのも仕方がない。恐れ謹んで再び申上げればよいのであるのに、かくも人を馬鹿にしたやうな、ふざけた答が、普通の者に出來ることではない。

□耳の香を嗅ぐ話についても、その請願は随分無遠慮である。これを許す太閤も太閤であると思ふ。さて又この話では、諸大名が「心中ひそかに驚き」て、曾呂利に金品を多く贈るに至るといふ事實を見せつけられるのであるが、腰ぬけの、自信のない諸大名の心事が偶々この事實によつて知られるので、なさけなくもあり、氣の毒でも

ある。即ち、諸大名は、すっかり曾呂利に翻弄されたのである。

□金銀の蟹をして角力を取らせたいと言ひ出した曾呂利に對して、「角力とありては、五箇や十箇にては……」と應ずるのは、流石また太閤であると思はれる。即ち頓才は、曾呂利よりも先に、やはり太閤も多分にこれを所有してゐるのである。

7 設問

- 1 「重言」とはどういふことであるか。
- 2 この文の最初の話のかきみは、どこにあるか。(語呂のかきみ)
- 3 曾呂利が太閤に愛せられたのは、如何なる點からであらうか。(性格的に相似た點があるから。)
- 4 頓才と同意味の語が、外にもあるか。(頓智・機智)

8 釋義

【曾呂利】 ソロリ。曾呂利新左衛門、和泉國(大阪府)大鳥郡の人。後同國堺浦の南莊に移住し、刀の鞘を造るを業

とした。頓才があつて、よく滑稽を演じたので名があらはれた。慶長八年(三三)歿。

【頓才】 トンサイ。にはか思ひつきの小才智。機變に應じてよくはたらく才智。臨機應變の才。頓智。機智。

【堺】 サカヒ。今の大阪府堺市。大和川河口の南に位してゐる。

【鞘師】 サヤシ。刀の鞘を造る工人。「師」は、こゝでは技術を業とする人の意。

本朝三國志に、「鞘師の曾呂利は、われ／＼より先に参られしか。」

【太閤】 タイカフ。豊臣太閤秀吉。

關白が隠居すれば太閤といふ。普通名詞がこゝでは固有名詞になつたのである。即ち總稱を以て特一の名に換へた轉義である。弘法大師を單に大師といひ、櫻の花を單に花といふなどは、皆この類である。

【對ふ】 コタふ。貴人や長上に對してこたへるとき、この字を用ひる。

【さては】 感動詞の「さて」に「は」を添へて一層感歎の

意を強めたのである。

「さうあつて見れば」「かくては」などいふ意の「さては」とは別である。

【して】 さうして。そして。而して。

【ありつる】 あつた。「つる」は完了の助動詞「つ」の連體形である。

【拵ふ】 コシラふ。製作する。この字を「こしらふ」とよむのは國語としての讀方で、漢字の本義ではない。本義は据う・挿むなどの意。

【そろりと】 すろりと。何等抵抗するものなく、すべるが如きさまを形容する語。

曾呂利狂歌咄に「この者の本名は新左衛門といふ。(中略)刀の鞘師なり。細工に名譽を得て、小口よりさし入るに、そろりと鞘口よく合ふゆゑに、異名をそろりといひけるが、秀吉公へ召し出され……。」

【これは奇なり又折節來るべし】 これは面白い、又ときどきやつてくるがよい。

【謁す】 エツす。貴人に目どほりする。お目見えする。

【何とか申せしな】 どうやら言つたな。

「し」は過去の助動詞、さ行變格以外の動詞の連用形につづく。それゆゑ、正しくは「申しし」といふべきである。

「な」は歎意を含んだ助詞。

【殿下】 デンカ。昔は關白の敬稱としてもかく用ひた。今は皇族方にのみ用ひる。

支那では漢以後、皇太子・諸王を稱するに用ひた。高允の諫(東宮)書に、「殿下國之儲貳、四海屬之。」

【こやつ】 こいつ。このやつ。此奴。相手の身分低きものに對する語で、自分の身に近くゐるものにいふ。

【何はともあれよろし】 どうでもかまはん、よろしい。

【かやつ】 かのやつ。あのやつ。あいつ。彼奴。先方の身分の低き者に對する語で、自分に遠くゐるものにいふ。

【密に】 ヒソかに。人に知られぬやうにして。そつと。

【贈る】 オクル。贈與する。贈呈する。

【贈】 人に物を與ふる義。

【送】 物をおくり届ける義、又は人の出立を見送る義。

【謝す】 シヤす。感謝する。

謝の字に二義ある。

(一) 有りがたく思ふ義。拜謝。鳴謝。

(二) ことわる義。謝絶。辭謝。

【呆然】 バウゼン。あきれるさま。

【賜はる】 いたゞく。

「賜ふ」と「賜はる」との別を知らせたい。

(一) 太閤、曾呂利に米を賜ふ。

(二) 曾呂利、太閤に米を賜はる。

「明治天皇の下し賜はりたる勅語」などといふは誤。

【そは】 それは。指示代名詞の中稱「そ」に助詞「は」を添へたのである。

【寡欲】 クョク。欲望のすくないこと。慾のうすいこと。孟子、盡心下に「養心莫善於寡欲。」

【張抜く】 ハリヌク。十分に張る。「抜く」は語調を強めるための接尾語。

【御前】 ゴゼン。おんまへ。こゝは太閤の前を敬つていふ。

【二戸前】 フタトマへ。土藏二棟。

「戸前」は蔵の入口の戸のある處をいふ語。これが轉じて蔵を數へる單位の名に用ひられるに至つた。

【蓋う】 オホう。ふたをしたやうに、上からかぶせること。「う」は「ひ」の音便。

【言句】 原文に「ことば」と假名がふつてある。この語は又、「ごんく」と音讀する時もある。

【泉水】 センスキ。庭前に設けてある小池。園池。

太平記の師直奢侈の條に、「泉水には伊勢島・雜賀の大石どもを集めたれば……。」

【一用】 イチョウ。一つの用ひ方。

【紙押】 ケイサン。又、ケサン。卦算。圭算。文鎮。壓尺。字を書くとき紙を押へてその散亂を防ぐ具。

易の算木の様をなしてゐるから出た語。

【金の茶釜】 キンのチャガマ。黄金で造つた茶道用の湯わかし釜。

【蓋の取手】 フタのトッテ。ふたのつまみ。手でつまみ持つ蓋の局部。

【人の角力】 ヒトのスマフ。人間どうしの取組むすまふ。

【集へて】 ツドへて。あつめて。

9 挿圖

曾呂利新左衛門

小林清親筆。

筆者小林清親の傳は、よくわからぬ。

一九 槍岳へ

芥川龍之介

1 解題



芥川龍之介の槍岳登山の紀行である。原文は「うめ・うま・うぐひす」の中にあつて、「槍岳紀行」と題されてゐる。これは大正九年六月の作で、はじめに島々といふ町の宿屋について案内者を備へたことが書いてあるが、本課はその部分を略して、後の全部をとつた。その略した部分によると、案内者は作者が宿へついた時宿の上り框で青竹の笛を鳴らして

みた三十恰好の男で、槍岳の事なら縁の下のごみまで知つてゐると女中に紹介されてゐる。また作者自身は、「上州の三山、淺間山、木曾の御岳、それから駒岳——その外山と名づくべき山には、一度も登つた事のない身」であつた（詳しくは参考の項を見よ）。

「うめ・うま・うぐひす」は、その序文に

「うめ・うま・うぐひす」は僕の書いた短篇以外のものを集めた本である。尤も「點心」や「百艸」の中から抜いて來たものも少くはない。それは短篇以外のものをざつと一冊に纏めた

かつた僕の心もちに同情して、大目に見ていたゞきたい。

と書いてあるやうに、小論文・小品・紀行・觀劇記・人物記・澄江堂雜記・序跋・書籍批評・翻譯・發句・短歌・印譜等を輯めたものである。

その表題については、序文に、

「うめ・うま・うぐひす」と名づけたのは、別に意味のある譯ではない。字面の感じだけを悦んだのである。これは出版者に尋ねられたから、ついでにちよつと斷ることにした。

大正十五年、東京、新潮社發行。

2 作者

芥川龍之介 アクタガハ リュウノスケ。

明治二十五年、東京、京橋に生れた。府立第三中學、第一高等學

校を経て、東京帝國大學英文科を卒業した。處女作「鼻」をはじめとして「手巾」「芋粥」等の短篇がいろいろ好評を博し、一躍新進作家中の異彩となつた。材を歴史にとり、一種の哲學を背景として、意味深い事件を敘してゆくといふやうな作風であり、その上非常に技巧に優れ、機智に長けてゐる。或人は「新理智派」と呼び、或人は鷗外・漱石の儔のある作家であると評してゐる。

久米正雄・菊池寛・松岡謙等と共に雑誌「新思潮」を出して作品の發表をした時代もある。大正八年海軍機關學校教官を辭して大阪毎日新聞社に入つた。昭和二年歿した。年三十六。

著作に羅生門・或日の大石内蔵之助・ある頃の自分の事・煙草と悪魔・傀儡師・沙羅の花・影燈籠・夜來の花・芋粥・將軍・邪宗門・黄雀風・點心・庭・秋山圖等がある。最近その全集が出版された。

芥川龍之介は菊池寛と列んで思ひ出される人である。二人共に大正五年頃に文壇に出たのだが、世間並から言つて、その文壇的成功が餘りに迅速なためであらう。また心の合つた親友だからであらう。そしてその素質・傾向に於ても、理智的で聰明なところがよく似て居る。また二人ひとしく歴史小説を持つところも似て居る。そしてこの方面に於て森鷗外の影響を受けたらしく思はれるところも亦似て居る。

龍之介は大體に於て新しい歴史小説家と言つて差支あるまい。勿論、彼にも「秋」「春」のやうな現代を取扱つたものが時々あ

るが、大抵歴史を假りて、そこに彼一家の趣味・感じなどを表す。その博識らしいところ、氣取つた風が見えるところ、時に Dietante らしい點があるところなど、鷗外そつくりと言ひたい。そしてその明澄な文章さへも、鷗外と一脈相通するものがある様に思はれる。が、それは龍之介が鷗外を模倣した意味では勿論ない。

龍之介の歴史小説は概して巧緻である。題材の選び方も矢張りまい。そして全體が纏つて居て、寸分の隙がない。「今昔物語」などから見出された材料なども、よく生かされて居る。それにその表現は無駄を斥けて高雅であり、明朗である。蓋し十分練りに練つて、不純なところを取去つてしまつた、必然的な純粹さを保つたためであらう。時に形式・目光を變へるために、彼は「世之助の話」のやうに對話體を用ひたり、「奉教人の死」のやうに、クラシックの味がする昔のスタイルを假用することがある。それも亦、いかにも興味の深いことだ。そこに、彼の氣の利いた働きが投映されて居る。が、一方から見ると、非難がないではない。極端なことを言ふものは、彼の歴史小説を高等講談だと名づける。が、それは酷だ、けれども、作全體が概して理づめで、几帳面すぎるところは、何となく窮屈だ。「地獄變」でも、「ある日の大石内蔵之助」でも、「戯作三昧」でも、皆上品な佳作であるが、何處か手觸りのつめたいところがある。それが彼の作全體に於ける共通の缺點であらう。

(高須芳次郎——現代文學十二講)

3 編纂の用意

前數課が思索的内容を持つたものや、偉人の評論・畸人傳といつたやうな人物評論的のものであつたから、ここには氣分を一轉して、清新な氣のみちた紀行文をあけて、學習の興味を新にしたいと思つた。

時は夏である、生徒は來るべき夏休みの男性的な若々しい活動を様々胸に描いてゐるであらう。その一つに高山の踏破が必ずや加へられてゐるであらう。この課は、さうした生徒たちの心を十分に惹きつけて、紀行の持つ味を樂しませることが出来るであらう。

4 要旨

槍岳へ進む途中の紀行である。猿に眼をくれてゐる案内者を促し立てながらも、とかく遅れがちの作者は、時には一人山路を喘いで馬繩などに刺されて氣をわく／＼させる。梓川を徒渉し、穂高嶽を仰ぎつゝ、案内者の尻について、熊笹の中の板葺小屋に辿り着く。そこで案内者の釣つて來た山魚を菜にして夕食をすまし、白樺と楮と

の二種の燈火にわが影を映しながら山の話の聞き、又原始日本民族の生活などを思ふ。あくる日、赤澤で、眼前に展開する「立體の數を盡くした大石」の峽谷に眺め入る。やがてその峽谷を登り出す。偃松の影、青猪の姿、残雪の色に眼をやりながら、愈々槍岳の絶嶺を認める。山上の寒さを感じながら、今夜の宿の岩室に辿りつくべく、懸命に急角度の斜面を登つて行く。途中で耳を驚かすものは雷鳥の聲であつた。

5 概説

小節の幾つかを行程の日時に即して纏めると、大體左の三節になるかと思ふ。

第一節(一四〇頁——一四三頁三行) 槍岳へ向ふ途中、徳本峠の手前のところから起筆して、先づ午前半日の行程を進む間の敘事。

第二節(一四三頁四行——一四六頁六行) その日の午後、一軒の小屋に辿り着き、そこに宿る光景までを記す。

第三節(一四六頁七行——一五〇頁) 翌日、赤澤を通過し、槍岳の絶嶺を眺めつゝ、無人の岩室に宿るべく急

ぐ途中の記事で擱筆。

6 取扱上の注意

【月並の紀行文とは異なつて、敘景も敘事も感想もすべて新味に富んでゐる。最初の部分は、殊に作者の身邊のことが興深く描かれてゐる。「猿は案内者にとつては、猿であるよりも先に獲物であつた」といふ。鋭い作者の觀察眼はすでにこの一句にも閃いてゐる。

【蛇目蝶と私とが生きて動いてゐる總べてであると思つてゐるところを、一匹の馬蠅に手の甲を刺された作者が、「自然は私に敵意を持つてゐる」と感ずるのも、この作者らしい感じ方である。そこには無理な誇張などは有りさうに思はれない。

【小屋の内外の敘述は精しいものである。「牛の姿に愛と嫌惡とを同時に感ずる」といふ作者は、今更のことではないが、まことに尖つた神経の持主であると感ぜざるを得ない。

【「大石の洪水」この一語及びこの前後(一四七頁)を記す爲に、作者が可なり意を用ひてゐる點を見のがしてはならぬ。

ぬ。

【「絶嶺は大きな石鉄のやうに」以下(一四八—九頁)のところも、やはり同様に用意深い筆である。特に「文語體の感想」と言つてゐるのが注意される。この作者は口語體よりも「文語體」の方に餘計に親しみと熟練とを持つてゐたらしいことは、何かの隨筆にも告白してゐる。

○雷鳥の聲を聞くことは、作者には珍しい事實であるのに、案内者にはもう何の興をも與へない。(猿とは大した相違である。)そこで、案内者の歩みは益々「強情」に見えるのである。

7 設問

- 1 この作者の神経の尖つた點が窺はれる語句をあげよ。
- 2 感想で深味のあるところは、どの節であるか。
- 3 敘景の巧である節はどこであるか。

8 釋義

【槍岳】 ヤリガタケ。

飛驒山脈(日本北アルプス)の中の最高峯である。飛驒・信濃の國境に跨り、穂高山脈に連互してその北方に峙立し、海拔一〇、四八九尺。山頭二百餘尺は尖峯が

横立して天を衝き、恰も槍を立てた如く、中腹以下には大雪溪がある。

山頂に立つと、脚下は千仞の溪谷で、雲霧はその間を往來し、頭を廻らせば、黒部・梓の溪谷から、大天井・燕・鷲羽・穂高・乗鞍等の峻峯を悉く雙眸に集め、眺望が極めて壯大である。

登山道は數條あるが、最も普通なのは、松本市から梓川の溪谷に入り、島々村に至り、これより北方島々谷に沿うて徳本峠を越え、右に林道を辿つて再び梓川の上流に出で、これを溯つてその本流槍澤に就き、赤岩小舎に至り、更に十數町上つて大雪溪に出で、坊主小屋、殺生小屋を過ぎ、これより半里ばかりで絶頂に達する。島々村から約九里ある。赤岩からは行路が險惡で、或は樹木により、或は岩壁を傳ふ。若し歸路に別の路をとれば、嶮坂を下つて、三俣に至り、湯の股に出で、これから葛の

湯温泉を経て高瀬川に沿うて下り、大町に至る。この間約十五里である。

【岨】 ソハ。崖をいふ。

【畜生!】 チクシャウ。人に畜はれて生を保つものの義である。禽獸類を總稱する。

こゝに用ひられた如き場合は、他のものを罵つて呼ぶに用ひる語である。

【忌々しさうに】 腹立たしさうに。いやらしく憎らしさうに。

【舌打】 シタウチ。舌で上鬪を撫で弾いて音を立てること。物を味はふ時にも、思ふやうにならないで残念だといふ時にもするのであるが、こゝは勿論後者の場合である。

【椽】 トチ。七葉樹科の落葉喬木。幹の高さは四五丈に達する。葉は掌狀複葉で、通常七箇の小葉から成る。五月頃、白色に淡黄を帯びた不整齊の瓣を有する花を開き、後、莢を結び、中に大形褐色の光澤ある種子を藏する。

【遮る】 サヘギる。さへへとどめる。隔て蔽ふ。

【猿であるよりも先に獲物であつた】猿として、珍しく面白い見物として見られないで、まづ獲物として利益の對象として見られるのであつた。

【磔】 コイシ。

【滋々】 シブ／＼。いさぎよくの反對で、気がすまなないけれどやむを得ずする動作にいふ。いや／＼ながら。獲物としての猿を、鐵砲が無いためにとらずに行くことに多大の未練があることを示してゐる。作者が次に「私は多少不快であつた」といつてゐるのは、愛すべき動物を單に獲物としてのみ見てゐる案内者の心に對する不満である。

【蛇目蝶】 チャノメテフ。中形の蝶で、好んで樹陰にすむ。翅は暗褐色で、それに蛇目形の藍色の環紋がある。裏面は暗色樹皮様を呈してゐる。

【徳本峠】 トクガウタウゲ。日本アルプス登山口の一つである島々（シマジマ）から上高地へ到る間にある一つの峻嶺で、海拔七千尺餘、上り下り約六里に達する。日本アルプスへ入る關門である。この峠の上から望む晴天の穂

高嶽の景觀は頗る秀麗である。

【堆し】 ウツダカシ。盛りあがつて高いこと。

【喘ぐ】 アへぐ。いきをきらす。はあ／＼いふ。

【無氣味】 ブキミ。「不氣味」と同じである。氣味がわるいこと。

「空氣は無氣味な靜寂を孕（ハラ）んでゐた」とは、風もなく、物音もなく、ひっそりかんとしてゐて、何となく薄氣味が悪く感じたことをいふ。その無氣味な靜寂のさまは次にのべられてゐる。

【蘆】 ゴザ。登山者が、俄雨にそなへ、或は日光の直射を遮るために用意してゐる藁製の蘆である。

【煽る】 アふる（アフル）。こゝでは、ひるがへす意に用ひてある。

【鈍い翅音】 ニブいハオト。濁つた翅の音。「ブーン」といふやうな、さえない翅の音。

「翅」は、音「シ」、鳥類や昆蟲類のつばさ。

【馬蠅】 ウマバへ。雙翅類の昆蟲。頭部は大きく、觸角は短く、眼は小さくて三箇の單眼がある。全體は淡褐色

で、翅と腹部とは淡黒色の紋がある。

幼蟲は俗に筒蟲と言つて、馬の胃中に寄生する。



【自然は私に敵意を持つてゐる】 無氣味な靜寂の峠道をたゞ一人歩いてゐる自分、何となくさびしい、たよりない、大自然に比べて人間の弱少さを感じてゐる時に、馬蠅がいきなり手を刺す。そこで神經質の作者は、自然は自分に對して敵意を持つてゐて、色々な手段で自分を苦しめるのであらうと感じるのである。

【わく／＼】 心の動亂するさま、心が落着かないで悶えるさまをいひあらはす言葉。

【梓川】 アツサガハ。長野縣安曇郡の西、常念嶽と槍岳との間に源を發し、南流六七里、乗鞍嶽の東に至つて黒川を合せ、轉じて東に向ひ、島々・波多等を経て東北に傾き、松本の西北、高家・島内の間に至つて槍井川と合する。通常これから下流を犀川といふ。水源からこゝに至る間は、凡そ十三里ある。

【徒渉】 トセフ。川を徒わたりすること。

【飛驒・信濃境の山々】 飛驒山脈で、普通に日本アルプスと呼ぶ大山脈である。

【穂高嶽】 ホタカダケ。飛驒・信濃の國境に在る山。

日本北アルプス中の一群峯で、梓川の上流なる上高地の北方に聳え、東方の常念山脈と相對してゐる。最南に前穂高嶽（九五、九八尺）、その東北に奥穂高嶽（二〇、二四〇尺）、北穂高嶽（一〇、〇〇九尺）、東南に稍、離れて穂高嶽（二〇、一九八尺）がある。海拔一萬尺内外の高峯が相追ひ相逼つて北方槍が嶽の尖峰に連り、延長約二里に及ぶ一大峻嶺を成してゐる。

【嶺然】 ザンゼン。一段と高く抜け出たさまにいふ語。

韓退之の柳子厚墓誌銘に「嶺然見三頭角。」



【熊笹】 クマザサ。禾本科の竹類。程の高さ三四尺、時には五六尺にも及ぶ、細くて強靱である。葉は潤大、長楕圓形で長さ七八寸に達する。老葉は葉縁が白色

で美しい。

【山毛櫨】 ブナ。山毛櫨科の落葉喬木。高さは八丈にも及ぶ。葉は卵形で互生し、少数の毛がある。果實は殻斗を有する堅果である。木材は器具・薪炭に供し、種子は食用又は油の料となる。

【雁皮】 ガンビ。瑞香科の落葉灌木。幹の高さ五六尺、葉は卵形で、葉柄が無く、毛茸が多い。夏季に黄色の花を開く。樹皮は製紙の原料となる。

【放牧】 ハウボク。牛・馬・羊等の家畜を野山に放し飼ひにすること。

【圍爐裡】 キロリ。床を穿つて設け、火を燃やし、又は火を貯へて、食物を煮焼したり、或は煖をとつたりするところである。

【取卸す】 トリオロす。

【山魚】 ヤマメ。「うぐひ」の別名。鯉科に属する魚。體は圓長で、頭は小さく、吻端は尖り、上顎は下顎を蔽ひ、鱗は小さい。産卵期には雌の腹側に赤條が出るので「あかはら」ともいふ。大きさは一尺内外に達し、本邦各地

の清流又は湖水に産する。

【牛は潤んだ眼をあげて】 「潤んだ眼」とは濡れた眼、光澤のある眼球をいふ。普通の場合には涙を帯びた眼をいふ。こゝでは牛が涙を出してゐたのではなく、牛の眼球は大きくて、それが濡れたやうな光澤を帯びてゐるものであるから、その實際を言つたのである。しかしその潤んでゐる牛の眼は、牛の柔らかなつこさをよくあらはしてゐるものであつて、こゝでもその意味を含めて書いてゐることは勿論である。

【炙る】 アブる。(一)火にかざして焼くこと。(二)火にかざしてあたため乾かすこと。

【貪り食ふ】 ムサボリクふ。飽くまでも食ふこと。

【白樺】 シラカンバ。樺木科の落葉喬木。幹の高さ三四丈、樹皮は白色で剝げ易い。葉は卵形、鋭尖頭で、長い葉柄がある。早春葉に先だつて帯黄褐色の花を開く。材及び樹皮は器具用とする。

【夜が戸の外に下る】 夜になつて家の外は暗くなつたことをいつたのである。

【楕】 ホタ。焚物にする木の切れ端。

永久百首に「こりつみしほた。なかりせば冬深き片山里にいかで住ままし。」

新六帖に「里人のほた切る冬のふしくぬき大川のべに荒れまくも惜し。」

【消長】 セウチャウ。盛衰。榮枯。

「燈火の文明の消長を語る」といつたのは、明暗二種の火光を見てゐると、暗い燈火がすたれて次第に明るい燈火へと進んで来たあとが思はれるといふ心持を、火の光を主として擬人法でいつたのである。

【排いて】 オシヒラいて。

【阿彌陀にする】 笠や帽子などをかぶる時、内部を前に向けて、阿彌陀佛の後光のやうに、後方へ傾けてかぶることをいふ。

【立體の彫を盡くした】 立體のあらゆる形のものがそこにあることをいつたのである。

【割る】 クギる。

【それが峡谷の急な斜面を満たしながら云々】 その様々な

形をもつた多くの石が、山と山との間の狭い谷の急な傾斜面に一杯になつて、見上げると、空との境をしてゐる山の頂の向ふまで目のとゞく所すべてに續いてゐた。即ち高く聳えた山の山頂から自分の立つてゐるところまで、急な峡谷はたゞ一面に石塊がころがらつてゐたさまを、自分のところをもとにして山上の方を見上げて書いた書きぶりである。

【洪水】 コウズキ。おほみづ。

【黄花駒の爪】 キバナノコマのツメ。

高山植物の一種。つぼすみれの一種。莖は細長く地上を匍匐する。葉は圓い心臟形である。夏季に黄色の小花を開く。

【青猪】 アヲジシ。

【視線を絶壁の上に投げた】 絶壁の上をみた。

【偃松(ハヒマツ)の暗い線をなすつた處】 偃松が生えてゐる



て、一寸ち暗く見える處。偃松は、松杉科の常緑喬木で、松の一品種である。高山の巔に生じ、樹枝は地上を這ふ。種子は食用となる。

【日本アルプス】 信濃と飛騨及び越中との境に在る大山脈で、いはゆる飛騨山脈の別稱である。

山勢は高峻雄大、山嶺は概ね奇峭。怪巖が錯立して、樹木がなく、一年の大部分は白雪を戴き、盛夏でもなほ溪間には残雪がある。日本アルプスの名はイギリスの宣教師ウェストン (Weston) の名づけたものである。山脈中の高峰をあげれば次のやうである。

- 御嶽 一〇、一〇九尺
- 乗鞍嶽 九、九八七
- 常念嶽 九、〇九八
- 穂高嶽 一〇、一九八
- 前穂高嶽 九、五九六
- 奥穂高嶽 一〇、二四〇
- 北穂高嶽 一〇、〇〇九
- 槍嶽 一〇、四八九
- 大天井嶽 九、六四四
- 笠嶽 九、五六三

- 雙六嶽 九、四三八
- 鷲羽嶽 九、六五〇
- 白馬嶽 九、六七九
- 立山雄山 九、八七四
- 劍嶽 九、八九三

【羚羊】 カモシカ。教科書の挿圖参照。

哺乳動物中の有蹄類の一種。體は鹿よりも稍、小さい。角は無枝で中空。毛は長く、灰黒色に白色が混つてゐる。我が國の深山幽谷に産する。

【露す】 アラハす。物の姿のあきらかに見えること。露顯・披露等の「露」をおもはせる。

【絶巔】 ゼッテン。山の最上のいたゞき。絶頂。

【石鏃】 セキゾク。石で造つた矢じり。



槍岳の絶巔の石鏃のやうに見える部分を、俗に「槍の穂」とよんでゐる。

【文語體の感想】 「山は自然の始で、又終だ。」と口語體でいつても意味は同じ譯であるが、「山は自然の始にして又終なり。」と文語體ではいれなければ、いひあらはさる

べき内容に對して、しつくり感じられなかつたのである。

【ラスキン】 John Ruskin. イギリスの文學者・美術批評家且社會改良論者である。スコットランド出の酒商の子で、ロンドンに生れた。幼少の頃から父母に隨伴して



國內は勿論廣く大陸の諸國をも旅行したから、正式の學校教育を受ける機會は殆どなかつたが、嚴格な母の監督を受け、家庭教師によつて、音楽・

繪畫・文學の訓練を受け、又旅行によつて各國の山河・風物に親しみ、自然に繪畫・彫刻・建築等に關する知識をも涵養した。かくて一八三七年オックスフォードなるクライスト、チャーチに入つた頃には、既に一かどの文才を發揮し、一八三九年には詩によつて Newbrite 賞を得た。一八二四年バツェラー・オブ・アーツの學位を得た。

彼が不朽の名聲を博した Modern Painters (近代畫家論) の第一卷はその卒業論文である。この論文は、近代英國の風景畫、中にもターナー (Turner) の作品を推獎

して、極力今人の畫が古大家に劣らぬ所以を論じたものであるが、それが公にせられるや、その斬新な着眼と巧妙な文章とは、忽ち文壇の注意を喚起し、一方に於ては保守派の間に激しい反對を招いたが、他方に於ては青年の間に多數の崇拜者を生じた。近代畫家論はそれより漸次刊行せられ、第五卷に至つて完成した。

一八六〇年以後は、カーライルの感化を受けて社會改良に心を傾けるに至つた結果、一時美術より轉じて、社會上・經濟上・道德上の問題に没頭した。

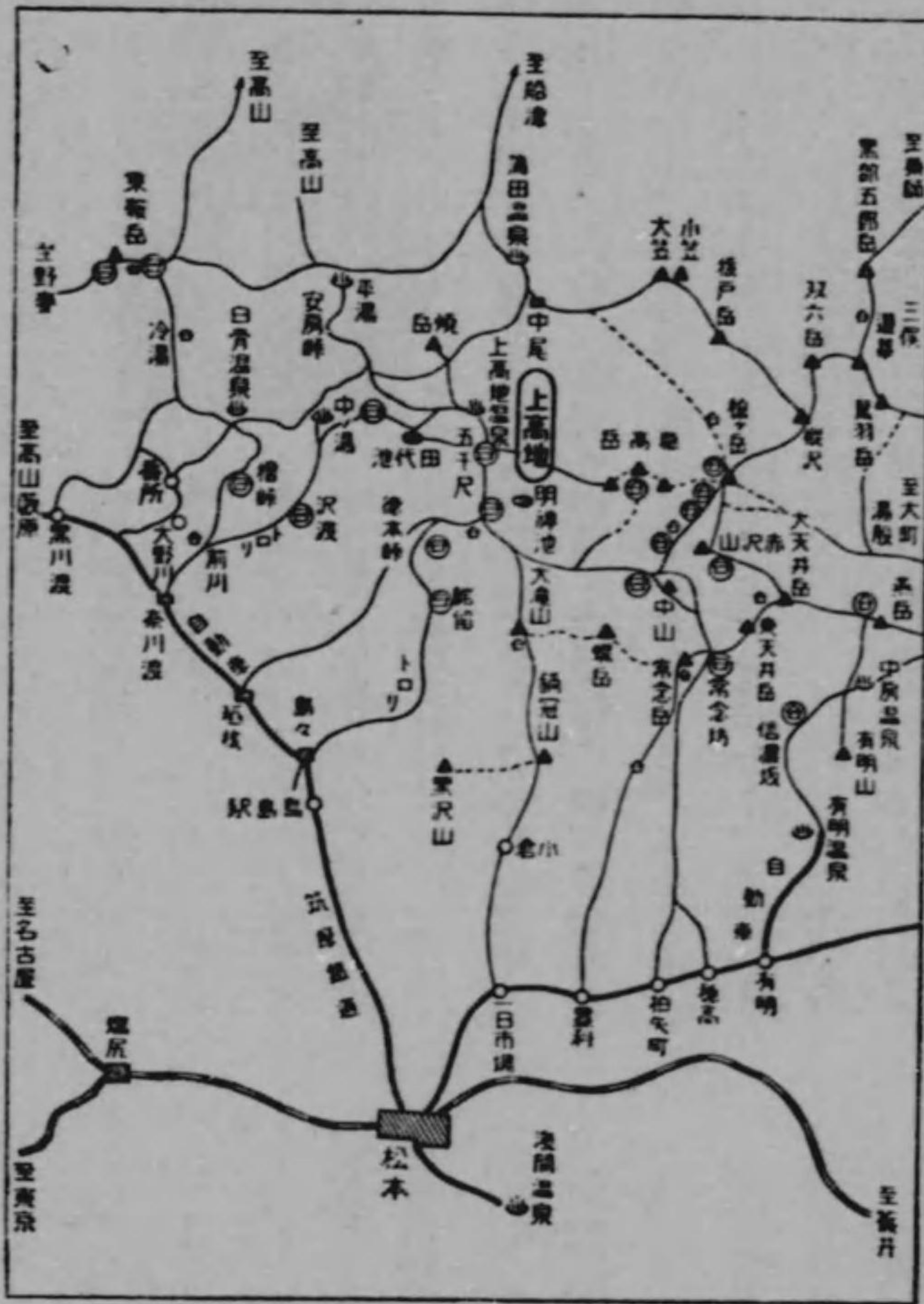
一八七〇年にはオックスフォード大學の美術教授に擧げられ、再び美術の研究に戻つた。しかしその間に於ても、一方に於ては社會改良の理想を實現せんがために努力を怠らず、或は社會運動の本部を設け、多額の私財を投じて勞働組合を起し、勞働者のための博物館を開き、宿泊所を建て、模範喫茶店を開き、開墾事業を企てる等、社會事業につくすところが頗る多かつた。

一八七八年腦病にかゝつて教職を辭し、一九〇〇年歿した。

【岩室】 イハムロ。高山の登山者の宿泊や休憩にあてるために設けられた小屋。風に吹飛ばされるのを防ぐために、四壁も家根も悉く石を積んで作る。

る。

9 挿圖



方地スブルア本日

徳本峠

島々方面から登りつめた徳本峠の頂である。前方に見えるのが日本アルプスの連嶺、この峠との間が上高地の峡谷で、その底を梓川が流れてゐるのである。

梓川と穂高岳

梓川の岸から、前面に聳える穂高嶽を望んだ景觀。

白樺の林

上高地峡谷に於ける白樺林の一部。前面の山は穂高嶽。

槍岳

槍岳の遠望。

【懸命に】 ケンメイに。一所懸命に。カ一ぱいに。

【雷鳥】 ライテウ。鶉鶏類の一種。體の長さ六七寸。高山に棲む。夏は羽毛の色が草色であるが、冬は白色に變ず

10 参考

1 芥川龍之介の紀行文

澄徹した睿知をもつて、史實・傳説を材料にして、ほしいままにこれを創作化して文壇に重きをなした芥川氏の紀行文の文は、それが果していかに取扱はれ、表現せられるであらうかと期待されたが、この作者の頭と筆とは、紀行文の文に於ても亦十分に成功する事が出来たのである。在來多く見受けた紀行文に比して、氏の紀行文は、甚だしく澄み徹つてゐる。だら／＼と書きながして何ともいへない温氣と冗漫の感との漂つてゐるやうなものは趣を異にして、どこまでも明瞭であり、透きとほつてゐる。冗漫の感じなどはどこにもない。さればといつて、簡單明瞭何等の潤ひのないものともちがふ。明徹の中に捨て難い味がある。それはやはり理智によつて洗煉せられたところのものである。鋭敏な神経によつて物の肝腎な核心を把握し、それを犀利な筆をもつて些の遲疑もなく書きつくすといふ手法のたまものである。この文を読めば、いら／＼するまで明徹にされてゐる氏の神経の敏感さが隨處に讀みとれる。たしかに紀行文として味はふべきものである。緊張と洗煉と含蓄とのいづれもが、十分に備つてゐる文である。

2 原文の省略

槍岳紀行文の原文は、四節から成つてゐて、本課にはその中の第二、三、四の三節を採録したのである。参考のために本課に省いた第一節を左に補つておく。

島々といふ町の宿屋へ着いたのは、午過ぎ——もう夕方に近い頃であつた。宿屋の上り框には、三十恰好の浴衣の男が、青竹の笛を鳴らしてゐた。

私はその高い音を聞きながら、埃にまみれた草鞋の紐を解いた。其處へ婢が圓い盥に洗足の水を汲んで來た。水は冷たく澄んだ底に、粗い砂を沈めてゐた。

二階の縁側の日除けには、日の光が強く残つてゐた。そのせゐか、疊も襖も、殘酷な程むさくしく見えた。夏服を浴衣に着換へた私は、括り枕を出して貰つて、長々と仰向けに寝ころんだまゝ、昨日東京を立つ時に買った講談「玉菊燈籠」を少し讀んだ。讀みながら、浴衣の糊の臭ひが、始終氣になつて仕方がなかつた。日がかけると、さつきの婢が傘りの刺げた高盆に湯札を一枚のせて來て、さうして湯屋は向ふ側にあるから一風呂浴びて來てくれと言つた。

それから細の緒の下駄をはいて、石高な路の向ふにある小さな銭湯へはいりに行つた。湯屋は着物を脱ぐ所がやつと二疊

ばかりしかなかつた。

客は私一人きりであつた。もう薄暗い湯壺に浸つてみると、ぼたりと何かが湯の上へ落ちた。手に拵つて流しの明りに見たら馬陸うまむしといふ蟲であつた。手のひらの水の中に、その褐色の蟲が、はつきりと伸びたり縮んだりするのを見る事は、妙に私を寂しくさせた。湯屋から歸つて晩飯の膳に向つた時、私は婢に槍岳の案内者を一人頼んでくれと言つた。婢は早速承知して、竹の臺のランプに火をともしてから、一人の男を二階に呼上げた。それは先刻上り口で青竹の笛を吹いてゐる男であつた。

「槍岳の事なら、この人は縁の下のこみまで知つて居ります。」

婢はこんな冗談をいひながら、荒らされた膳を下げて行つた。

私はその男にいろ／＼山の事を尋ねた。槍岳を越えて、飛驒の蒲田温泉へ出る事が出来るかどうか。近頃噴火の噂がある。槍岳へも登山出来るかどうか。槍岳に峯傳ひに穂高山へ行く事が出来るかどうか。——さういふ事が主な問題であつた。男は窮屈さうに畏りながら、無造作にそれらは容易だと答へた。

「且那樣さへ御歩けになれりや、何處でも譯はありません。」私は苦笑した。上州の三山・淺間山・木曾の御嶽、それから駒ヶ嶽——その外山と名づくべき山には一度も登つた事のない私であつた。

「さうさなあ、まづ山岳會の連中並みに歩ければ、見つけものと思つて貰はう。」

男が階下へ去つた時、私はすぐに床を敷いて貰つて、古蚊帳の中に横になつた。戸を明け放つた縁側の外には、暗い山に唯一點、赤い炭焼きの火が動いてゐた。それがかすかながら、私の心に旅愁ともいふべき寂しさを運んで來た。

やがて婢が戸をしめに來た。戸の走る度に、山の上の星月夜が私の眼界から消えて行つた。間もなく、私の寢てゐるまはりには古蚊帳に四方を遮られた行燈ばかりの薄暗がりになつた。私は大きな眼をあきながら、古蚊帳の天井を眺めてゐた。するとあの青竹の笛の音が、かすかに又階下から聞えて來た。

二〇 新月

北原 白秋

1 解題

北原白秋の詩集「畑の祭」から一篇を採つたものである。この詩を採るにあつて作者の意見を徴したところ、純然たる藝術作品としての立場からすれば他に自信のあるものも多いが、中學二年生の教科書へ入れるものとしては蓋し適當であらうとの承諾を得た。即ち白秋の詩の代表的のものでないといふことを指摘されたもので、教授者は氏の作品のもつと多くを讀んで氏の作品の如何なるものかを理解せられたいものである。

2 作者

北原白秋 キタハラ ハクシウ。

名は隆吉。明治十八年福岡縣柳河町在に生れた。學歷としては早稲田大學英文科を中途退學しただけである。夙に歌人・詩人として知られ、また童謡・民謡の作家としてその存在を認められた。その觀照の世界を心ゆくまでに官能的に清新に精緻に寫し得る力は、さすがに作詩の修練を重ねた結果である。その歌話・評論等にも傾聴すべきものが多い。

3 編纂の用意

作品には詩集に「觀相の秋」「水雲集」「白秋詩集」、歌集に「桐の花」「雲母集」「雀の卵」、民謡集に「日本の笛」「白秋小唄集」「あしの葉」、童謡集に「祭の笛」「白秋童謡集」など、散文集に「雀の生活」「洗心雜話」「季節の窓」など、その他多くがある。

4 要旨

學習の氣分を一轉し、また新しい詩に對する理解と鑑賞との修練をなさしめようと思ふ。

或夜の新月の、斷崖の松の木にかゝつてゐるのを先づ認めた作者は、やがてその新月の、また入海の波間にしづくのを眺め、更にその光に、絹漉の雨の後の特別なすどさを感じ、さては鈴蟲の鳴きしきる音に耳を傾けるなど、時處の轉するにつけて、いろ／＼の趣ある新月の美を捉へて歌つてゐる。「ほそき月」「金無垢の月」「金の鉤」、これらの言葉が、「新月」の特徴を示してゐることを

味ははせたい。

5 概説

「評釋」の項に、節を追うての概説も含んでゐるので、ここには省く。

6 取扱上の注意

□満月には満月の美がある。新月にはそれと異なる新月の美があり、又、その美をよく發揮せしめる特別の境と時とがある。この長詩は、その新月の美を、境と時との轉ずるにつれていろ／＼に歌つてゐる。

□光量といふか、光度といふか、満月の皎々たるとは違つて、まだ新月の時は全體の夜の暗さが濃いので、「金無垢の月」といふ語が利いてゐることは言ふまでもない。

□「金の鈎」としたのは、「波間にしづき行く」といふ縁語である。

□「しづきゆく」「走りいづる」などは、新月の動きを受取つて言つたもので、作者のするどい神経の働きを思はせる。

□「なにかはわかぬ」の一節には、「月」の文字は現れてゐな

い。現れてゐなくても構はぬが、この節は最もむづかしい景色のやうに思はれる。「度のきはまり」とあるのは、「しづまのきはまり」と言つたよりも更に深い心持であらう。宵の極めて静かな時處に於ける新月の美をそこに想像することができぬ。

□最後の二節では、よほど時も推移して、もう何も見えなくなつた眞の闇夜に、たゞ一つ光つてゐる月を歌つてゐる。實際たゞ光るのであつて、照らすなどいふ語は新月にはあてはまらない。

7 設問

1 「新月」を「金無垢の月」などと言つたのは、なぜであるか。

2 「絹漉」とは、元來何について言ふことか。こゝでは。

3 「魚族は目をさまし」は暁のことか。暁でないわけは。

8 釋義

(語釋)

【新月】 シンゲツ。

(一) 朔月(サクゲツ)と同じ意。即ち、月が地球と太陽との中間にあつて、三者が一直線上にあるときは、月の輝く部分は地球に反してゐるので、これを望むことが出来ない。この時の月をいふ。

(二) 陰曆で月の初めの夜に見える月。

(三) 新に東方にさし出て、光の鮮かな月。
白居易の詩に「三五夜中新月色、二千里外故人心。」とあるのは(三)の意。

こゝにいふのは(二)の意である。

【斷崖】 キリギシ。切りたてたやうに峙つ崖。

【金無垢】 キンムク。混合物のない純粹の黄金。

【しづく】 水にうつつて見えること。
萬葉集に「藤波のかけなる海の底きよみ、しづく石をも玉とぞわが見る」

古今集に「水の面にしづく花の色さやかに、君がみかけのおもほゆるかな」

【沈々】 チン／＼。夜のふけゆく貌。

李白の詩に「月寒天清夜沈々」
【金の鈎】 キンのハリ。二日月か三日月かの細く彎曲して光つてゐる形を、黄金の鈎ばりに譬へたのである。

【絹漉】 キヌゴシ。絹篩または絹布で物を細かくこすこと。

【絹漉の雨】とは、絹でこしたやうな細かな絲雨をいふ。
【魚族】 ウロクヅ。魚の異稱。

(評釋)

次第にまさりゆく宵闇の海邊に輝く新月と、その新月によつて醸し出される静寂とを中心としたものである。

第一聯 作者は海に近い所にゐる。そこから眺めると、海岸に迫つて丘があり、その丘には松が生え、その丘の先端は斷崖をなして、麓を海の潮が洗つてゐる。日も暮れかゝる頃である。ふと見れば、丘の松の梢に細い金光りのする新月がかゝつてゐる。

第二聯 しばらく月に見とれてゐた作者の眼は位置をかへて、海の上に注がれる。そこは彎入した海で、波も低い。その波の間にも、その月の影はあさやかにうつつてゐる。

る。あたかも金色の釣ばりを置いたかのやうにしづまりかへつて、静かな影をひたしてゐる。

第三聯 さてこの月は、さきほど絹漉のやうな細雨がしきり降つて、その霽れた後に出たのであるが、雨の後の月の純金のやうな光はいかにも鋭い。そしてその光り方は、不真面目なものやふさげたものの態度でなくて、心の底からゐた、まれないやうな熱心さをもつて光り出るので、その黄金色には純粹の黄金に見る蒼い輝を帯びてゐる。

「するどき」「絹漉の雨」「しんじつに走り出づるその蒼き」など、作者の鋭敏な官能の表現された語句に注意させねばならぬ。

第四聯 日は暮れはてた。闇は次第に濃くなつた。今は、沖の島も真黒、海も真黒、何ものをも蔽ひ盡くした眞の闇の中を、漁に出る船が、一艘の船が、闇の夜に船聲をそれとしるく示して漕いでゆく。海にあつて存在を思はせるものはたゞその舟一つ。その上に、天にあつて存在を思はせる随一のものたる細い月が光つてゐる。寂寞の

海と寂寞の天、物凄いほどのさびしさである。

第五聯 この天地静寂の間に於て、海中の魚は、何とも知らぬ或者を感じて、睡つてゐた眼をさました。地上にすだく鈴蟲は、何者を感じて、一しきり鳴きつゞけた。眼覺めた魚、鳴く鈴蟲、何とも知れぬもののために、心は敬虔の至りに置かれてゐる。何者とは？ それは新月の鋭さ、嚴肅さである。

この一聯も、鋭くて穢のない新月が興へるところの嚴肅な静けさをよくうたひ出してゐる。

第六聯 舟は次第に遠ざかつて行つた。闇はいよゝゝ濃くなつた。今や、斷崖も、松の木も、ゆく舟も、何物をも見ることは出来ない。眞の闇。悉皆無。この時、たゞ純金色に光る細い月のみが中天にある。この寂しさ、この静けさ。

9 参 考

北原白秋の作品二三

落葉松 (詩)

からまつの林を過ぎて

からまつをしみ／＼とみき
からまつはさびしかりけり
たびゆくはさびしかりけり

からまつ的林を出でて
からまつ的林に入りぬ
からまつ的林に入りて
また細く道はつゞけり

からまつ的林の奥も
わが通る道はありけり
霧雨のかゝる道なり
山風のかよふ道なり

からまつ的林の道は
われのみかひともかよひぬ
ほそ／＼と通ふ道なり
さび／＼といそぐ道なり

からまつ的林を過ぎて
ゆゑしらず歩みひそめつ
からまつはさびしかりけり
からまつとさゝやきにけり

からまつ的林を出でて
浅間嶺にけぶり立つ見つ
浅間嶺にけぶり立つ見つ
からまつのままそのうへに

からまつ的林の雨は
さびしけどいよ／＼しづけし
かんこ鳥鳴けるのみなる
からまつの濡るゝのみなる

世の中よあはれなりけり
常なけどうれしかりけり
山川に山川の音
からまつにからまつのかぜ

日の入り (民謡)
海の遙かに
日の入るころは
こゝろほそさよ
身の小ささ

遠く離れて

泣きたい時は
せめて磯端
舟見山

かぎり知れねど
また山のぼり
せめて日の入り
海のはて

西は日の入り
東は月夜
なまじ遠風
雲の紅

ほうほう螢 (童謡)

ほうほう螢、篠螢
晝間は赤い豆頭巾
日暮はピカピカ豆袴
一のお宮で灯を貰うて
二のお宮たんぼへ灯とぼしに
三の鳥居は藪の中
四の宮くれば猪堀
猪が啼き出しや、雨がふる

早よ早よお戻り夜は凄
真夜中過ぎれば歸られぬ
ほうほう螢、篠螢
水神様はまだ遠い

(短歌)

廢れたる園に踏み入りたんぼ、の白きを踏めば春たけにける
食堂の黄なるがらすをさしのぞく山羊の眼のごと秋はなつか
し
木々の上を光り消えゆく鳥のかげ遠空の中にあつまるあはれ
冬青の葉に雪のふりつむ聲すなりあはれなるかも冬青の青き
葉
霧雨のこまかにかゝる猫柳つくく見れば春たけにけり
雨ふれば青き御空ぞなつかしきその青空も寂しと思へど

詩人としての白秋

北原白秋の處女詩集「邪宗門」は明治四十二年に出た。彼のこの最初の出発は限りなく華やかなものであつた。彼の詩の特徴は先づ何よりもその豊麗な文字、限りなく裕かな語彙である。そしてまた何よりもその特異な感覺的比喩である。彼は有明が企てた感覺本位の象徴詩を彼獨特な濃厚な官能をもつて再建した。それは全く驚異すべ

きオリチナリチーであつた。

晩春の室の間

暮れなやみ、暮れなやみ、噴水の氷はしたゝる……
そのもとにあまリリ赤くほのめき、
やはらかにちらばへるヘリオトロオプ。
わかき日のなまめきのそのほめき静こゝろなし。

盡きせざる噴水上
黄なる實の熟るゝ草、奇異の香木
その空にはるかなる硝子の青み、
外光のそのなごり、鳴ける鶯、
わかき日の薄暮のそのしらべ静こゝろなし。

(室内庭園)——「邪宗門」

彼は明らかな視覚をもつてゐる。彼の詩は繪畫的に色彩を以て先づ人を驚かす。彼はこの點で言語の畫家とも言へよう。彼の出現は詩壇はじめて見る言葉の天才を得たわけである。彼は詩人としても思想の詩人でない。彼の見る人生はたゞ感覺の表象である。随つて享樂的感溺的である。この點が彼の抒情詩に特異な立場を與へると共に、又一部の人々の批難をも享けしめる處であらう。併し彼は徹頭徹尾オリチナルな詩人で、彼の藝術は何人の

追従をも許さぬ。この個的な特徴は既に「邪宗門」に於て明瞭であつた。しかし彼の聲譽はむしろ次の「おもひで」(明治四十四年)といふ小曲集を出すに及んで高まつた。この詩は「邪宗門」の如き色彩絢爛の強烈な感覺詩ではない。その感覺を通じて見た一つの情緒の世界である。それ故、それは純粹なり、シズムに行つたのである。彼は幼時の追憶を心ゆくばかりこの詩に歌つた。そして性に目覺める少年の悲哀の心を彼の官能を通じて歌ひ出たのである。

日も知らず。
ところもしらず。
美しう稚兒めくひとと
匂ひよりて
桃か、IKURIか、
朱の盆に盛りつとまでを。
餘は知らず、
また名も知らず。
夢なりや。
さあれ、おぼろに
朱の盆に盛りつとまでを、
わが見しは

紅き實なりき。

(紅き實)——「おもひで」

ついで彼は「東京景物詩」を出して、都會情調をその特異の官能的抒情詩によつて歌つた。これは純然たる印象主義の詩で、その明確な色彩的繪畫は又彼の資質の一面を表してゐる。かくてその後彼は短歌の創作に走り、後「梁塵秘抄」から暗示を受けたやうな短詩「白金の獨樂」を出したが、こゝに於て彼は鶴の日の濃厚な官能詩から全く反いて簡素な呪符のやうな詩を試みた。そして最近彼は童謡及び民謡の創作に走り、又その小曲も、俳句的な簡素な自然觀照を基本にしたやうな詩へと轉向した。即ち「トンボの眼玉」といふが如き童謡集や、「日本の笛」といふ民謡集、及び最近(大正十二年)になつて「水墨集」といふ小曲集をも出してゐる。併し彼はいかに轉向しても、その豊富な詩才は滾々として盡きない。そして彼の最も力を入れつゝあるは童謡及び民謡の新方面にあるのである。私は以上を以て勿論以後の白秋を評論しようとはせぬが、併し彼の偉大な詩的功績は既に十分過去

に於ても完成してゐることを思ふものである。

(川路柳虹—日本現代詩史)

二一 本多重次

新井 白石

1 解題

重忠に罹り、才でに不治を覺悟して療養を加へなかつた徳川家康に對し、死を賭して直諫し、遂に全快の喜を得しめた本多重次の忠節談である。
出典「藩翰譜」(ハンカンブ)——十三卷、二十冊——は、著者新井白石が徳川家宣の命を受けて、關ヶ原役後より延寶八年に至る十餘年間にわたる萬石以上の諸侯、三百三十七家の傳記・沿革を収録したもの。每家の始に系譜を列ねて世次を詳かにした。今、「新井白石全集」に收めてある。

2 作者

新井白石 アラキ ハクセキ。
徳川時代の學者で、政治家。名は君美、小字は勘解由(カゲユ)、字は在中、白石はその號である。明暦三年、江戸柳原に生れた。幼時から穎敏で、學を好み、非常な刻苦を積んだ。年三十で、木下順庵の門に學んだ。博覽強記で、理財・制度・歴史及び典故に精通し、學者として知らぬ處がなく、又經世済民の器を備へてゐ

3 編纂の用意

た。元祿六年、徳川綱豊(家宣)が甲府藩邸にあるとき、順庵の薦舉によつて、その儒官となつた。寶永七年、家宣が入つて將軍となるや、また従つて殿中に仕へ、政治にあづかつた。當時幕府の弊政の釐革せられたのは、白石の意見に基づくものが多かつた。家宣が薨じて、家繼が將軍となるに及んでも、猶政治にあづかつてゐたが、享保元年、吉宗が將軍となるに及んで、職を罷めて著述に耽り、同十年(三十三)に卒した。年六十九。
白石は、官位は從五位下筑後守に過ぎなかつたが、その識見は超過で一代の俊傑であつた。嘗て曰く、
「大丈夫生きて封侯を得ずば、死して當に閻魔王となるべし。」と。以てその志氣と操守とを知るに足りる。
著述は甚だ多く、東雅・同文通考・藩翰譜・讀史餘論・折り狭く柴の記・本朝軍器考・古史通・采覽異言等、百七十餘種に上る。これらは今みな白石全集に收めてある。
明治四十年十一月、正四位を追贈せられた。

本多重次がその主家康に對する忠諫の顛末は、文豪白石の健筆によつて遺憾なく描き出されてゐる。本課をこゝ

に採つた所以は、重次の純忠に感激せしめ、兼ねて白石の文の特色と妙趣とを味解せしめんが爲に外ならぬ。

4 要旨

本多重次の誠忠と當時の武士の氣風及び主従關係の濃かであつた點とが力づくよく描かれてある。即ち、忠義一徹の重次の言動を極めて鮮かに、あたかも舞臺の上の役者の科白を想はせるやうに敘して行つた作者の筆の力は、讀者をどこまでもしつかりと捉へて行く。文語體であり、その上、時代の距離もあるこの文章に於て、主題たる人物の特色面目が、今日のわれらにかくまで印象づくよく映つて来るのは、やはり表現の力によるのである。かういふ點に着眼して、内容たる事實と共に、白石の文章家たる所以を説き聞かせたいものである。

5 概説

第一節（一五三頁—一五四頁一行）家康は疔を病んで不治を覺悟し、家人たちに遺言する。上下の人々の周章は一通りでない。

第二節（一五四頁二行—一五六頁二行）本多重次が泣いて更に治療せらるべしと進言するが、家康は聽かない。

重次は怒つて御前を退出し、切腹しようとする。家康は驚いて之を止めさせる。

第三節（一五六頁三行—一五八頁五行）家康は重次の狂態をとがめる。重次は切腹を決心した理由を委細に説明する。

第四節（一五八頁六行—一五九頁一行）主従の意がやうやく解ける。そこで重次の進言に従つて、家康は醫師を召す。

第五節（一五九頁二行—）重次は醫師の命によつて、手づから家康に灸を据ゑる。治療の効が忽ち顯れて、御惱平癒、重次その他の人々は感激の涙にくれる。

6 取扱上の注意

家康に對して最上級の敬語が使用してある。（これはもとより、白石が家宣の命を受けて録したものであるからであるが、）その爲に、この話はうっかりすると家康が將軍になつてからの事のやうに、つい思ひ込みがちである。

「天正十三年」といふ起筆の文字によく注意させねばならぬ。家康はこの年にはまだ四十四であつた筈。もし重次の進言を容れないで、死んでしまつたなら、徳川殿も何もあつたものではない。それを思ふと、この時の本多重次の忠諫の功は、實に偉大なものであつたといはねばならぬ。

「御聲の北條殿」のことを心配して、「當家滅されん云々」といつてゐる次第は、「天正十三年」の當時の天下の形勢を語つてゐるものとして、歴史科と關聯せしめて注意させるがよい。

重次が怒つて、家康の枕もとを立つ處、それを近侍のものが止めるところ、それから最後の節の重次が手づから家康に灸を据ゑるところなどは、特にあざやかな劇的シーンである。

かういふ人物の、かうした場面の表現は、元來白石の個性に根ざしてゐるもので、彼が得意とするところであつたらしい。即ち、白石でなければ、かういふ人物をかうまで描くことは出来ないと思ふのである。

「命を惜しむ」（一五四頁六行）と見られることを、かういふ場合にも面目にさはると考へてゐるのは、武士道の餘弊の一つであると思ふ。下の重次の意見によつて、この家康の考が打碎かれてしまふのは、即ち眞の武士道といふものが、やはり理由の薄弱な、或は無意義な死を許容しないことを語つてゐる。

「御跡にさがつて」（一五五頁一行）の「さがつて」の語義に注意させたい。

「當家滅されんこと云々」（一五七頁七行）忠義の一徹心が、この思むべきことをも憚るところなく言はせてゐる。

「汝が言ふところ、ことわり至極せり」（一五八頁六行）道理に従ふところに家康のえらさが窺はれる。「至極せり」の如く、「至極」を佐行變格動詞に用ひることは、今日には例がない。

7 設問

1 天正十三年には徳川家康は何歳ぐらゐであつたと思ふか。

- 2 「御背中」見えさせ給ひ、「思し召し」仰せ置かる」その他、敬語づくめで書いてあるのは、何故であらうか。
- 3 重次の忠義一徹なところが、最もよく現れた言動をあげよ。
- 4 家康の偉い點をもあげよ。
- 5 次の語句の意味は、
イ、立てぬ願もなし。
ロ、あつたらしき命かな。
ハ、御跡にさがる。
ニ、えこそ止めぬ。
ホ、負はぬ手も候はず。
ヘ、汝が言ふところ、ことわり至極せり。
- 6 劇的に描かれた巧な點はどこ／＼か。

8 釋義

【本多重次】 ホンダシゲツグ。幼名八藏、作左衛門と稱した。三河の人。徳川清康・廣忠に歴事して、家康の代に及んだ。

一向宗一揆の起つたとき、その宗旨を改め、一揆と戦つて功があつた。家康は岡崎に奉行を置き、重次及び高力清長・天野康景をこれに任じた。當時の民はこれを謡うて、「佛高力、鬼作左、どちへんなしの天野三兵。」といつたとか。
重次は勇猛で威厳があつたので、かやうに鬼作左と稱せられたのである。然し、下情に通じ、義理に敏く、克くその職に稱うた。
元龜三年、三方ヶ原の戦に殿して甲州勢を支へ、天正元年長篠に奮闘して身に三創を蒙り、射られて右眼をいためた。同年高天神に戦つて、敵の首十八を獲た。
同十九年豊臣秀吉が小田原を征したとき、家康はその沿道に在る領内の諸城を開放して秀吉の兵を入れた。重次はその非を痛諫した。秀吉は岡崎に到着し、重次を召したが、重次は調しないので、秀吉の意に忤つた。それで家康は重次を上總の古井戸に屏居させ、三千石を給して、老後の休養をさせた。文祿五年(三癸)七月卒。年六十八。成重・宣正の二子があつた。家康は、後各、四萬

石を授けて重次の功に酬いた。

重次は率直誠實で、奇行が多かつた。嘗て陣中、書を留守宅に寄せて、「一筆申、火の用心、お仙泣かすな、馬肥やせ。」と書き送つたといふ。

世に傳ふるところの大久保彦左衛門の逸事には、往々重次の事蹟が混じてゐる。

【御背中】 オセナカ。オンセナカ。

【疔】 チャウ。今は醫學上癰腫(Furunkel)といふ。化膿菌による皮膚及び皮下結締組織中の急性限局性炎症である。

その發生の初は赤くて瘡瘡の如く、だん／＼に紅く腫れあがり、痛みがひどく、屢、惡寒熱發を伴ひ屢、淋巴腺炎を來し、稀には蜂窩織炎・栓塞性靜脈炎・膿毒症のため死ぬこともある。

本症は身體の各部に出来るが、殊に顔面に多い。漢方では耳疔(外聽道)・鼻疔・眉疔・脾疔(口唇)・頬疔・魚眉疔(外眥)等に別けてゐる。その他四肢・臀部にも亦多い。經過は、數日で腫脹が極限に達すれば、頂點が膿潰して

疼痛が稍、減じ、遂に壞疽片を放出すると共に治癒するが、顔面特に口唇の如き、骨面と緊着しない部分のものは、往々危険を伴ふ。古來面疔を忌むのはそのためである。

【宗徒】 ムネト。宗とある者の意。おもだつた者。「徒」は借字。

保元物語、親治等生捕の條に、「宗徒の者ども十六人。」

【御家人】 ゴケニン。家人の敬稱。年來の家臣。

江戸幕府時代では、特に將軍家の直參で、御目見以下の士の稱となつた。

【御跡の事】 オンアトのコト。死後の事。跡は借字。

【周章】 シウシャウ。あわてること。

魏志の陳登傳の註に、「賊周章、方結陣、不_レ得_レ還_レ船。」

【土民】 ドミン。土着の民。こゝでは土百姓即ち身分の低い者を意味する。

【程々に從ひて】 身分相應に。

【立てぬ願もなし】 願は「グン」と讀む。特に神佛に祈願をこめることに用ひる語。いろ／＼と神佛に祈願をこ

めたといふ意。

【殿】 トノ。貴人の住む建物といふ義から轉じて、貴人を稱し、又は主君を呼ぶ稱となつた。こゝは主君家康を呼ぶに用ひたのである。

【驗を得し】 シルシをエシ。効驗があつた。きゝめがあらはれた。

【手を束ぬ】 テをツカぬ。手を下すに由なくして已む。

【且は】 又一方から言へば。

【腫物】 シュモツ。出来物。はれもの。

【輕々しく思し召し云々】 これつばかりの腫物をと御輕蔑なさつて、打捨ておいてひどくなつたればこそ、多くの醫者もせんすべがなくなつたのでござります。

【亡す】 ウす。死亡する。

【心がら】 わが心から出てかやうになつたこと。自業自得。「がら」は接尾語、から(柄)に同じ。

【あつたらしき】 「あたらしき」の俗語。惜しむべき意。

【諸醫術盡きぬ云々】 他の諸醫たちが手段が盡きたと申す以上は、彼とてもおなほし申すことはできませんまい。

「彼」とは重次が意中の醫。

【御跡にさがつての云々】 殿がおかくれになつたあとの死出の御供は出来ません、では、おさきにあの世へ参りませう。

「さがる」は、後になる、おくれるの意。

平治物語の義朝青幕落著の條に、「若者どもは、さがりぬるか。」

【御供】は死出の旅の御供の意。

【仰せらるべき旨あらせられ候】 この主語は何か、生徒に聞いて見たい。「殿が貴殿に言ひ聞かすことがあらせられる。」といふのである。

【最後の暇をうて云々】 「止めやうや」の「や」は詠歎の助詞。「殿ばら」の「ばら」は複数をあらはす接尾語。「今生のおいとまごひをして下つたからには、何等御用も無い筈だに、それを止めるといふ貴殿等の振舞は見苦しいぞや。」とでも言つて見たらどうか。

【えこそ止めねと申せとは】 「ようとめることが出来ませんでした。」と殿に申しあげよとは。

【おとなしく】 「おとなし」は「おとならし」の意。

こゝは「宿老らし」の意。この一句は『その人を止めよ。』との仰を蒙りたる御使の我々が、『どうもお止め申すことが出来ませんでした。』と復命する事が出来るか出来ないか、思つて見て下さい。それをさうせよとおつしやるのは、酸いも甘いもよくわかつてゐる宿老の貴殿にも似合はないではありませんか。本多殿。』といふ程の意。

【げにさも候】 ほんにさうでござつた。

【家康未だ死し果てぬに】 こゝは餘情を含めた處。

「おれが死んでもしまはぬのに、貴様はなぜそのやうなことをする」と、語を添へて見るべきである。

【縦ひ】 タトひ。よしんば。「縦令」「假令」とも書く。

【汝等が世に在らんを云々】 きさまたちが世に生存してゐてくれるのを頼りにしてこそ安心して死なれるのだ。

【掟して】 オキテして。いろ／＼と指揮もし制裁もして。

【仰までも候はず】 おほせらるゝまでもござりません。

【犬死せん人の御供】 犬死せん人とは誰を指すか、又何故さういふかを生徒に言はせてみたい。

【その詮なし】 それは何のかひもないこととござる。

【負はぬ手も候はず】 有らゆる負傷をしたといふ意。「手」は手きず。負傷。創傷。

【かたは】 不具。

【他人までも候まじ】 我が國を奪ひ取らうとするものは他人どころか、近親のうちすらあるといふのである。

【北條殿】 北條氏直。氏政の長子。小田原北條氏の第五世。左京大夫に任じ、陸奥守を兼ね、從五位下に敘せられた。

天正元年父に嗣いで立ち、頻に關東の疆土を開拓し、織田・徳川と結んで武田氏と絶つた。天正十一年家康の女を娶つた。故に御掣といふ。秀吉は四海平定の後、氏直父子の入京を再三促したが、應じない。そこで、天正十八年終に小田原征伐となり、氏直等は出でて降つた。

秀吉は氏政に自盡を命じ、氏直を高野に放つた。けれど徳川氏は氏直を恩遇し、十九年(三五)これを大阪に迎へ、明年を以て伯耆に封ずることを約したが、會病んで卒した。年三十。

【踵を回らすべからず】 踵をかへして方向をかへる間もないこと。極めて速かなことにいふ。

史記の吳起傳に「其父不_レ旋_レ踵、遂死_ニ於敵_一」

【存へて】 ナガラへて。いきながらへて。餘命を保つて。

【譜代】 フダイ。譜第とも書く。代々つかへ來れる家臣。

世臣。書言故事に「譜第郎從也。」もと世々同一家系を繼承し來れるもの、即ち家柄の意。

尺牘雙魚に「家譜代々」

増註職原抄に、「代々系圖正、而官位次第不_レ亂。有_レ功曰_ニ譜代_一」

功曰_ニ譜代_一

江戸幕府時代には關ヶ原役前より徳川氏に臣屬する大名を譜代大名と稱し、然らざるものを外様大名といつた。

又譜代大名に准ぜられた外様大名を願御譜代といつた。

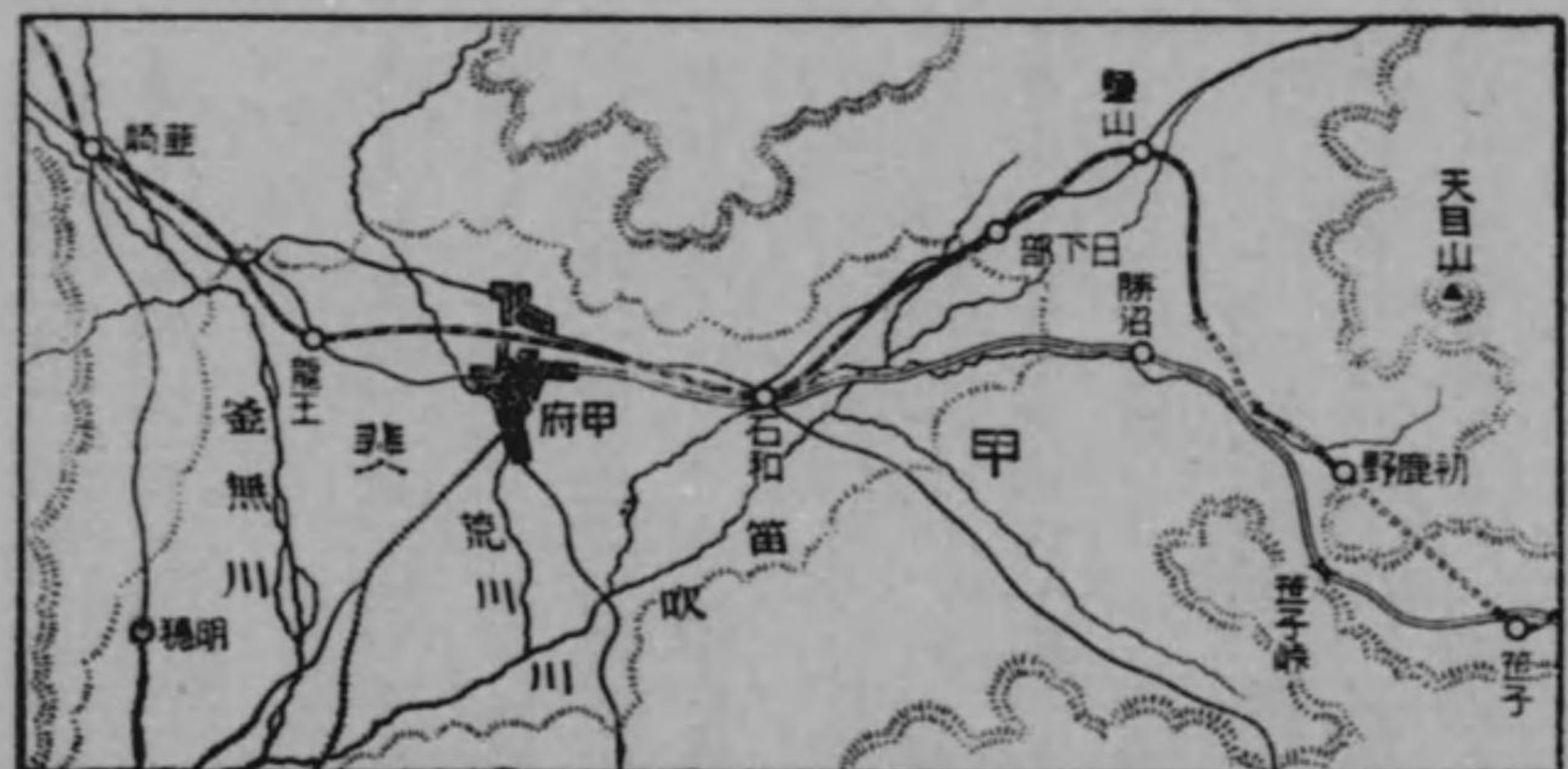
【後指さる】 ウシロユビさる。かげでわらはれる。

【この頃までも】 この最近に於ても。

【武田の家の人々云々】 勝頼が敗死し、武田氏が滅びた後、その遺臣等の徳川氏に降つたものが憐むべき状態であつたことをいふ。

勝頼は武田晴信の子。永祿五年六月諏訪氏を嗣ぎ、信濃伊奈郡代となつた。世に伊奈四郎と稱する。八年一月、

織田信長はその姪にあたる美濃の遠山友勝の女をこれに嫁がせ、信勝を生んだ。



天正二年六月高天神城を降し、三年五月三日長篠に次

勝頼は晴信の歿後家を嗣いたが、血氣に逸り、思慮に乏しかつたので、宿將は多く心を離した。やがて父の志を嗣いで西上せんとし、上杉氏と結び、北條氏と和し、遠く毛利・吉川の諸氏及び備後に在つた足利義昭と通じ、

終。」

尙書の仲虺之語に「茲率_ニ厥典_一奉_ニ若天命_一」

【いかなる恥を見つべくとも】 どのやうな恥を將來に見たとしても。

「つ」は完了の助動詞であるが、こゝは語調を強めるために用ひたのである。

【灸治】 灸の治療。灸は艾を皮膚につけ、これを灼き、刺戟と誘導によつて血液の異常を復し、よつて以て疾病を癒す醫術の一法。

【艾】 モグサ。蓬の葉を乾かし、揉んで製したもの。灸に用ひる。

【据う】 スウ。灸をすゑる。

【御腦】 ゴノウ。おんなやみ。おんいたみ。

9 挿 圖

新井白石

東京帝室博物館所藏の肖像。

【さらぬ人】 それほどでもない人。なんでもない人。
【この老人めが】 めの字を入れた所の語趣を知らせたい。
【天命】 自然にきまつてをる運命。こゝは天命に依つて定まれる壽命の意。

日本後紀、延暦廿四年八月己未の條に、「終_ニ以_ニ天命_一」

三 厨子王

森 鷗 外

1 解 題

これは人買を題材とした「山椒大夫」といふ小説の終りの方、全篇の三分一ほどにあたる「厨子王」とはその主要人物であるのでこゝに題名とした。この傳説の行はれてゐる丹後國由良地方では、厨子王（づしわう）を「つしわう」と呼んでゐる。又都志王なども書く。

「山椒大夫」は大正四年一月雑誌中央公論に發表せられ、大正七年二月單行本「高瀬舟」に收められた。「鷗外全集」には第四卷に輯められてゐる。本課は全集に據つた。

2 作 者

森鷗外 モリ オウグワイ。

名は林太郎。明治大正の文壇に於ける最も偉大なる文豪の一人で、曾て道（坪内逍遙）鷗（森鷗外）紅（尾崎紅葉）露（幸田露伴）と並稱せられた。その家は世々石見國津和野の藩醫であつた。明治十四年醫科大學卒業後陸軍軍醫となり、十七年獨逸に留

學して、二十一年歸朝、二十四年醫學博士の學位を得た。後日清日露の兩役に従軍、累進して四十年軍醫總監となつた。文壇の活動は二十二年頃からで、初めは美學を紹介し、批評家として立つ



たが、同時に創作翻譯を公にして文名一世を歴した。四十二年文學博士を授けられた。その後は西洋の新文藝の紹介翻譯に努めて、毎に我が文壇を啓發する所があつ

た。晩年には歴史小説や考證傳記方面に筆をつけた。かくて氏は單に明治の文壇に於ける先覺者指導者であつたのみならず、近世日本の生んだ、最も多才多能な、博識宏學な、精力絶倫、人格高潔な士と稱してよからう。その文業は「鷗外全集」十八卷となつて公にせられてゐる。なほ、氏の晩年の文學については次に永井荷風の説を擧げよう。

△千桑山房（鷗外氏の邸）晩年の諸作を總稱して歴史小説或は歴史物となすは固より可なるべし。然れども從來世人の稗史小説と稱し來れるものとは全くその選を異にす。先生の所謂歴史物は實に先生獨創の文學にして、我が文學史上曾てその類例を見ざるものなり。

△山房の小説體史傳は、正史の威嚴と、隨筆の興趣と、神史講談の妙味とを併せ有して、その間更にまた著者平生の卓見高識を窺ひ知らしむ。修史を尙ぶものは、山房文學の考證該博精緻なるを見て、自ら敬意を表すべく、野乘の興を娛しまんとするものは、記事の絶妙なるを見て讚賞の辭を求むるに苦しむべし。

△往年著者が毎夕寄席に赴きて聴きたりし講談と、攻學の餘暇愛讀したりし古老の隨筆とは、偶然著者が晩年に至つて自家獨特の新文學を大成せしむる遠因となりしなり。藝術製作の興會は凡て偶然に發するものなり。偶然に發したる興會を捉へて散逸せしめず、能く製作の功を收めしむるものは、蓋しその人平生の蘊蓄と製作に對する熱誠との二者に他ならず。

△わが近時の文壇、西歐十九世紀末の文學を仰いで宗となししより、許すに名篇佳什を以てするもの、戀愛を説くにあらざれば憂傷病衰の狀を描くに止り、悽愴凜烈の氣概を寫すもの全くその跡を斷つに至れり。先生晩年の歴史小説には、正に群芳妍を競ふの間孤松の亭々たるを仰ぐ思あるものあり。(麻布襟記摘録)

3 編纂の用意

興味を主にした讀物を置いたものである。現代文學の高峯に位する作品について中學生にふさはしいものを幾つか讀本中に收めたいことは編纂の根本方針であつて、そ

の一つのあらはれが本課である。鷗外後期の特色のよくあらはれた、圓熟洗煉された構想と筆致とには、味はふべき醍醐味がある。これに親炙することによつて、生徒の受ける情操上の好影響はさることながら、また文藝愛好の心を養ひ、作文措辭の技に資するなど、得るところは蓋し尠少ではあるまい。

4 要旨

敘事の展開が劇的に行はれて、讀者をぐんぐんと引張つて行く脚色の巧妙さ、會話に記事に作者獨得の落ちつきと精緻と力づよさを有つ老熟の筆致。厨子王・曇猛律師などの各人物の面目躍如たる描寫。凡そこれらが本文の味はひどころである。その安壽の犠牲的決心——親を思ひ弟を思ふあまりの、雄々しくも亦尊くけだかい心の姿と、安壽の詞に開運を信じて、遂にこれも覺悟を極め、親を尋ねに唯一人甲斐々々しく旅立つ少年厨子王のいたいけなる有様とは、特に生徒に味ははしめたい處である。又、内に無限の慈悲を藏しつゝ、心なき山椒大夫一味の討手を前に、手づから本堂の戸を開いて、一言の

下に彼等を沈黙退却せしめる曇猛律師の堂々たる態度、さては高笑ひする鐘樓守の爺の言動などは、殊にこの作者の毅然たる人格個性から生み出された文字として鑑賞せしめたい。若しそれ大團圓の母子對面の情景に至つては、誰れか聲を呑んで眼底の熱くなるを覺えぬものがあるらう。

5 概論

全篇の構造

厨子王は姉の安壽と共に、母と老女中とに連れられて、筑後に赴いてゐるといふ父を尋ねる爲に岩代國信夫郡を出立し、途中で人買に欺かれた。その結果、母と生別して山椒大夫の下で姉と共に囚人の如く酷使される。せめて弟だけでも逃したいと夙くから決心した姉は、或日厨子王を勵ましてそれを實行させる。厨子王は先づ中山の國分寺へと急ぐ。本課はその逃亡の後に起つた追跡のところから始つてゐる。厨子王は國分寺の住持に救はれて都に上り、關白師實に邂逅し、やがて正道と名乗つて丹後の國守となり、母にも巡り會ふことになる。

6 取扱上の注意

□本課を授ける前に、先づ本課の場面に至る話の筋をかい摘んで語る必要があらう。(「参考」の項参照)

□説明或は問答によつて、「要旨」の項に擧げたやうな諸點を感得せしむべきであるが、尙部分的に見て注意せしむ

第一節(二五九頁——一六五頁七行) 中山の國分寺に隠さ

された厨子王を、山椒大夫の討手が探し出さうと押寄せた處。住持曇猛律師が立派にこれに應酬したので、討手の衆は空しく歸る。

第二節(一六五頁八行——一六九頁四行) 厨子王は僧形となり曇猛律師に連れられて寺を出で、山城朱雀野まで來て律師と別れる。その後彼は東山清水寺に泊つて關白師實に邂逅し、身の上を語り、遂にその館に連れて行かれる。

第三節(一六九頁五行——一七四頁) 師實によつて還俗し、元服して正道と名乗つた厨子王は丹後の國守にされたが、折を得て佐渡に渡り遂に母にめぐり會つて互に感激の涙にくれる。

べき點は教授者の考によつて幾らも拾はれるであらう。
【例へば、「やう／＼」の事で本堂の戸が靜かにあいた（一六二頁一行）以下の數節は最も精彩に富む。曇猛律師の風采から後光が射して來るやうに思はれる。彼は一言を發しないうちに、すでに討手の衆を壓してゐる。

【「それになんぢや。御身が家の下人の詮議か。」（一六三頁七行）律師の詞は果して逆襲的になつた。その一言一句にはます／＼權威が加はつて行く。

【「そこをよう思うて見て云々」（一六四頁一行）律師はどこまでも人間が大きい。討手を吞んでしまつて尙餘りがある。遂に「律師は靜かに戸を締めた」の一句は、正に千鈞の重さがある。實はこの一句によつて、厨子王の閑運は宣言されたやうなものだ。

【鐘樓守が突然挿入する言葉には、讀者も討手の奴等と共に翻弄されてゐるやうに感ずる。作者の用意が巧妙である爲だ。「特に松明の行列が云々」（一六五頁五行）の一節に至つて、その敘景の妙は、以上數節の脚色の巧と相俟つて、全く讀者を魅するものがある。

【「おれは關白師實ぢや」（一六七頁七行）この一句が利いてゐる。以下厨子王と師實との會話には、劇的興趣が横溢してゐる。

【師實は厨子王を還俗させて（一六五頁五行）以下、話は三度轉じて、これからいよいよ大團圓に入る。

【「そのうち臟腑が煮え返るやうになつて」（一七三頁五行）以下、靈妙精緻な筆の力に、讀者はたゞ引据ゑられて行くばかりである。

【要するに、「敘事は精緻を極めて一の剩話をだに着けない。實に據つて文を行る間に空想の發動を見る。」とは、曾て作者鷗外氏が壽阿彌の手紙を評された言であるさうだが、この評言は直に鷗外氏自身の文の讚評ともならう。殊に中山の國分寺に山椒大夫の息子が押寄せる様子、曇猛律師が本堂から姿を現した處、討手の行列が寺を退いて行つた後、塙の鴉が鐘樓守の高笑の聲に驚いた處、母を見つけて近よつて行く正道の心理と動作、その時の母の驚き、これらの敘事や描寫は、全く「讚賞の辭を求むるに苦しむ」ほどの妙を極めてゐる。

7 設問

1 この一課は、われ／＼の感情をいろ／＼にゆすぶるが、特に、

イ、はら／＼と思はせられるところは？

ロ、たのもしく安心と思はせられるところは？

ハ、いゝ氣味だといふ場面は？

ニ、有りがたくも、うれしいといふ場面は？

ホ、正道に就いて一喜一憂される點は？

ヘ、涙なくしては讀み得ない場面は？

2 この話に現はれる人物で最も光つてゐるのは誰か。

3 次の言葉の意味は、

石疊。内陣。律師。偏衫。勅願の寺院。宸翰。檢校の責。錫杖。還俗。襪履。

8 釋義

【國分寺】 コクブンジ。丹後の國分寺は京都府與謝郡府中村大字國分に現在してゐる。宮津町の北一里半、江尻の西十町。（本書一五九頁地圖参照）されど貝原益軒の西北

紀行に「加佐郡中山、國分寺址、彌勒堂遺る。此は山椒大夫物語に見ゆる僧房なりとか。」云々とある。

國分寺とは王朝時代に、朝廷から諸國に分置せられた僧寺及び尼寺をいふ。別けては、僧寺を金光明四天王護國寺、尼寺を法華滅罪寺、通じては國分僧寺・國分尼寺と言ひ、又單に前者を國分寺、後者を法華寺とも言つた。

聖武天皇の天平三年三月勅して法華寺に國分僧寺・國分尼寺を建てしめられた。その詔は次の如くである。

頃者年穀登らず、且疫癘の加はれるにより、去年天下をして造佛寫經せしめしに、今歲は其の靈驗によりて風雨時に順ひ、五穀豐穰なり。金光明最勝王經によるに、もし國土に於て此の經を流通せば、我等四天王は悉く來りて擁護し、一切の禍を除かんといへり。依て今天下諸國に僧寺尼寺を建てしむ。僧寺を金光明四天王護國寺といひ、尼寺を法華滅罪寺といひ、僧寺には二十僧、封五十戸、水田四十町を施し、尼寺には十尼、十町を施さん。且、國毎に七重の塔一區を造り、金光明最勝王經を寫して、塔毎に各、一部を置かしめん。

僧尼は毎月八日には必ず最勝王經を轉讀すべし。月半に至る毎に戒羯磨を誦し、毎月六齋日には、公私の漁獵殺生を禁ず。國司等宜しく恆に檢校を加ふべし。それから、大和に東大寺及び法華寺を建て、東大寺を總國分寺、法華寺を總國分尼寺となした。國分寺の設立は、その由來する所が甚だ遠く、聖武天皇以前にも、地方によつては早く建立されたものもあるらしい。

【三門】 サンモン。寺院の本堂の前の樓門をいふ。通例二層になつてゐる。三解脱門即ち空門・無想門・無作門に喩へて三門といふのである。又、寺は多くは山地に在つた所からして、山號といふがあり、その門を山門とも言つた。

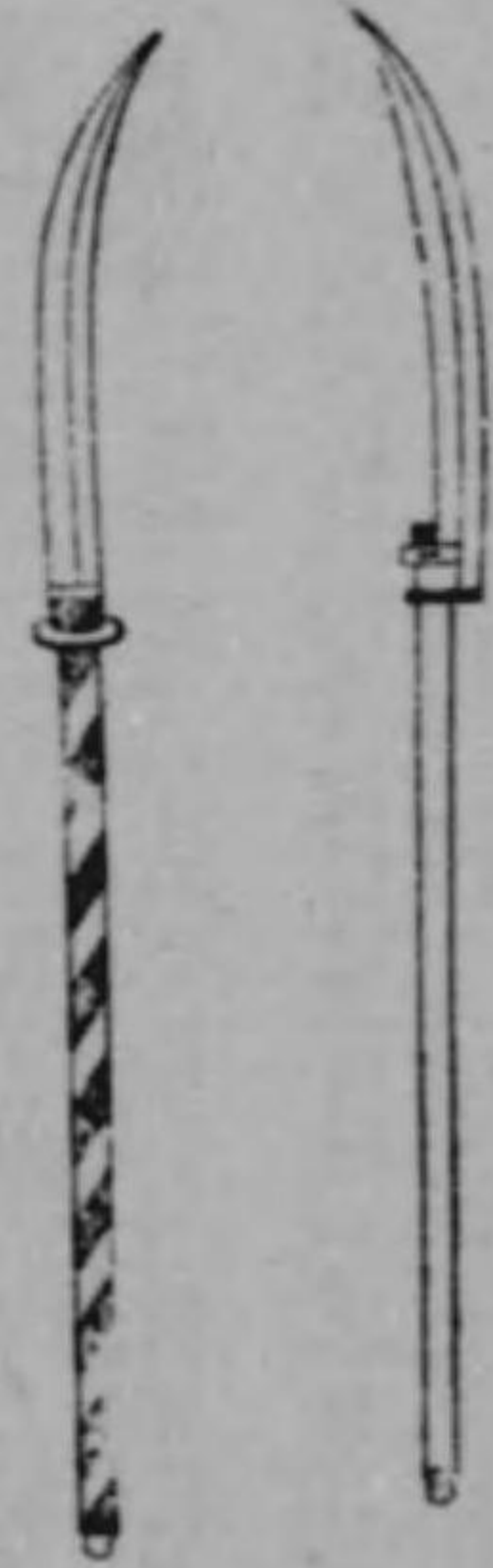
【松明】 タイマツ。松の木の脂の多い部分や、藁・竹・葦などを束ねたもの。火を點じて路を照らすに用ひる。

【火影】 ホカゲ。灯の光。

【白柄】 シラエ。木地のまゝで塗つてない柄をいふ。

【薙刀】 ナギナタ。長刀・眉尖刀なども書く、刀身の幅

が長く長くて反のあるものに長い柄の附いたもの。専ら敵を薙ぎ拂ふ武器。



奥州後三年記にその名が初めて見えてゐる。これを實戰に用ひたのは源平の頃からであらう。

【手挟む】 タバサむ。手にもつこと。又、脇にはさんで持つこと。

【山椒大夫 (サンセウダイフ) が族 (ヤカラ) のものぢや】 「ぢや」は「である」轉約。關西地方の語。

【奴】 ヤッコ。主人に驅使される賤しいもの。奴僕。下男。しもべ。

【山】 ヤマ。國分寺の寺中を山といつたのである。寺院の山號を「何々山」といふので、それからして「山」といつたもの。

【石疊】 イシダタミ。石を敷きつめた所をいふ。こゝは、

寺門内外の道路が石で疊を敷いた如くになつてゐるのである。

【手のもの】 手下のもの。部下。

【僧俗】 ソウゾク。出家した僧侶と、俗人と。

【簇る】 ムラがる。

【内陣】 ナイチン、神社では本殿の奥、神體を安置する所、寺院では本堂の奥、佛體を安置する所。その構造は宗派によつて差異がある。轉じては、内陣の外、外陣の中なる部。即ち中陣を内陣ともいふ。こゝはその中陣のことであらう。

【庫裡】 クリ。寺の厨房。轉じては、住職等の住む室をもいふ。

【討手】 ウツテ。「うちて」の音便。賊や、罪人や、逃亡者等を追捕するものをいふ。

【あけい】 「開けよ」といふよりも押柄な氣分を帯びてゐる。

【住持】 チュウヂ。一寺の主たる僧をいふ。(寺中に居住して、寺務を總べ持する義である)。

【曇猛律師】 ドンミヤウリッシ。律師は僧官の一。戒律をたもち、僧正・僧都に次いで僧尼を統べることを掌る。天武天皇の御代に初めて律師の任例を開かれた。

【偏袒】 ヘンサン。褊袒ともかく。全身の上半部を覆ふ衣で、北魏の世に始まり、僧衣の出來はじめだといふ。

【威儀をも繕はず】 身のなりふり體裁もかまはず。威儀とは、おも／＼しくて則るべき形をいふ。

左傳に、「北宮文子云、有威而可畏、謂之威。有儀可象、謂之儀。」

詩經の鄘風に「威儀棣々不可選也。」

【常燈明】 ジャウトウミヤウ。神佛の前に、いつも點しおくあかり。

【岩乗な】 ガンジョウな。岩の積み重なつた形から義を取つて、堅固な、達者な、丈夫な、といふ意に用ひる。頑丈(グワンチャウ)・岩疊(ガンデフ)なども書く。

【廉張つた】 カドバつた。やゝ方形になつてゐる。

【下人】 ゲニン。身分卑しきもの。下郎。

【夜陰】 ヤイン。夜の暗い時。夜分。よる。

【劍戟】 ケンゲキ。つるぎとほこ。又、武器の汎稱。

【それになんちや】 「それに何ぞや。」といふ俗語。これも關西地方の語。

【詮議】 センギ。(一)評議して事を明らかにすること。(二)罪人などを審問し、吟味すること。

【勅願の寺院】 チョクグワンのジキン。勅願寺。天皇の御發願によつて建立された寺。天智天皇が御願寺として崇福寺を建立せられたのが勅願寺の初である。

【勅額】 チョクガク。天皇の御宸筆によつて書かれた額。

【宸翰金字の經文】 シンカンコンジのキヤウモン。宸翰は宸筆といふに同じく、天皇の御直筆。金字とは、金泥(金箔の粉を膠水でといたもの)で書いた文字。

天皇の御直筆である金泥で書いた經文。

【狼藉】 ラウゼキ。狼が草を藉いて臥した跡が亂れてゐることからいふ語で、(一)亂雑なこと。散亂してゐること。(二)無法な所行。亂暴。

こゝは(二)の意。

【檢校】 ケンゲウ。點檢勘校(とりしらべをする)こと(一)の

義。國分寺を檢校することは、國司の任であること、聖武天皇の詔によつて明らかである。(國分寺の解参照。)

こゝは、國守が國分寺に關する取締の粗略を責められるといふ意味である。

檢校は、國衛の留守所の吏員や僧侶の職名である。又盲人の官名として用ひられることもあるが、こゝはさうで無い。

【總本山東大寺】 東大寺は全國國分寺の總本山である。(國分寺の解参照)本山とは、一宗一派の所屬寺院を統轄支配する資格をいふ。

【御沙汰】 ゴサタ。「沙汰」は、(一)處置して定めること。とりきめること。(二)是非を論じて定めること。裁斷。訴訟。(三)官府の指令。指圖。(四)報知。音信。たより。(五)世間の評判。

こゝは(三)の意で、都からの御指令をいふ。

【齒咬】 ハガミ、齒をぎし／＼いはせること。心がいらだつ時にする動作。

【木の葉のさわつくやうに】 面白い譬喩法。

【囁きかはす】 「囁」はサ、ヤク。私語しあふ。

【小わつばちやらう】 「小わつば」は子供をいやしめていふ語。小童。小豎。豎子。

「ちやらう」は關西地方の語。關東では「だらう」。

【聲の主】 主(ヌシ)は所有者。聲を發した當人といふ意に用ひた面白い轉義。

【鐘樓守】 シヌロウモリ。鐘樓の番をする男。

「鐘樓」は、鐘を吊して置いて、撞き鳴らす高どの。鐘つき堂。

【わつばはな】 「わつば」は「わらは」。小童。「な」は念を押すやうな心もちをあらはす助詞。「ね」といふよりはぞんざいな、横柄な言ひ方。

【築泥】 ツイヂ。「ついひち」といふ義。「ついがき」ともいふ。木材を心とし、その上を泥土で塗り固めて、屋根を互で葺いたもの。

【行つたちやろ】 「ちやろ」は「であらう」の俗語。「ちやらう」の約。關西地方の語。

【續け】 おれのあとにつゞいて來いといふ意。

【やう／＼落着いて寝ようとした】 この形容句が實によくその場の光景を髣髴させる。

【鴉】 カラス。

【盥ほどある】 【腕の太さ】 わざと大袈裟に言ひなして、曇猛律師の人格をえがいた所、面白い誇張法。

【鐵の受糧器】 鐵鉢。托鉢して食を人家から貰ひ受ける器。

【錫杖】 シヤクチャウ。僧侶が行脚の時に持ちあるく法杖。杖の頭に銅か鐵で作つた三股形があつて、その股から環が下つてある。突いて歩く毎に錫々の音がする故錫杖といふ。その音で、あたりの虫けらを拂ひのけて行くといふ意で、殺生戒をたもつ心から起つたもの。



【剃りこくつて】 髪を丁寧に剃り盡して、磨

きたてたやうにすること。「こくる」は磨くの義。

【僧衣】 ソウイ。僧侶の着用する衣服。法衣といふに同じ、普通に「ころも」といふ。

【權現堂】ゴンゲンダウ。權現とは、衆生濟度の方便のため、佛菩薩がかりに神として形を現するの義。兩部神道（本地垂迹の説にもとづいて神佛を合同したもの）の思想に基づく。熊野權現・箱根權現・東照權現など有名なものであるが、さほど有名でなくても、權現格の神を祀つてある堂を權現堂といふ。

【守本尊】マモリホンゾン。身の守りとして信仰する佛。その佛像を肌身離さず持つてゐることが多い。

【踵を旋す】クビスをカヘス。後返りをすること。もと来た道を引返すこと。

【僧形】ソウギヤウ。僧侶の姿。

【東山】ヒガシヤマ。京都の東方、近江との國境に起伏する一帯の連丘をいふ。

【籠堂】コモリダウ。信者の參詣して籠る堂。神社佛閣に附屬して建てられてある。

【直衣】ナホシ。「ノーション」と發音する。中古以來貴人常用の略服。直衣は冠を被るとは限らず、烏帽子をも用ひ、袴も指貫でよい。烏帽子直衣は公卿内々の常服。參内に

は必ず冠、直衣である。

【烏帽子】エボシ。冠の類で、頭に被るもの。上古は禮冠の下に被つたものであるが、醍醐天皇の頃から冠と帽とが並び行はれるやうになり、冠は正服に用ひ、帽は平常服に用ひるやうになつた。その種類に立烏帽子・風折烏帽子・揉烏帽子・梨子打烏帽子・引立烏帽子・細烏帽子・長烏帽子・引入烏帽子・袋烏帽子・ナツト烏帽子・柳さび烏帽子・折烏帽子等がある。

【指貫】サシスキ。奴袴。裾を糸で括つて穿く袴。裾に線を指し貫くといふ義。

伊勢貞丈は次の如く言つてゐる。

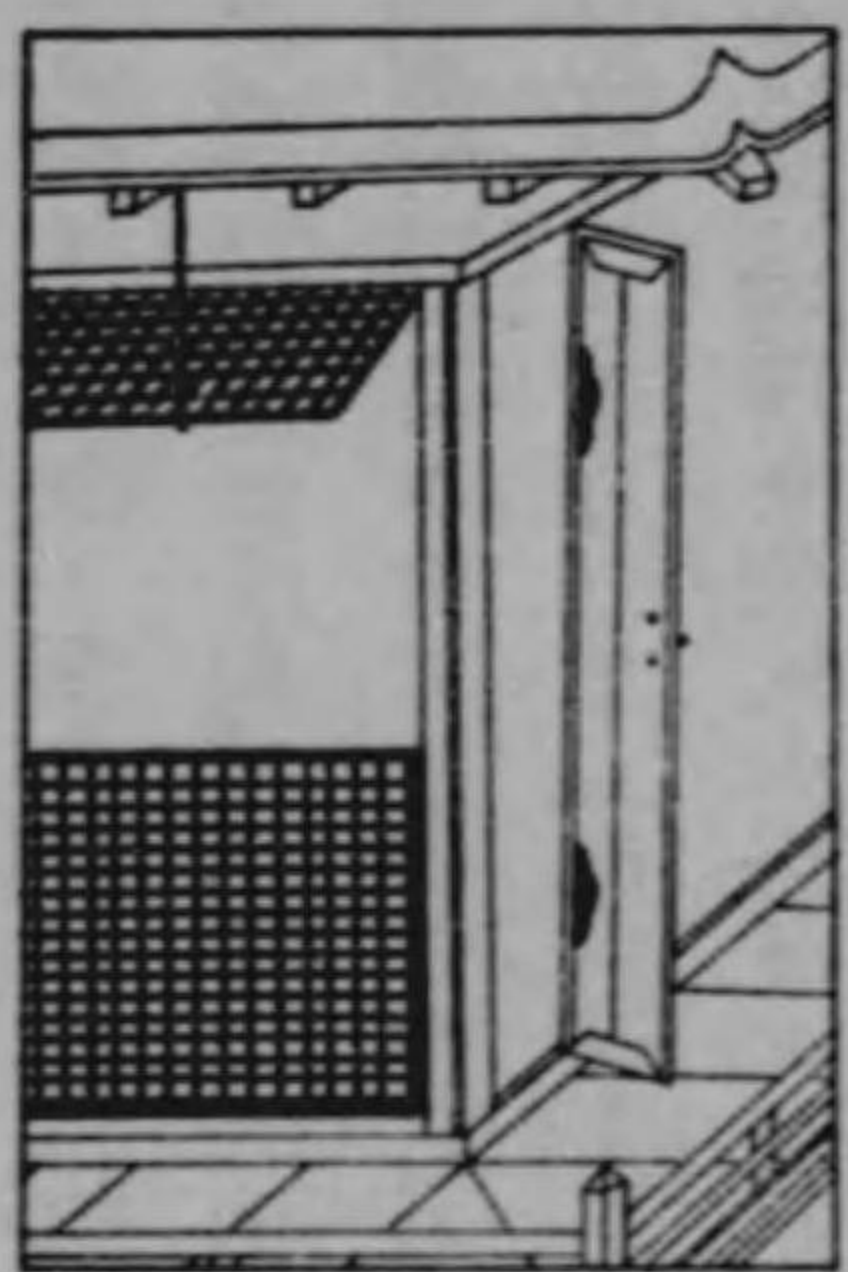
「奴袴と書くは、奴は奴僕にて、裾を高く括り上げて奔り廻るに便りよき故に奴僕に着すべき袴といふ心なり。是も後には公卿の服となつて綾織物を用ふることとなれり。」

【平癒】ヘイユ。病氣の癒えること。本復。全快。

【參籠】サンロウ。信者が神佛の前に晝夜籠つてゐて心身を潔齋して祈願をこめること。特に終夜祈願することに

いふ。

【お告があつた】祈願をこめてゐる人に對し、神佛がその至誠に感應して、然るべきことをお知らせ下さるといふ信仰から起つた語。こゝは、清水觀音のお告があつたのである。



【格子】カウシ。こゝでは、格子の間（即ち格子を取りつけてある室）のこと。格子とは、細い木を基盤の目の如くに組んだもの。古昔、寢殿・對屋などの四方を蔽ふために取りつけた。

【關白】クワンパク。昔、御成年後の天皇を輔佐し奉つた最高位の大臣をいふ。光孝天皇の時、藤原基經に、一切の奏文を、御覽に供する前に先づ關白（政治を巨細となく皆あづかりまうす意）せしめられたのがはじまりで、後に職名となつた。

【陸奥掾】ムツノジョウ。「掾」は古へ國を司る官の第三位。

大寶令の制、諸官衙の有位官吏を四等に分つた。「掾」はその第三位に當る。

國司

大守(カミ)

介(スケ)

大掾(ジョウ)

少目(サクワン)

【人買】ヒトカヒ。人身を賣買する者。人商人（ヒトアキビト）ともいふ。人を買取つたり、勾引して賣ることを業とする。武家時代には盛に行はれたものと見える。古事類苑に

「奴婢及び雜人は、鎌倉・足利時代において、古昔の習慣に従ひて専ら富家に使役せしものにして、當時これを賣買し、若しくは良民を勾引し、又は質入して奴婢となすことは、嚴にこれを禁斷せしも、諸國往々これに従事する商人ありて、その禁容易に行はれざりしもの如し。」

【放光地藏菩薩】ハウクウチザウボサツ。放光王地藏菩薩の略。左手に錫杖を持ち、右手は開いて五指を垂れ、與願の印に作つて、五風十雨五穀成就の願を旨とする地藏菩薩である。

凡そ地藏に左の數種ある。

- 一、預天賀地藏
- 二、放光王地藏
- 三、金剛願地藏
- 四、金剛寶地藏
- 五、金剛幢地藏
- 六、金剛悲地藏

【金像】 コンザウ。黄金で造つた像。

【持佛】 チブツ。念持佛・護持佛などといふ語の略。一定の處に安置して禮拜供養する佛。

【仙洞】 セントウ。(トの音濁らぬ) 上皇の御所。轉じて上皇を申し奉る。こゝは白河上皇の御事である。

上皇の御所を仙人の居所に喩へた語で、

唐書明皇記に「天寶九載、上幸清華宮。大白山人言、玄皇帝降寶于仙洞。」

とあるより出た語であらう。

菅家文章の嵯峨院賦に「老鶴從來仙洞駕。寒雲在昔妓樓衣。」

【違格】 キキヤク。王朝時代の罪名。格に違ふこと。格とは、制度・法律等に關して發布せられた臨時の勅令や官符をいふ。

職原抄に「合格者蒙賞、違格者被罰。」

【連坐】 レンザ。まきぞへ。連累ともいふ。他人の罪にかかりあつて罪に陥れられること。

【左遷】 サセン。貶謫ともいふ。卑い官におとされること。朝廷の列次は、右の方が高い位置で、左が低い位置である。故に、より下る義となる。

【還俗】 ゲンゾク。僧たることをやめて俗人(普通人)になること。

【受領(ズリヤウ)の御沙汰(ゴサタ)もあらう】 地方官に任ずるといふ朝廷の御命もあらう。

受領とは、王朝時代の中頃以降、その國に赴任して吏務を掌る國司の首席の稱、或は守(カミ)・權守(ゴンノカミ)、或は介(スケ)を稱する場合もあつた。

羽倉考には「其の國に在りて吏務を掌る者は、守・介・掾・目、皆受領と稱す。」

【冠を加へた】 元服をさせた。始めて一人前の男になつたしるしの禮を行つた。

元服とは、元は頭首、服は身に着ける義。始めて頭首に冠を着けること。古昔、男兒は幼時頭髮をあらはして頭に何もいたゞかない、元服の禮を行つて始めて冠を被り、童服を脱ぎ、成人の服を着、こゝに一人前の男となる。元服の禮は十五歳前後に行ふものであるが、必ずしもこれに拘らぬことがある。こゝでは還俗して始めて行つたのである。

禮記の曲禮には、「人生十年曰幼、學。二十曰弱冠。冠云々。」

【謫所】 タクシヨ。配所ともいふ。貶謫せられた所。「謫」は責め罰する義。

【寢れる】 ヤツれる。疲れ衰へる。憔悴する義。

【除目】 チモク。諸臣を官に任ずる公事。除は官に拜し、目は目錄に記す義。中古以來、節會・官奏・敘位の儀と併せて公事の最重儀式となつた。除目に左の如き別がある。

一、縣召除目(アガタメシチモク)主として諸國の國司を任ずる。春季に行ふから、春の除目とも稱する。

二、司召除目(ツカサメシチモク)京官除目とも稱し、主として在京官を任ずる。

但し、古は任官に一定の期がなかつた。

漢書の田蚡傳の註に、「凡言除去故官、就新官也。」

【奴婢】 ヌヒ。又ドヒとも訓む。下男と下女と。召使つてゐる男女。

【工匠】 コウシャウ。工作を職とする人。職工。工人。

【僧都】 ソウツ。僧官の一。僧正の次、律師の上に位する。推古天皇の朝に始めて一人を置き、後、大僧都・權大僧都・少僧都・權少僧都の數官に別れ、且その人數も多くなつた。

【假寧】 ケニョウ。官人に賜はる休暇。假は暇の字に通じ用ひられる。假は今の日曜日、寧は歸省といふやうなものである。

大寶令に「謂假者休暇、即每三六日並給一休息一日之類是也。寧者歸寧、即三年一給三定省假是也。」

【微行】 ビカウ。しのびあるきをすること。公にでなく
て、内々で人に目立たぬやうに行くこと。

【國府】 コフ。王朝時代以來、國衙の在つた所。

【疎らな生垣】 マバラなイケガキ。生垣とは、樹木を植ゑ
列ねた垣根をいふ。

【檻樓】 ボロ。

【つぶやく】 ぶつ／＼言ふ。くど／＼と低聲で獨語する。

【瘧病のやうに】 面白い譬喩法。瘧病は、マラリヤともい
ひ、俗に「おこり」「きやく」などといふ。間歇熱病で、
極めて劇しい熱が日を隔てて起る。その發熱の前には酷
だしい惡寒がして、身内の震へ方が實に甚だしい。

【ほうやれほ】 掛聲。こゝは、雀を追ふときの聲。「ほう：
…ほ」といふ呼聲の中間に「やれ」といふ間投詞を入れ
たものである。

【聞惚れた】 キ、ホれた。聞いて心がうつとりした。「惚」
は「恍惚」と熟し、心が全くそれに引きつけられて了ふこ
と。

【臟腑が煮えかへるやうな】 誇張法を兼ねた譬喩法。

【黙めいた叫】 譬喩が實に旨い。黙に似た叫聲。

【縛られた繩が解けたやうに】 譬喩法。駈込む勢が、この
譬喩によつてよく描かれてゐる。

【雀ではない大きなものが】 「雀ではない」の五字、含蓄の
ある筆致。

【罷めて】 ヤめて。

【干した貝が水にほとびるやうに】 奇抜な譬喩法。實に生
きた言ひかたである。

「ほとびる」は、水分を含んでふくれること。ふやける。

9 挿 圖

山椒大夫繪巻物語

山椒大夫繪巻物語中の挿圖である。放光地藏菩薩の光明に山椒
大夫の家の者が驚きあきれてゐる所である。

森鷗外

書齋に於ける、軍醫の正服をつけた森鷗外。

10 参 考

【「山椒大夫」の梗概

厨子王が姉の安壽と共に、母と老女中とに連れられて、筑紫に

赴いてゐるといふ父を尋ねる爲に岩代國信夫郡を出立し、途中
で人買に欺かれたことは、本文の一六七—一六八頁の厨子王の
詞の通りである。それから、本課の場面に至るまでの話の筋は
大體次のやうである。

◎厨子王母子と人買舟 最初に山岡大夫といふ人買舟の船頭に
欺かれ、それから宮崎の三郎といふものに賣られ、更に宮崎
から山椒大夫といふ分限者に賣られる。一緒であつた母と女
中との二人は、この姉弟とは別の船に乗せられた。女中は船
頭の隙を見て海に投身して死んでしまふ。母も二人の子供に
永別を告げて、投身の覺悟を極めたが、船頭はもう油断をし
なかつた。南へ漕がれる二人は北へ漕がれて行く船を目がけ
て「お母あ様／＼」と聲を限りに叫んで見たが、どうしようも
なかつた。

◎厨子王姉弟と山椒大夫 山椒大夫に買はれてからの二人の生
活は、實に不便とも悲惨ともいひやうがなかつた。山椒大夫
は「石浦と云ふ處に大きい邸を構へて、田畑に米麥を植ゑさ
せ、山では獵をさせ、流では漁をさせ、蠶飼をさせ、機織を
させ、金物・陶物・木の器、何から何までそれ／＼の職人を
使つて造らせる」といふ分限者で、「人なら幾らでも買ふ。」と
いふ男である。それには二郎といひ三郎といふ息子があつて

人をこき使ふ。特に三郎の方が極めて人を使ふことが慘酷で
あつた。

◎安壽の決心 二人は初め別々に仕事を當てがはれた、安壽は
汐汲みに、厨子王は柴刈に。そしてその年が暮れて年が明け
た。二人は或夜同じ夢を見た。それはこゝから逃げ出さうと
企てた者が課せられる烙印の刑をば、姉の安壽が受ける處で
あつた。安壽の心はそれから急に變つて來た。安壽は遂に無
理に願つて弟と一緒に柴刈をさせてくれといつた。安壽は厨
子王と一緒に柴刈に行つて、何とかして厨子王一人を逃出さ
せようと考へたのである。固より安壽自身は既に死を決して
ゐるのだ。柴刈の願は許された、その代り安壽は坊主頭にさ
れた。しかも安壽はそれを少しも驚かなかつた。厨子王には
姉が黙つて考へて許りゐるので、それほどまでにする姉の心
が分らなかつたのである。柴刈に出た山の頂で、安壽は厨子
王に、こゝを逃亡して都へ出て、父母の行方を探すやうにと
勵ます、そして自分だけはこゝにとまるといふ。厨子王は
姉との別れを悲しく思つたが、怜悯な姉の綿密な教訓を胸に
しめて逃亡を決行することにした。そして姉弟は山の清水で
別れの水盃を交した。厨子王は先づ中山の國分寺へと急ぐ。
弟を見送つた後で、安壽は沼に身を投げて死んだ。

山椒大夫物語の典拠

山椒大夫の事は和漢三才圖會卷七十七、丹後の部に
山椒大夫舊跡 在由良……七曲八峠山津志王丸賣柴於葛
友處、於今土人供柴。

とある。また同書卷六十五、奥州岩城山権現の條に

岩城山権現 在津輕弘前之南……本社在百澤寺、上山、登凡三

里許……俗云津志王丸祭、祐安壽之社。故於今丹後人不

許登山。如推參者必受神崇云々……

○相傳昔有當國領主岩城判官正氏者、永保元年之冬在京中

爲識者、謫西海、本國有二子、姉名安壽、弟名津志王丸

與母、拾傍過、出羽、到越後、直江浦有山角太夫者、每引

人、賣爲業、遇彼等、于逢岐橋、乃爲之、與婢女、和竹、賣

于佐渡、二子賣于丹後、由良、山椒太夫買取之、爲奴婢、而負

載、獨性之勉甚過、分姉類、欲教弟、道去事、風聞、灼

鐵印、額然懷中、地祇代、苦無、痕而弟、道去責、姉、問、嘗言不

白、行方、終責、殺焉、既而津志王、趁、入國分寺、乞、包圍、菴主、諾

藏、古紙籠中、繫、於、梁上、而讀經、無、他、太夫、父子等、追來、尋、之

雖、僧、盟、曰、不、知、旨、不、聽、搜、寺、內、及、紙籠、梯、折、而、拆、三

郎、腰、不、遂、歸、去、焉、寺、主、豫、聞、其、來、由、自、負、紙籠、到、洛、卸、

七條朱雀權現堂、出、見、別、去、津志王、往、攝津、天王寺、阿闍梨、憐
養、之、於、是、洛西、梅津、何、某、祈、養子、清水、觀音、因、夢、想、來、于、阿
闍梨、許、請、津志王、爲、養子、而、出、系圖、書、語、謔、言、滅、家、行、狀、
上、洛、奏、之、帝、紿、是、非、救、正、氏、流、刑、賜、本、領、且、賜、識者、領地、
於、津志王、津志王、奏、請、以、丹後、越後、佐渡、中、若、干、鄉、代、之、帝
許、之、因、自、赴、丹後、國、分、寺、爲、旅、館、住、僧、佈、領、主、不、意、入、來、而
出、奔、永保二年正月十六日、安壽、命、時、年、十、三、未、過、中、歲、出、世、也、
謝、厚、恩、也、錫、
太夫、同、三、郎、首、往、佐渡、尋、逢、盲、母、失、明、至、越後、殺、山角、太夫、
親、族、以、安壽、之、靈、祭、爲、神、

○按再起、家也、出於安壽之靈、祭、神、亦、宜、也、俗、以、爲、三、五、四、郡、國
主、者、非、也、唯、可、信、夫、郡、岩、城、郡、領、主、乎、名、曰、岩、城、判、官、之、後、川、
安壽、在、丹、後、時、呼、名、曰、信、夫、准、故、鄉、郡、名、也、永、保、者、白、河、院、年
號、而、源、賴、義、父、子、誅、戴、安、倍、賴、時、及、貞、任、宗、任、等、之、後、當、三、十、年、
源、義、家、攻、滅、清、原、武、衡、家、衡、等、之、前、當、二、十、年、矣、而、岩、城、與、津、經
岩、城、山、南、北、隔、百、餘、里、祭、之、也、未、審、如、津、輕、亦、兼、領、之、耶、
なほ淨瑠璃には
三莊大夫五人娘 竹山出雲作 享保十二年竹本座興行
を始とし、由良湊千軒長者……「増補三莊大夫」など様々ある。

二 三 氷川清話

勝 海 舟

1 解 題

「氷川清話」のうちから、西郷隆盛に關する部分を摘録したものである。

「氷川清話」は委しくは「海舟先生氷川清話」と題して正・續・續の三部から成る。吉本襄編纂、明治三十年十一月、鐵華書院の發行である。編者曰く、「余、しばしば翁に親炙して、諄々たるその高教を聴き、啓發せしもの少からず。乃ち餘韻の耳底に残れるものを録して「氷川清話」と題し、附するに翁の逸事と詩歌とを以てし、世の翁を欽仰する人士に頒つと云爾」と。本課は「續々氷川清話」から採つた。

2 作 者

勝 海舟 カツ カイシウ。

字は義邦、通稱は麟太郎、また安房守と稱した。海舟は號で、維新後は安房の名を用ひた。文政六年正月江戸本所龜澤町に生れた。安政二年、三十三歳で長崎表海軍傳習所御用を命ぜられ、翌

年講武所砲術師範役に任ぜられ、同六年海軍操練所教授方頭取となり、その年の秋、米國航海を命ぜられ、七年歸朝した。元治元年、軍艦奉行となつて、兵庫に塾舎を開いて海事を教授した。その年十一月、急御用あつて江戸に歸つたが、慶應二年また大阪に召されて、軍艦奉行となつた。後海軍奉行軍事總裁等に累進した。維新前に於ける彼の半生は、かくの如く殆ど我が海軍創設の爲に費されたのである。明治五年、海軍大輔に任ぜられ、翌年參議兼海軍卿に陞進した。八年元老院議官に任ぜられたが、直に辭し、爾來閑居してまた劇務に執掌しなかつた。二十年伯爵を授けられ、二十一年樞密顧問官となつた。明治三十一年、七十七歳で薨じた。戊辰の役に際しての彼の活動については、本課の文が語つてゐるが、尙「氷川清話」の編者は次の如くいつてゐる。

戊辰の役、官軍東征の途に上るや、幕臣或は遣へ戦はんと欲するものあり、江戸の人心恟々たり。然れども將軍固より戰意なきを以て、翁に命じて之に處するの策を講ぜしむ。翁、命を拜して危難の際に處して動かさず。總裁官駿府に到らせ給ふに及び、上野の輪王寺宮駿府に至り、將軍の恭順の狀を陳じて寛典を乞ふ。總裁官、謝罪の實なきを以て、未だ之を許し給はず。翁また山岡鐵舟等を遣はして之を請ふ。既にして官軍の先鋒品

川に至り、將に江戸城に入らんとす。是に於て翁自ら赴きて參謀西郷隆盛に面し、將軍の旨を陳列して百方その調停を盡力す。隆盛之を容れて、直に進撃中止の令を下し、狀を總督の宮に啓す。之によりて官軍一刃を動かさずして、江戸城に入ることを得、王政復古の大業、平和の間に成就す。翁が絶倫の大手腕は實にこの時を以て天下に顯れたり。

3 編纂の用意

少年修養の一助として、偉人の風手に親炙させたいと思つて本課の文を選んだのである。

維新の人物中、その輪廓の大きい點、その赤心の流露した點、その人情の厚かつた點などで、西郷南洲は他の追随を許さぬ人である。維新人傑中の第一人者といふべきであらう。南洲の人物や功績については本課・次課の本文でも知られるし、又世人のよく知るところである。ここでは特に、南洲の果斷大度と、海舟の識見洞察とが、圓滿に將軍慶喜をして歸順の實を擧げしめ、江戸百萬の生靈と數千億の資財とを安きに置き、新日本の今日の發展を見るに至らしめた大きな原因となつてゐることに想到して、兩雄に對する敬慕の念を益々深めしめたい。

4 要旨

英雄よく英雄を知るといふ。話にされる西郷も英雄であるが、話す海舟も亦英雄である。西郷の宏懷偉度、いはゆる「大膽識と大誠意」とは、この江戸城受渡の際に於ける交渉によつて、殊によく發揮されてゐる。本文は當時の全權大使格であつた海舟翁の直話で、率直な話しぶりの裡に、西郷の大人物たる面目を躍如たらしめてゐると同時に、また海舟翁自身の沈勇、よく死生一髪の間縦横の機略を發揮した有様を想見せしめるものがある。即ち、この兩英雄の肝膽相照らしたところを十分に考察させ、又、逸話といふものに、正史で味ははれない津々たる興味のあることに着眼させたい。

5 概説

第一節（二七四頁—二七七頁一行） 「世に處するには如何なる難事に會つても臆してはいけぬ。」といふ一般論から、西郷隆盛の大度胸であつたことに感心した旨を述べてゐる。

第二節（二七七頁二行—二七九頁七行） 江戸城に攻め入らうとする官軍の參謀西郷と自分との薩摩屋敷での會見の様子、殊に西郷の大膽識と大誠意とを敘した。

第三節（二七九頁八行—一八〇頁） 當時薩摩邸内外の殺氣陰々たる中に於ける西郷の泰然たるところ、及び敵將を遇する彼の禮節ある態度を嘆賞してゐる。

6 取扱上の注意

□「水川清話」の編者は巻頭に記して曰く、

皇城の西、水川河畔、幽邃絶塵のところに一邸あり。

邸は蒼然として古色を帯び、門前老松枝を垂れて地を掩ふ。門を入ること數十歩玄關を上り、進みて突き當りの西洋室より左折し、廊下傳ひに一室に入れば、之を隔ててその奥にまた一室あり。廣さ六疊、蒼蔚たる庭樹に對し、清麗淨潔、一點の塵氣を留めず、中に瀟洒たる鶴髮童顏の翁、淡然凡に凭りて白眼一世を睥睨し、來るものは大臣と書生とを問はず、華族と平民とを論ぜず、みなこの室に引きて、高談清話、時の移るを覺えざらしむるもの、これを海舟勝翁とす。

本課の文章即ち翁の言葉ぶりを玩味させるには、海舟翁の風采と四邊とを想見させることが、また必要であらうと思ふので、右の文を参考に掲げたのである。

□「要旨」にも述べた通り、西郷の大人物たることを知らしめるのは、海舟翁の話の目的でもあり、随つて又本課の目的でもあるが、これを語る翁自身の面目を知らせるのもおなじく重要な點であるから、こゝに生徒の意を拂はしめるやうに導かれたいものである。

□「江戸全市鎮撫の大任まで一切自分に任せて少しも疑はぬ（一七六頁）。この人に任ずることについては、更に海舟翁が當時を語つて、西郷は「後の處置は勝さんが何とかなさるだらうといつて、江戸を去つてしまつた。この漠然たる『だらう』にはおれも閉口した。」と言つてゐる。

□「色々むづかし議論もありませうが、私は一身にかけて御引受します」（一七八頁）かう言ふ言葉を裏書するものは、又次の「水川清話」の一節である。「西郷に及ぶことの出来ないのは、その大膽識と大誠意とにあるのだ。」

おれの一言を信用して、たつた一人で江戸城へ乗りこむ。おれだつて事に處して多少の權謀を用ひないこともないが、たゞこの西郷の至誠はおれをして相欺くに忍びさらしめた。この時に際して、小籌淺略を事とするのは、却つてこの人の爲に腸を見すかされるばかりだと思つて、おれも至誠を以て之に應じたから、江戸城受渡しも、あの通り、立談の間に済んだのさ。」

【一 同恭しく捧銃の敬禮を行つた】(一八〇頁)この時、翁は「おれは、自分の胸を指して兵隊に向ひ、何れ今明日中には何とか決着致すべし、決定次第にて、或は足下等の銃先にかゝつて死ぬこともあらうから、よく／＼この胸を見覚えておかれよ。」と言捨てて西郷に暇乞をして歸つた。(氷川清話)と語つてゐる。

7 設問

- 1 この文で、第一節の教へてゐることがらは何々であるか。(大膽・確乎たる方針・自信の必要)
- 2 西郷南洲の南洲たる特色は何か。
- 3 勝海舟の偉大なところはどこに窺はれるか。

8 釋義

【世に處す】 ヨにシヨす。世の中に住む。世の中に身を置くの意。

李洞の詩に「處世堪驚又堪愧」

【臆す】 オクす。氣おくれのすること。心がひるむこと。

【ねぢれるなら云々】 ねぢることが出来るなら、ねぢつて見よ。といふ意。

【ねぢる】 とは、くねりまがらせること。ゆがめまはすこと。

【料簡】 レウケン。思慮すること。考へはかること。考へ。思案。

【躊躇】 チウチョ。進まうとして進まぬ貌。ためらふこと。博雅に「躊躇猶豫也。」

漢書の季夫人傳に「哀斐回以躊躇。」註に「躊躇住足也。」

楚辭の九歌に「蹇淹留而躊躇。」註に「躊躇進退之貌」

【知己を千載の下に求む】 眞に自己を理解するものを千年の後に期待する。即ち時流に乗ずる短見者流の毀譽褒貶

を意に介せず、正と信ずる所を斷行して、後世眞に事理に明白な者の出る時、その人によつて今の自己を理解して貰はうといふのである。

【赤心】 セキシシ。少しもいつはりのない心。まごころ。

【貫徹】 クツンテツ。つらぬきとほすこと。こゝでは自動詞として用ひてあるから、「つらぬきとほる」意味である。

【時機】 ジキ。適當な機會。しほ。ころあひ。

【肝膽を吐露し】 情實を打ちあけて語ること。

韓愈の答陳商書に「不_レ敢_レ吐_レ情實。」

晋書の杜預傳に「大使光臨、使_レ吾披_レ露肝膽、沒_レ身何恨。」

【毀譽褒貶】 キョハウヘン。

「毀」は、やぶる。

「譽」は、ほめる。

「褒」は、ほめる。

「貶」は、けなす。

稱揚と非難排斥。

【區々】 クク。瑣細なさま。つまらぬこと。
【そこにゆくと】 さういふ點になると、そのやうな事について。

【西郷南洲】 維新の元勳で、且近世の偉人である。名は隆盛、通稱は吉之助、南洲はその號。維新後、功を以て賞典祿二千石を賜ひ、名聲都鄙に噴々たるものがあつた。

明治四年正三位に叙し、參議に任じ、六年五月陸軍大將に任ぜられ、參議を兼ねた。征韓論の起るや、在廷の官僚と議が合はなかつたので、職を辭して、故山に歸り、

嘗て賜ふ所の賞典祿を資として各地に學校を設け、薩藩の子弟を教育した。明治十年私學校生徒に擁せられて兵を擧げ、同九月戰敗れて城山に自害した。年五十一。

明治二十二年二月正三位を追贈せられた。

【高輪(タカナワ)の一談判】 江戸城明渡の談判。戊辰の春(慶應四年)の出來事である。この時隆盛は官軍の參謀として帷幄に參畫した。官軍が已に東海道を徇へて品川に到着したので、勝安芳は高輪の營にいたり、隆盛を見て徳川慶喜恭順謝罪の狀を陳べた。隆盛はこれを諾し、大總督

に白して、江戸城明渡の議は茲に成つたのである。

【ほとく】 非常に。いたく。たいさう。

【その談判云々】 戊辰三月十四日、芝、田町の薩摩邸で、西郷南洲(官軍の参謀)は勝安芳(徳川方の總裁)と會見して、江戸城明渡しの談判をした。

初め明治元年正月、鳥羽・伏見の變が起り、徳川慶喜が敗れて江戸に歸るや、朝廷は征東の師を起し、二月熾仁親王を大總督とし、西郷隆盛・林道顯を参謀として各部署を定め、東海・東山・北陸の三道から進んで江戸を攻めさせた。三月大總督は駿府に達し、師期を戒めたが、當時は徳川氏の兵力が猶熾で、糧食兵器は充實し、堅牢な軍艦はあり、剩へ譜代の諸侯並に旗本の諸士は大率死力を盡くして二百五十年の舊恩に報ぜんとしてゐたので、天下の形勢は測り知ることが出来なかつた。併し慶喜は偏に恭順の主義を取つて動かさず、勝安芳・大久保一翁等をして屬徒の激昂する者を制せしめ、江戸城を出て寛永寺に屏居した。勝安芳は時に幕府の總裁であつたので、山岡鐵太郎をして西郷の軍門に就いて哀を請はしめ

たが、議が合はなかつた。既にして三道の官軍は、江戸に迫り、東海道の先鋒は品川に着し、中山道の先鋒は板橋に、北陸道の先鋒は千住に至つた。是より先、西郷は江戸城の内情を偵察する必要があるとて、單身高輪の薩摩邸に入つたが、三月十三日全軍に令して三月十五日を總進撃の期と定めた。時に勝安芳は一書を認めて之を西郷に致し、一度會見して當面の問題について協議したい旨を申入れた。その書は次の通り。

三月十三日勝海舟が西郷へ送つた書。
昨年以來上下公平一致の旨あれども、各、其の中に私あり、終に當日之變に及ぶ者は、皇國人物乏しきに依る。就中伏見の一擧、一二の薩士を目して失錯あるは我最も恥づる所、堂々たる天下終に同胞相喰、何ぞ其陋なるや。我輩忠諫一死を以て報すべきも、其の失前日にあり、今日何の面目ありて口を開かむ。然と雖も、不日にして一戰、數萬の生靈を損ぜんとす。其戰や名節條理之正しきにあらず。各、私憤を抱藏して丈夫のなすべき所にあらず。吾人は是を知れども、官軍猛

勢、白刃飛彈を以て漫に虚勢を假り、胆怯之士民を劫せば、我も亦一兵を以て是に應ぜずんば、無辜の死益多く、生靈の塗炭益、苦しからんか。軍門實に皇に忠する志あらば、宜しく其條理と情實を詳にし、後一戰を試むるも可なり。我輩も亦能く其正不正を顧みて、漫りに輕擧すべからず。嗚呼我主家滅亡に當つて、一名節大條理を持ち、從容死に就く者無は千載の遺憾にして、海外の一笑を招くのみ。我輩是を知れども、力支ふる能はず。共に魚肉せらるゝ者は、深怨銘肝、日夜焦思し殆んど憤死せんとす。其の心裡を詳察あらば、軍門に臨み一言を談せむ。幸に熟考せられれば公私の大幸、死後猶生るが如くならむ。謹言。

辰三月

勝 義 邦

参謀軍門

西郷は書を得て直に快諾した。是に於て、翌十四日勝安芳は先づ芝の田町にある薩摩邸に到り、高輪なる西郷に書を送つて其の來駕を求めた。西郷は返書(教科書に挿入した)を贈り、直に田町に赴いて江戸城明渡の事を議した。

【参考】 十五日官軍江戸城侵撃と云ふ。其の略「三道の

兵必死を期して進まば、其の後路の市街を焼き、退去の念を絶たしめ、城地に向ひて其の死を期せしむ」と。今日我嘆願を聞かず、猶其の策を擧げて決戦なさんとせば、城地灰燼、無辜之死數百萬、終に遁れしむる能はず。彼れ此暴擧を以て我に對せば、我も亦彼が進むに先んじ、市街を焼き、其の進軍を妨げ、一戰焦土を期せずんばあるべからず。此の意を決して此の策を設け、今日の對應、誠意に出づるにあらざれば恐らくは貫徹なし難からんか。不肖是に任じ、一點疑を存せず。若し百萬の生靈を救ふにあらざれば、我先づ之を殺さんと、斷然決心して其の策を回らす。我西郷氏へ此の旨談判の末、同人靜かに答へて云ふ、此の談判の決答、一日にて決する能はず、今日府中へ出發、督府へ言上すべし。又明日進撃の令ありと云ひて、村田新八・桐野利秋を呼び、見合せの趣旨を述べ、從容平素の如く他語に及び、毫も大事に臨める體なく、面色溫和、一別以來の事を述べ、餘事に及ぶ。我心中竊に驚

く。襟度寛大、一點の私念を挟まず。嗚呼今日ある、實に此の意匠に出づるなり。云々。

(海舟の日記、斷腸記による)。

【芝田町】 シバ、タマチ。現在の東京市芝區田町。そこに薩摩藩の倉屋敷があつた。

【薩摩風の下駄】 臺の幅が廣く、駒下駄に似て、兩ぐりもなく、表もない。今の所謂薩摩下駄はこれから出た。

【熊次郎】 姓は永田、西郷家譜代の従僕。熊次郎は別に學問の素養などあつたのではないが、性温厚忠直、義氣に富み、その自然に備はる品格は人をしてこれも大西郷の感化であらうとせざるに感服せしめる程であつたといふ。常に西郷に隨從して辛酸を共にし、よく忠勤を勵んだが、西南の役の起つた際は、その少し以前から事を以て西郷の機嫌を損じ、目通りの叶はぬ折であつたから、隨ふ事が出来ず、西郷の子菊次郎に隨つて従軍し、菊次郎の負傷した時などは、専らその介抱に力をつくした。亂が平いで後、東京に出て西郷從道家に仕へ、後同邸で老死した。

【挨拶】 アイサツ。本義は群衆を排除して進む義。「挨拶」は推す義。「拶」は前にあるものを排除して進む意である。

葛長庚の鶴林問道篇に「昔者天子登封三秦山。其時士庶挨拶。獨召三縣尉、行轎而前、呼曰、官人來。衆皆靡然。」

揚子方言に「強ひて進むを挨拶と曰ふ。」

正字通に「今の俗、凡そ物相近づくを挨拶といふ。」

「拶」は通れる義、相排進する義、故に前にあげた「士庶挨拶」は士庶が天子の行幸を拜見しようとして大勢群集するをいふ。又禪話に、學者を勘辨するに拶一拶すといふ。一挨拶の語がある。皆問答の語機をいふ。又長庚が詠梅詞に「松挨拶、更堪霜雪。」これらは皆我が國で用ひる挨拶の語義とは大いに異なる。

我が國では、答禮又は返禮、應對、接待、又は應對の辭等の義として用ひる。此處に謂ふ所の挨拶も、應對の辭の意である。

【生靈】 セイレイ。生民と同じ。(性情を有する生物の意に用ひることもあるが、こゝのとは別である。)

晋書の慕容傳に「生靈仰其德、四海歸其仁。」

「イキリヤウ」と讀めば全く別の義となる。

【社稷を保つ】 シヤシヨクをタモつ。社稷宗廟(社稷と云つて宗廟をも含む)の祭祀を保持繼續して行くの義。社稷といふ語は、多く天下・國家の義に用ひられるが、この課にいふ社稷はその意でなく、民に主たる家の義である。即ち徳川家が滅亡の非運を免れ、その子孫がますます繁榮して社稷の祭祀を保つことが出来ることをいふ。社稷の意義は、社は土の神、稷は穀の神である。國は土と穀とによつて蒼生を養ふものであるから、民に主となり國を治める者は、國を建てるや否や、まづ宗廟と共に此の社稷を立ててこれを祀るのである。

禮記の祭義に「建國中神位、右社稷、而左宗廟。」

又白虎通に「王者所必有社稷。何、爲天下求福報功。人非土不立、非穀不食。故封土立社、示有土尊。稷五穀之長、故封稷而祭之也。」

即ち國が始めて起り、王者(列國に於ては諸侯)が始めて立つ時は、必ず新に社稷・宗廟を建てて祀り、國が減びて王室(諸侯

家)の亡びる時は、その社稷・宗廟は祭祀が斷絶し、空しく廢墟となる。而して又新に起つた王室や諸侯の社稷・宗廟が立てられるのである。かく社稷・宗廟の祭祀は國家の興廢・王室(諸侯)の存亡と相伴ふものであるが故に、社稷の祭祀(又は單に社稷)と言つて、國家の意(一種の)ともなり、又は此處に用ひられたやうにその君家の意ともなる。

【自家撞着】 ジカダウチャク。自ら言ふことが前後つちつまの合はぬことをいふ。着は助語である。

禪林類聚の看經門に「南堂靜云、須彌山高不見巔、大海水深不見底、簸土揚塵無處尋、回頭撞着自家底。」

【屯集】 トンシフ。たむろして集り居ること。當時徳川氏の舊臣中には形勢の非なる事を知りつゝも、なほ官軍に抗し、一死以て三百年の恩顧に報いようとするものがあつた。又薩長の二藩は幼少の天皇を擁して私を謀るものであるから、須らくこれを誅滅すべきであると唱へるものもあつた。

これら過激の主戦論者は(當時之を激)幕府の恭順説に不満を抱き、各所に屯し、兵を集めて幕府の當路者を意氣地なしと罵り、密事を企てるものがあつた。こゝは、此等の徒をさして言ふのである。

【恭順】 キョウジユン。つゝしみしたがふ意、即ち反抗せぬ意。

【野暮】 ヤボ。野夫の音轉であらうといはれる。武骨、無意氣、不粹などの意として風雅の心のないことにも用ひるが、こゝでは世情に通じない意、又は理にくらい意に用ひてある。

【明】 メイ。物事を辨別する明智。物事を正しく見わけ得る識見。

【斷】 ダン。物事をおしきつて行ふこと。決斷。果斷。



【桐野】 キリノ。名は利秋、鹿兒島の藩士、もと中村半次郎と稱した。幼より學術を修めず、武勇を好んだ。常に京師の第に在つて勤王の志を抱

き、西郷隆盛と意見が合はなかつたので、獨立して事に従つた。慶應三年の冬、將軍徳川慶喜が京師に入朝し、一晝夜で退いた。利秋は直に兵を率ゐて、會津の護衛兵を逐ひ、之に代つて宮門を守つた。翌年正月伏見の役には、先陣として大いに會津・桑名の兩軍を破り、功を以て小隊の小頭見習となつた。尋いで征討總督が東海道を進撃した際、利秋は先鋒となつて小田原に到着した。この時、上野輪王寺宮は自ら總督府に到り、慶喜の恭順の意を陳べんとし給うたが、利秋が許さなかつた。そこで、宮の從僧は黄金六十枚を以て利秋を動かさうとした。利秋は大いに怒り、從者をして「親王が駕を枉げ命を賜うても、これは先鋒隊の關知せぬ處である。徳川慶喜が眞に王命に恭順であるならば、宜しく自ら謹慎して、命を乞ふべきである。」と答へしめ、進んで藤澤驛に到つた。この時東山道の先鋒は板橋驛に到着してゐたので、兩道相應じて、三月十五日を期し江戸に入らうとした。偶、江戸城明渡しの談判が成立し、總進撃が停止せられたので、利秋は隆盛と共に江戸城を収めた。奥州征

伐にあつては、自ら加治木口の兵を率ゐて間道から進み、白河口の兵と合して、共に會津城を攻めて之を陥れた。功を以て軍監に補せられ、陸軍少將に任ぜられた。後蝦夷を巡視して歸り、屯田の議を上つた。五年二月鎮臺の司令長官となり、六年五月正五位に敘せられた。征韓論の起るに及び、隆盛とその議を同じうし、遂に無二の友となつた。隆盛の職を辭するや、利秋も亦職を辭して鹿兒島に還つた。是より私學校を建てて壯士の養成に従つた、十年二月隆盛を推して兵を擧げ、肥・薩・日・隅の間に戦ひ、敗れて鹿兒島の城山に入り、九月二十四日隆盛と共に城山に自刃した。

大正五年四月正五位を追贈せられた。

【殺氣陰々】 サツキインイン。殺伐の氣のもの凄いさま。史記の律書に「武王伐紂、吹律聽聲。推孟春以至季冬、殺氣相并。而音尚宮、同聲相從。物之自然、何足怪哉。」

とある。正義に之を註して「人君暴虐酷急なれば則ち常に寒應ず。寒は北方に生ず、乃ち殺氣なり。武王紂を伐

つ時、律を吹きて春より冬に至る、殺氣相併せ、律も亦之に應ず。」と。

寒氣の義にも用ひるが、こゝのは、ものすごい氣即ち殺伐の氣の義。

「陰々」は黯黹として物すごい形容。

【捧銃】 サ、ゲツ。軍隊に於ける執銃の敬禮。

【幕府の重臣】 大老・老中・若年寄等幕府の大政に參與するものをいふ。但し慶應三年七月職制が改められ、從來の老中月番の制を止めて、國內事務總裁・會計總裁・外國事務總裁・陸軍總裁・海軍總裁の五總裁を置かれた。これが即ち幕府の重臣である。

勝安房守は慶應四年四月海軍奉行並から破格の拔擢を受けて海軍總裁に補せられ、次いで國內事務總裁に任ぜられた。

【天空海潤】 テンクウカイクツツ。天の空しきが如く、海の潤きが如く、度量が宏大、氣象が壯快で、腦中に何等の障碍のないことにいふ。

【外國の事情などは却つて自分が話して聞かせた位だ云々】

勝海舟は夙に蘭學を學び、海外の事情に通じてゐたので、安政二年正月には蕃書翻譯勤務を命ぜられ、同七月には長崎に遣はされて、蘭人について航海術を研究せしめられ、又同六年には米國派遣を命ぜられた程であつたから、其の海外の事情に明らかであつたことは西郷などの及ぶところではなかつたのである。西郷が始めて勝氏に面會した時、國許の大久保へ送つた手紙に、

勝氏へ初て面會仕候。實に驚入候人物にて、最初打ち叩く積りにて、差越候處、頓と頭を下げ申候。どれ丈智略あるやも知れぬ鹽梅に見受申候。先づ英雄肌合の人にて、佐久間より事の出來候儀は一層卓越候はん。學問と見識に於ては佐久間の方拔群の事に候へども、現事に臨み候ては此勝先生に若かず云々。

とある。これによつても、西郷も夙に海舟の材幹を敬重してゐたことがわかる。

【絶倫】 ゼツリン。等類より抽んですぐれること。

拔群・絶類と同じ。

漢書に「經濟絶倫。」

蜀志に「未^レ及^ニ得^ル之^ノ絶^ト倫^ト逸^ト群^ト也[」]

9 挿 圖

勝海舟筆

亡友帖に載せた海舟の筆蹟で、戊辰三月の高輪に於ける西郷との會見の事を敘した一節である。

西郷南洲書翰

釋義欄で説明してあるやうに、勝海舟は江戸城明渡についての談判申込みの手紙を、慶應四年三月十三日西郷隆盛に送つた。それに對する西郷の返書がこれである。

西郷南洲

伊太利人キヨソネの筆。西郷隆盛の寫眞は世に傳らない。この肖像畫がその面影を最もよく偲ばせるものとして重寶かられてゐる。

10 参 考

■事件の大略

慶應の末年、將軍徳川慶喜は大政を奉還し、尋いで鳥羽伏見に敗れ、江戸に歸り、上野に蟄居した。つゞいて官軍の兵が、東海・東山兩道から進んで、江戸城に迫つ

た。幕府譜代の恩顧の者はこれを見て憤慨に堪へず、頻りに徒黨を集合してこれと決戦しようとして謀つた。時に官軍大總督は諸軍を率ゐて駿府に在り、その先鋒は小田原に進んだ。幕府は使者を官軍に遣はし、大總督に謁して開陳せしめようとした。そしてその任にあたるべきものの選任を安芳に命じたので、安芳は山岡鐵太郎を推舉した。鐵太郎は大總督に至り、使命を全くして歸つた。

この時に當り、東山道から進軍した官兵は、所々の戦に勝ち、勢に乗じて武藏の八王子に到つた。この報が大總督のもとに達したので、西郷隆盛は自ら江戸城の内情を探知してその所置を決する必要があるとて、晝夜兼行して三月十三日池上に達した。是に於て安芳は山岡を池上にやり、明日を以て自ら西郷と會見せんことを求めた。西郷はこれを諾した。

これが近世史上有名な江戸城明渡の談判である。時に官軍の大兵は東海・東山・北陸の三道から江戸城に進行して將に江戸城を壓しようとし、城下の騷擾は名狀することも出來なかつた。殊に少壯血氣の徒は官軍との決戦を

求めて逸り立つた。安芳は、大久保一翁と共に慶喜の命を受けて極力これを鎮撫しようとして力めた。既にして安芳と西郷とは私に薩藩の倉屋敷に會し、善後の策を決定し、明日を以て幕府の有志が連署して哀訴状を作り、これを官軍の先鋒隊に提示して後事をはからうと約した。翌日安芳は幕府有志の哀訴状を携へて薩藩の邸に赴かうとしたが、大久保一翁は極力これをとどめ、他人を以て代らしめようとした。しかし安芳は單騎薩藩邸に赴いた。その歸途安芳は狙撃を受けたが、幸に免れた。慶應四年(明治元年)四月二十一日江戸城を官軍に致し、軍艦銃砲を納め、天下の大亂を未然に防いだ。

勝海舟が後年この事件と西郷南洲とを回顧して作つた詩があるから左に掲げよう。細字は編者の註である。

戊辰進撃日。 三月十五天。

蝸牛角上闘。 轉瞬廿五年。

慶應四年戊辰の年の三月十五日、官軍の江戸城進撃があるはずであつたが、これは大局から見れば、蝸牛角上の争で、區區たる國內に於ける無價値の闘であつた。その時より早くも二十五年の歲月を閲した。

皇國一大府 此中無辜民

如何爲^レ焦^レ土^ト。 思^レ之^レ獨^リ傷^レ神^ト。

皇國の大府たる江戸への進撃。この江戸には何等罪もない幾十萬の民がある。こゝを兵戦の巷となし、一朝にして焦土に化せしめることがどうして出来よう。自分は此のことを考へて、ひとり心をいため、善後策を圖つたのであつた。

八萬幕府士。 罵^レ我^ヲ爲^ス大^ニ奸^ト。 知^ル否^キ奉^ル天^ノ策^ト。 今^レ見^ル全^ク都^ノ安^ト。

そして遂に戦争を避けて恭順の誠を示し、徳川氏を救ひ江戸を救ふの謀に出たのであつたが、此の時幕府譜代の旗本八萬の士は我を罵つて大奸人なりとした。しかし、それは我の天に奉ずる策の果して是なるか否かを分別しての罵詈であつたらうか。二十五年を経た今日、東京全都の平和安泰なのは、いさゝか我が策の當否如何を語る生きた事實ではあるまいか。

參軍勿^レ嗜^ル殺^ス。 嗜^ム殺^ス全^ク都^ノ空^ト。 我^ニ有^ル清^ノ野^ノ術^ト。 效^ス善^ク挫^ク那^ノ翁^ト。

しかしして官軍の參軍西郷も我が意見と同じであつて、決して戦闘を好まなかつたから、この自分の策が功を奏したのである。若し西郷が、戦争を好んだならば、全都はその時に壊滅してゐたはずである。何となれば、一旦戦争がはじまれば我は清野の術をもつて、あたかもナポレオンをモスコイに於て破つたロシアの方略をまねるつもりであつたから。

(清野の術とは、野の作物や家屋等を全部はらひのけ、攻め來

る敵をして糧食宿舍の便を得しめない戦略をいふ。)

官軍逼^ル城^ヲ日^ト。 知^ル我^ノ唯^ニ南^ノ洲^ト。

一朝誤^ル機^ヲ事^ト。 百^萬化^シ獨^リ體^ト。 官軍進撃の時に際して、眞に自分を了解してくれて、自分の申出に賛してくれたのは、唯南洲一人であつた。あの當時に於て、一朝取るべき方策を誤つたならば、江戸百萬の市民を悉く獨體と化せしめたであらう。

二四 南洲遺訓

西郷 南洲

1 解題

「南洲遺訓」の抄録である。「南洲遺訓」は全一冊。片淵琢編。明治廿九年研究社發行。木版で「命チモイラズ名モイラズ官位モ金モイラヌ人ハ仕末ニ困ルモノ也。」といふ風に刷つてある。

2 作者

西郷南洲

サイガウ ナンシウ。

明治維新の功臣。島津藩の勘定小頭左兵衛の長子。幼名は小吉。長じて善兵衛といひ、又吉兵衛と改め、後、吉之助といつた。隆盛は明治以後の名で、南洲はその號である。藩主島津齊彬に拔擢され、幕末命を奉じて京都の公卿及び諸藩の間に勤王の大義を唱道した。井伊大老が志士の逮捕を始めた時、難を避けて僧月照と共に本國に歸つたが、齊彬が薨じ、藩廳が月照を日向に避けしめたので、隆盛は遂に月照と相擁して海に投じた。けれども、隆盛のみは救はれた。時に安政五年十一月であつた。後、大久保利通、木戸孝允・小松帶刀等と薩長の聯合を結び、遂に討幕及び王政復

3 編纂の用意

古の大業を成した。戊辰の役には、參謀として有栖川宮熾仁親王に従ひ、幕臣勝安芳と會見して江戸城を受取つた。明治四年參議、五年陸軍元帥・近衛都督となり、六年陸軍大將となつた。偶々、征韓論の起るや、岩倉・大久保・木戸と議合はず、職を辭して故山に歸り、私學校を起した。十年その子弟に擁せられて兵を擧げたが、戦敗れて、十年九月二十四日城山で自刃した。年五十二。十二年、朝廷特赦して賊名を除き、正三位を追贈した。三十五年更にその遺勳を追賞され、嗣子寅太郎に侯爵を賜はつた。

4 要旨

前課に於て、海舟の觀た西郷南洲を讀んだが、その海舟が極力稱揚した南洲をその自身の言葉を辿つて窺ひ知らしめたい。且その言葉のうちに遺憾なく言ひあらはされてゐる南洲の處世觀を詳かにせしめ、以て生徒修養の資とさせたい。

人は常に正道を踏むべきである。また天を敬し天に學ん

で、我を愛する心を以て人を愛せねばならぬ。元來己を愛するは善くないことである。己の過を悟つたならば、直に第一步を踏出せばよい。徒らに悔いても詮がない。命も名も地位も金もいらぬといふ人でなくては國家の大業は出来ない。自信が強く篤くなければ、道は行ひがたい。要する所は誠である。誠さへあれば、知己を後世に得るのである。

5 概説

特に系統的に順序を立ててはないが、大體は次の如くなる。

第一節(一八一頁—一八二頁一行) 人は正道を以て一貫すべきをいふ。

第二節(一八二頁二行—一八三頁一行) 天と人と我とに就いて、第一に天を敬し、次に我よりも人を主とし、最後に我を愛することの非なるを説く。

第三節(一八三頁二行—末行) 前節の続きとして、殊に我の過・欲望・信念に關して教へてゐる。

第四節(一八四頁) 一箇の誠の大切なことを再言し、本

文としては、第一節の正道の訓と前後相應じてゐる。

6 取扱上の注意

素朴真率な書きぶりの裡に、自ら力づよく表はれた西郷南洲その人の面目を偲び、その一言一句にも格言的含蓄の存する點を玩味せしめたい。しかも要するところは「誠」の一字に歸することを考へしめて、生徒各自の反求の功に資するやうに導かれたい。

南洲翁について、前課では噂に聞き、本課では直接にその人の言を聴いてゐるのである。さすがに翁の遺訓であると思はせるものがある。海舟の話も、本文によつてますますその印象を強められるやうに感ずるが、やはり直接の話の方が、讀者には直接に響くところがある。文は人なり (Style is the man himself) の感は、前課や、かういふ文で特に強く覚えしめられる。この訓は南洲にして始めて言はれることで、又南洲であつて始めて意味があるのである。

「始末に困る人ならでは云々」(一八三頁七行)、この「始末に困る」といふことに就いては、次の坂本龍馬の評が聯

8 釋義

【正道】 正しい道。

宋史に「以正道自恃。」

【至誠】 心が純一で、いつはりのないこと。極めて眞實な

中庸に「唯天下至誠、爲能經綸天下之大經。」

又同書に「誠者天之道也。誠之者人之道也。誠者不勉而中、弗思而得、從容而中道、聖人也。誠之者、擇善而固執之者也。」

論語に「至誠通天。」

孟子に「誠者天之道也。思誠者人之道也。」

漢書の李廣傳に「李廣守北平、出獵、見草中石、以爲虎射之中、沒鏃、視之石也。明日復射之、石不能入矣。」

劉子駿といふ者が嘗て之を楊雄に問うた時、楊雄は「至誠なればなり。故に金石これが爲に開く。」と答へた。

【詐謀】 サボウ。いつはりのはかりごと。不正なる計略。

【作略】 サリヤク。はかりごと。てだて。

想される。即ち

「成程、西郷といふ奴はわからぬ奴だ。小さく叩けば小さく響き、大きく叩けば大きく響く。もし馬鹿なら大きな馬鹿で、利口なら大きな利口だ。」とは、坂本龍馬が西郷に初めて會つた時の評である。(水川清話に據る)

7 設問

1 この遺訓に一貫してゐる精神は何であるか。(正道即ち誠)

2 南洲の大膽については前課で學んだが、その大膽はどうしてどこから養はれたと思ふか。(天を敬し、天を相手としたところから)

3 俗にいふ「始末に困る」意義と、こゝに言ふ意義とはどう異なるか。

4 己を愛するが爲に、修業が出来ないといふことを、各自の日常について言うて見よ。(寒いと言つて寒稽古を怠る者、眠いと言つては宿題をやりきらない者などは、それだ。)

【きつと】 屹度。必ず。たしかに。

【迂遠】 ウエン。まはり遠くて當座の用に立たぬこと。

「迂」は説文に「避也」、又玉篇には「遠也」とある。

史記の孟子傳に「迂遠而測事情。」

【さきに行けば】 あとになれば。

【道】 天地の道理に基いて人間の必ず履み行はねばならぬこと。

中庸に「天之命之謂性、率性之謂道、修道之謂教。」

【人を相手にせず、天を相手にせよ。云々】 世の人の毀譽

褒貶を顧みず、天道に従ふべしとの意。更に言へば、世の

毀譽褒貶に心を動かすことなく、ひたすらに己がまごこ

ろを盡くして天の照鑒を仰ぎ、天運に安んぜよとの意。

論語の憲問篇に「子曰、不怒天、不尤人、下學而上

達、知我者其天乎。」とあるのも、これと同様の考であ

る。

書經に「天道福善禍惡。」

老子に「天地無親、常與善人。」

【己を愛す】 自己をいたはる。

【過を改む】

論語に「過則勿憚改。」又「過而不改是謂過矣。」

又、「子貢曰、君子之過也、如日月之食焉、過也、人皆

見之、改也、人皆仰之。」又「子貢曰、小人之過也、必

文。」

左傳に「人非聖人、誰能無過、過能改、善莫大焉。」

【伐る】 ホコる。

【驕慢】 ケウマン。おごりたかぶる。

漢書の五行志に「奢淫驕慢、則士失其性。」

【茶碗を割り云々】 昔後漢の郭林宗が嘗て樹下に憩うた

時、一人の男が陶器を荷うてそのあたりを通つた。時に

何故にか、後方に荷うてゐた陶器が地に落ちて壊れた。

その人は顧みもしないで行く。林宗が怪んでその故を問

ふと、その男が答へるやう、「壊れたものは見ないでもよ

い。見たとて何の益があらう。」と言つた。林宗はその言

を奇とし、その人を推轡したが、後遂に著名の人物とな

つたといふ。この事は後漢書に出てゐる。

【毀る】 ソシる。

【足らずとせず】 不足不満に思はぬ。

【曾我兄弟】 十郎祐成（幼名一萬）、五郎時致（幼名宮王）

の兄弟。伊東祐親の孫。河津三郎祐泰の子。始め父祐泰

が、一族工藤祐經のために殺された時は、一萬は五歳、

宮王は三歳であつた。母は二子を携へて曾我祐信に再嫁

した。時に祐經は頼朝の眷遇を得て多大の勢力であつた

が、かねて頼朝が、事を以て祐親を怨んでゐることを知

り、間に乘じて二子を殺さうと企てた。しかし高山重忠

等の切な願によつて命を助つた。母は宮王を箱根の僧行

實の弟子にしようとしたが、宮王は僧となることを欲せ

ず、曾我に歸り、兄弟専ら復仇の策を運らした。建久四

年頼朝が富士の裾野に狩したとき、祐經もこれに従つ

た。兄弟は大いに喜び、五月二十八日夜、祐經の營を襲

うて仇を報じた。會、雷雨のために闇黒を極め、加ふる

に不意の出來事のために營中騒擾し、頼朝の將士は倉皇

として出でて鬨つた。兄弟は數人を殺傷したが、衆寡敵

せず、兄十郎は仁田四郎忠常に殺され、弟五郎は奮進し

て頼朝の營に突入し、小舎人五郎丸に擒へられ、頼朝に

復仇の主旨を辯明した。頼朝はこれを壯として宥さうと

したが、祐經の子犬房丸の哀訴によつて遂にこれを斬つ

た。時に祐成は二十二歳、時致は二十歳であつた。

【僥倖】 ゲウカウ。こぼれさいはひ。まぐれあたり。

「僥」は「僞」の意、「倖」は「幸」の意。

書言故事に「僥倖所謂不得當而得者。」

班固の奔旨に「優者有不得遇、劣者有僥倖云々。」

又利を求めて止まぬことにもいふことがある。

集韻に「僥倖求利不止貌」とあるのは是である。

莊子に「此以三人之國、僥倖也、幾何僥倖不喪三人之國。」

こゝでは無論前者の意。

【知己】 チキ。善く己の心を知る人の義。眞の友。

史記の刺客傳の豫讓の語に「士爲知己者死、女爲説

己者容。」

9 参考

西郷南洲の人物についてはなるべくその要點を摘んで生徒に話してやる必要がある。参考として次に西郷南洲の人物評と、南洲の性格とを見るに足るべき書簡とを載せ

尾崎行雄の西郷南洲論

有史以來時を閱する幾千載、所謂英雄豪傑も亦多し。或は名言德行を以て勝り、或は鴻業偉勳を以て勝る。而して皆能く多少の聲望を當世に繋ぎ、湯仰を後昆に得ざるは無し。而してその聲望湯仰の深淺大小を較ぶるに、亦多く言行事業の大小深淺に伴ふものあるが如し。獨り我が西郷南洲に至つては、古來の英豪と全く選を殊にし、徳望の隆洽なること遠くその言行事業の上に出づるを見る。南洲の言行欽すべからざるに非ず、事業慕ふべからざるにあらず、但その言行事業は未だ彼が如き仰望を博するに値せざるを思ふ。余この疑問を懐いて左思右考するもの多年、これを先輩に質し、これを史籍に稽へ、種々の方面より解釋を試みて、遂に獲る所なし。竊かに以て憾となす。然るに偶然の感興は一朝にして俟ち多年の疑問を氷解せり。

曾て東京市立養育院を巡視す。收容する所は皆是貧苦にして、自立すること能はざる者に係ると雖も、熟その狀貌を視るに、富貴の相を具へて、爾く貧困なるべからざる者間、これあり。これを當局者に諮るに、果然彼等の中には高等官の職に在りし者あり、巨萬の富を擁せし者あり。然るに不期の變に遇ふに方りて直に養育院中の人となるは、榮枯の變化亦激しからずや。人各、親屬あり、故舊あり、艱難相濟ひ、變災相弔して、容易く凍餒の甚だしきに至らず。この輩にして獨り艱難を濟ひ、變災を弔する親屬、故舊なしといふは頗る奇とすべし。こゝに於てか謂へらく、「墮落

この極に及ぶものは、その身に固有の性癖ありて、自ら不幸を招致するにあらざるなきを得んや。」と。乃ち卒然として當局者に問うて曰く、入院者一般に通ずる特質と稱すべきものあらんか。若しこれあらば、願はくは與り聞くを得ん。」と。余は卒然として疑問を發したりと雖も、續つて又謂へらく、「これ蓋し深慮を要すべき大問題なり。當局者の經驗に豐なるを以てすとも、或は直に答へ難からん。」と。しかも當局者は聲に應じて答へて曰く、「然り、洵にこれあり。他人に對して同情を缺き、毫も自ら抑制すること能はざるもの、即ち一般に通ずる性癖なり。」と。余はその應答の甚だ速かなるに驚くと共に、一種の感興は油然として湧けり。而してこれと同時に回憶したるものを西郷南洲とす。

身高等官の位置に在りと雖も、家に巨萬の富を擁すとも、苟も他人に對して同情を缺き、獻身の熱誠なくんば、他人亦白眼を以て我を視る、一朝墜跌に遭ひて凍餒するも、亦顧みるものなき所以なり。畢竟社會は同情の交換を以て成る。知るべし、善惡の因、慶殃の果、應報の違はざることを影の形に隨ふが如きものあるを。社會は同情の交換を以て成立する所以を解し、同情を缺く者の遂に他の同情を買ふ能はざるを知らば、その裏面に於て徳望の歸する、亦由つて來る所あるを推すべし。而して南洲の面目始めて髣髴たるを得るに庶幾からんか。

これを維新の諸豪に視るに、南洲の果斷明決は甲東に如かず、謀慮周密は松菊に如かず、若し夫れ學藝才辯に至つては藤・隈二君に如かざること遠かるべし。しかも挺然として群を抜き、望を負

ふこと猶衆星の北斗に共ふが如きものありしは何ぞや。征韓の議破れて急流勇退し、孤馬に鞭ちて帝都を去るも、毫も怨嗟の風なく、悠々たる鹿城の天、犬を追ひ兔を獲して閑適自ら遣る。この間誰か叛心を藏すと謂はん。若し眞に叛せんと欲せば、前に前原の變あり、江藤の亂あり、必ずしも丁丑の歳を待たざるなり。況や重望彼が如きを以てして、干戈の外に施すべき方策なしと謂はんや。今に及ぶまで彼が叛跡を云々するは、未だ以て英雄の心事を解する者にあらず。彼固より行路の人に忍びざる情あり。況や多年艱苦を共にし、水火に出入し、愛子友弟に等しき配下に對するに於てをや。丁丑の死は即ち彼が是等の配下に捧げたる犠牲のみ。世或は月照の死に對して西郷を議するものありと雖も、余を以てこれを見るに、唯その跼天躋地の志士を憐む情に勝へず、これを救ふ道なきがため、自ら亦死を決して共に海に投じたるに過ぎず、漫りに揣摩臆測を逞しうして、種々の言議を挾むが如きは、英雄を以て兒女の情なしとするの妄に坐す。恭謙士に下る王莽も、或は以て一時の隆譽を博し得べし。人心の歸服を得んとして、恩を施し恵を加へ、強ひて笑を賣る者は、現に吾人の目撃する所、而して遂に南洲の萬一を庶幾すること能はざるは、多く人工の假作に出でて性情の自然に基づくかざればなり。塗粉は久しからずして剝落す、人工の假作は永く本來の面目を蔽ふ事を得んや。情熾なる時は智力或はその作用を鈍らす。一度動いて同情の念に驅らるれば、天下の大事に關する軀を遺れて、一故舊の爲に死を決し、百二都城の子弟に擁せられて、千載叛賊の名に甘ん

ず。大局の打算を誤るを笑ふ勿れ、兒女の情に同じきを嘲る勿れ。南洲の南洲たる所以こゝに在りて、而してその偉大なる所以亦實にこゝに存す。

一々利益を計較し、得失を打算し、自我を立つるに専らならば、他人亦此の如くにして我に對せん。その自ら衣食する能はざるに及んで、直に養育院中の人となる、亦怪しむに足らず。己を無みし、軀を捐て、他人の爲に同情せば、學問才藝の取るに足るものなくとも、猶能く衆心を得るに足らん。畢竟人望は同情の反射なり。我より注ぐ者を同情といひ、他より返る者を人望といふ。もとこれ一物にして、二あるに非ず。偉大ならんことを欲せば、先づその仁心を修養するを要す。人の冷酷を怨み、世の澆季を歎じて、その極社會の組織を非議する徒は、實に自ら省察するを急とすべし。余一日養育院に臨んで、偶然感興を催し、延いて南洲に關する多年の疑問を氷解し得たりと信ずるが故に、記して少年子弟研鑽の料に資す。(讀賣新聞)

山縣有朋が西郷南洲に送つた手紙

山縣有朋、頓首再拜、謹んで西郷隆盛君の幕下に呈す。有朋、君と相識る、こゝに年あり。君の心事を知る、また甚だ深し。曩に君の故山に歸養せしより、久しくその警咳に接することを得ざりしかど、舊雨の感、豈一日も有朋の懐に往來せざらんや。料らざりき、一旦滄桑の變に遭ひて、こゝに君と旗鼓の間に相見るに至らんとは。君が歸郷の後、世の鹿兒島縣士族の亡狀を議するも

の、皆曰く、「西郷實にその巨魁たり、謀主たり。」と。然れども有朋は獨りこれを斥けて、然らずとなせりき。しかるに今かくの如し。嗚呼、また何をかいはん。

然れども密かに思ふに、事のこゝに至れるは蓋し勢の已むを得ざるに出でしものにて、君の素志にてはあらざりしならん。若し君にして初より眞に異圖を懷きしならば、いかでかゝる名なき軍をかゝる機を失へる時に起さんや。薩軍の今公布する所を見るに、罪を一二の官吏に問はんとするに過ぎず。これ果して擧兵の名を得たりといふべきか。佐賀の賊まづ誅せられ、熊本・山口の叛徒次いで敗れ、今や天下の士民、漸くその自省の志を立てんとす。而して薩軍突如としてこゝに兵を擧ぐ。これ果して擧兵の機を得たりといふべきか。君の明識なる、豈これを知らざることあらんや。

説者また曰く、「天下不良の徒は、西郷の山林に韜晦したるを奇貨とし、これによりて功名を萬一に僥倖せんとする念を懷き、その辭を巧にして、ひたすら朝廷の政務を譏誣し、西郷に説くに「君出でずんば蒼生をいかにせん。君にして義兵を擧げなば、天下靡然としてこれに向はん。」との旨を以てせしならん。西郷の卓識なる、その譏誣たるを洞察するに難からざりしなるべしと雖も、その浸潤の致す所實に衆口金を熾かす勢ありて、知らず識らず、遂に事を擧ぐるに至りしならん。」と。聞く者これを然りとす。然れども有朋獨りこれを斥けて然らずとなす。何となれば、若し君にして誠にその志ありしならば、單騎兼下に来りて、從容として利

害のあるところを上言するに於て、何の妨もあらざるべければなり。

思ふに、君が多年育成せし壯士輩は、初より時勢の眞相をも知り、人倫の大道を履踐する才識をも備へたる者なるべけれど、かの不良の徒の教唆により、或はその一身の不遇によりて、その不平の念を高め、遂に一轉して悲憤の念を懷き、再轉して叛亂の心を生ずるに至りしならん。而してその名を問へば、則ち曰く、「西郷の爲にするなり。」と。情勢既にこゝに至る。君が平生故舊に篤き情は空しくこれを看過して、獨り餘生を完うするに忍びざりしならん。されば君の志は、初より生命を以て壯士輩に與へんと期せしに外ならざりしならん。

君が人生の毀譽を度外に置き、天下後世の議論を顧みざるもの故なきに非ず。嗚呼、君の心事、誠に悲しからずや。有朋ことに君既にかゝるに至る。これをいふとも何の益かあらん。顧みれば、交戦以來既に數月を過ぐ。兩軍の死傷、日々に幾百なるかを知らず。朋友相殺し、骨肉相食み、人情の忍ぶべからざるを忍びぬ。かゝる戦の如きは、古來、例なき所なり。而して戰士の心を問へば、共に寸毫の恨あるに非ず。唯王師はその職務の爲に、薩軍はその師西郷の爲に戦ふといふに過ぎず。それ一國の壯士を率ゐて、よく天下の大軍に抗し、劇戦數旬、百敗撓まざるもの、既に以て君が威名の實を天下に示すに足れり。而して今や君の麾下の勇將概ね死傷し、その軍威日々に衰へんとす。薩軍の遂に志を成

すこと能はざるは、既に明らかなるにあらずや。君更に何の望む所ありてか、徒らに守戦を事とせんとする。若し人の、「西郷は事の成らざるを知れど、暫くその餘生を永くせんが爲に、敢て千百の死傷を兩軍より出すを辭せざるなり。」といふ者あらば、有朋これに對ひて何とか答へん。願はくは君、早く自ら圖りて、一はこの擧の君が素志にあらざるを明らかにし、一は兩軍の死傷を明日に救ふ計をなせ。嗚呼天下の君を議する、實に極れりといふべし。國憲の存する所、自ら然らざるを得ずと雖も、思ふに君の心事を知る者、獨り有朋のみにあらざらん。然らば何ぞ公論の他年に定るなきを憂へん。故舊の情、有朋切にこれを君に冀望せざるを得ず。書に對して涕淚雨の如く、いはんと欲する所を悉す能はず。君少しく有朋が情懷の苦を察せよ。頓首再拜。

9 挿 圖

敬^シ天愛^ス人 南洲書

西郷南洲は、平生好んで書經のこの四字句を誦した。この扁額は南洲が特に市來政方の爲に書いて與へたものである。

中國文教科書教授備考 卷三終

中國文教科書教授備考 卷三 修正二十三版用

昭和十年二月二日印刷
昭和十年二月五日發行

非賣品

編者

光風館編輯所

發行者

東京市神田區神保町一丁目五番地
上原才一郎

發行所

東京市神田區神保町一丁目五番地
光風館書店



印刷者

東京市牛込區市谷加賀町一丁目一二番地
株式會社秀英舎
根本力三

吉田彌平編 修正二十三版

昭和九年十二月二十六日
文部省檢定済

中國文教科書

和裝全拾册

光風館編輯所編

中國文教科書教授備考

洋裝全拾册
(非賣品)



